
幻想組曲

之ち

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想組曲

【Nコード】

N5091Y

【作者名】

之ち

【あらすじ】

奏者とよばれる仕事がある。

彼らは古い時代より音により大地を空を、時には妖魔と呼ばれる者達を清めてきた。

その一人長瀬悠は日本の地で魔術師、笹塚笙子とともに仕事を始める。

第一章一話

七月が終わる頃、いつもの通り連絡もなしに唐突にその客人はやって来た。

大阪の天王寺駅より南下した阿倍野との中間に一区切りだけ人通りの少ない通りがある。その通りにはぎちぎちにマンションが並んでいるが無意識のうちに誰もが遠ざかっているようだった。内一棟、外装は綺麗で新築に見えるマンションの地下へ客人の車は姿を隠していく。ボンネットの中からドラムを叩くようなエンジン音が響いていたが車体と共に消えていく。今日も三十五度の猛暑日である。車を日の下に置く訳にはいかなかった。

彼女の車が入っていったのは真つ白の外壁が目を引くマンションの地下だった。新築のように見える白い外壁は今年の春、ようやく耐震強化を終えた改築時に塗り直されたもので周囲とは格が違いうにさえ見える。だが車の行き着いた先は地上とは別物だった。地下駐車場は地上からとは全く別の世界を作り上げている。耐震用に補填された鉄骨がそのまま見えている。まだ工事半分で放置されているようにさえ見えるのだ。そして増えた鉄骨のせいで車一台分停められなくなっている。特に六十年代のアメリカ製車両にはその身体を収納するにはきつい。

ハンドルをさばき起用に停める。エンジンを切って出てきたのはOL風の女。髪は襟元まで黒のスーツとよく合っている。助手席に置いていた茶色の紙袋を持って地上へと続く階段へと向かう。

「エレベーター欲しいわね」

ほんの僅かな時間でも額に汗がじんわりと滲む。昨今の天候というのは地獄のような猛暑となっている。太陽の下にいれば蒸し物になってしまうような暑さ。彼女も同じだ、黒いスーツにも汗が滲みだす。せっかくの新品なのにと肩がぐくりと落ちる。

彼女は目的の四階に着くとさらに奥へと向かって歩く。部屋の数

は少なく全ての階に三部屋となっている。その割になかは狭くワンルームである。ヒールがコンクリートを叩く音とセミの鳴き声だけが五月蠅く鳴っていた。薄暗く影になっている洞窟のような通路の最奥にたどり着くと間髪いれずに呼び鈴を鳴らす。そして一切の反応を待たずにドアを開けた。

まるで茶碗蒸しの蓋だった。ドアを開けた瞬間、これまでにないほどの熱風が彼女を溶かそうと噴出した。行き場を無くした熱風が吹き荒れたにすぎない。だが一息吸えば喉を焼こうとする風に息を飲むしかなかった。一旦顔を背けて息を整える。

「おはよう、悠」

現在、朝の十一時。すでにおはようと言う挨拶は相応しくない。挨拶の向こう側にあるのはフローリングが剥き出しになったワンルームの部屋。彼女の足元には靴が三足並んでいる。どれもロングブーツで黒色。気軽に出かけられるような靴はない。右手側のキッチンには新品同様で使っている感じはなかった。

「ちよつと聴こえてるの？」

少し大きめの声で部屋の奥に向かって言う。すると「聴こえてるよ」と関心無さそうな男の子の声が返ってくる。まだあどけなさが抜けておらず、いや幼さの抜けない女のように高い声をしていた。

四人も集まれば忽ち満員となるほどの部屋の奥に少年はいた。

部屋を速く歩いて一番に手にとったのはエアコンのリモコンだった。すぐに起動させると全開になっていた窓を閉める。どれだけ窓を開けていても風なんて吹いていないのだから関係ない。それでも少年は興味無さそうにしていた。

「笙子さん、鍵かけてないんだから勝手に入って来ればいいじゃないか」

壁には二本の人間の足を模した器具が並んでいる。床に腰を下ろして少年は愛用のギターに手を伸ばしていた。その少年、部屋の主である彼には脚がない。正確には膝から下が消滅している。壁にかけている義足がなければ立ち上がることは出来ない。笙子は義足を

一目見てから視線を落とす。少年、悠はギターの弦を張り替えている最中であつた。

「エアコン使いさないって言ってるでしょ、倒れるわよ」

「別に耐えられるよ。危ないって思ったら水も飲むし」

床に目をやればペットボトルが一本転がっていた。中身はあと半分程度残っている。エアコンが吐き出す冷気にようやく部屋の中で籠っていた熱が冷めていく。

「また背が高くなつたんじゃない」

悠は相変わらず床に座っている。立っているわけじゃない。見ても解らないはずなのに笙子には身体の成長は見てとれた。脚はなくとも成長はするものだ。

「そんなの良く解るね」

「当たり前でしょ、あなたの保護者なんだから、当然の事よ」

彼女の名前は笹塚笙子。少年の名前は長瀬悠。二人に血の繋がりはなく戸籍上も親子ではない。笙子は今年二十五になるが未婚である。現在は身元引受人として少年、長瀬悠の保護者をしているにすぎない。

「もつと伸びて欲しいけどね」

少年の身体はまだその歳ほどもない。膝から下が存在したとしても身長は百六十に満ない。もう半年もしないうちに十六になるというのに男っぽさはなく女の子のような背と容姿をしている。スカートを履いて外へ出れば男は気付かずに声をかけるだろう。

そんな悠の黒髪を撫でるとその手に持っていた茶色の紙袋に悠は目をやった。駐車場からの短いなかで底には水滴が溜まっていて色が変わっていた。

「それカルコサの？」

「食べたい？」

「もちろん」

カルコサは天王寺駅近くに最近出来たばかりの洋菓子店である。店には珈琲も飲めるカフェがあり中高生から二十代前半の女性でい

つも満員になっている。いつだったか笙子が適当に選んで店に入った事があった。そのときに食べたチーズケーキが絶品だったため悠に買ってきたのがきっかけだ。

絶妙な甘味と程よい弾力感が調和して口の中に幸せが広がる。パイ生地は硬くチーズの部分と口の中で調和する。至高の一品が手ごろな価格で味わえる。

紙袋から取り出したのは長方形の箱とアイス珈琲。水溜りはアイス珈琲から出たものだった。ギターのネック部分を器用に太ももにかけると、箱の天井を開くとさっそくそばかすにチーズケーキを一つ取り出す。ふんわりとした生地が指の先で弾けると口にする前に笙子を見た。

「仕事？」

アイス珈琲は床に置く。透明のプラスチックカップには水滴が溢れている。

「そうよ。テレビがないから知らないのも当然ね。今度支給してもらうから見なさい」

エアコンの風の一身に受ける彼女は写真を一枚差し出す。ケーキはそのまま受け取るとその写真を見た。青い海が広がり緑の島とコンクリートのビル群を繋いだ巨大な橋が写っている。

明石海峡大橋

関西地方に住むなら誰でも一度は見たことがあるだろう巨大な橋である。本州と淡路島を結ぶ巨大な橋が写真には写っていた。悠もよく知っている改めて確認することはない。

「今、兵庫県で連続している自殺についてイザナギから調査依頼がきたわ。何でも同じ場所で自殺が連続して起きていて、たった二週間ですぐに裏があると予測したって訳よ」

写真をよく見れば橋の中心でパトカーや警察が陣取っている。小さな豆のようなものだったとその服装や白黒パンダの車両が警察だ

と認識させる。

「自殺と僕に関係があるの？」

「単なる自殺なら悠の出番はないわね。イザナギも事件現場の確認を依頼しているだけなんだけどね。おそらく悠の力は必要になるわ」
「なんでさ？」

「感よ」

笹塚笙子の感は良く当たる。彼女の場合、感というよりは予見や予言に近い。これまでに得た知識と経験からの推測は、より正確さを増していくと以前語ったことがあった。

「まあ場合によっては悠の力は必要ないかもしれないわ。だから三日くらい経ったら着くようにして。もちろんそのギターも万全にしてね」

ギターを指す。エレキとも木製でもない。形状こそギターそのものだったが赤と黒の二色で構成された禍々しいものであった。

この部屋の中で見える私物といえば義足とギターくらいな物だ。

あとは作曲に使ったメモ用紙と文房具が散乱している分だけ。悠がギターを手にせずどこかへ出かける事はない。彼が生きていく上で必要なものだ。受け取って以来ずっと傍にある物である。

「当然、持っていくよ。でもなんでこんな依頼引き受けたの？ 確証はないんでしょ」

「贅沢は言っていない。ほら……こつちの世界じゃ卒業シーンが終わったばかりでしょ、だから新人の魔術師が多くてね。上から五月蠅いのよ、仕事はそっちに回すから笹塚さんにはこつちを願いつてね。それに、ここで点数稼がないと独立なんて夢のまた夢よ」

笹塚笙子、彼女の仕事は魔術師。魔術式を持ち寄り炎や風を起こす体現者。古来より神秘を起こす超常の者。傍から見れば綺麗なお姉さん程度にしか見えない。だが一度怒れば少々の天変地異を起こす。軽い気持ちでちょっかいを出そうものなら酷い目にあう。

一年と半年、彼女もまた魔術師の学院を卒業し新人の一人として

数々の仕事をこなして来た。一年に十人もいれば多いほうだが今年は十五人と大量の術者が関西にやってきている。笙子にとってはライバルが増えるだけで自分の地位を脅かす脅威が増えたに過ぎない。共に活動している悠も同じである。悠は歳相応の学校へ通う事はなく彼女の手伝いをしている。少年は魔術師ではないにしろ、生まれ持った力で彼女の右腕として活躍している最中である。笙子より後になるが昨年の秋頃より日本へやってきて活躍している。同業者の目を惹きつける者として充分な働きを見せていた。

笙子の目的は事務所の設立にある。

現代の魔術師というのは世知辛い物で肩身が狭い。彼らの能力は科学という技術にお株を取られその存在を映画や小説といった創作物でしか日の目を見ないのだ。その魔術師たちの目的は個人又は集団で魔術の研究を行なう場所を作ることにある。この世の中で彼らが大きな魔術を行う場合、専用の場所が必ず必要となる。笙子の場合は個人の事務所を作ることにある。彼女自身が追い求める探求心のためである。

だが笙子は悠が何をしたいかは聞いたことは無かった。

昔はともあれ現代では魔術なんて物はなくても人は生きていける。すでに魔術よりも科学は発展しているのだ。空を飛ばうと思えば飛行機を使えばいい。火を起こそうと思えばライターを、マッチを使えばいいのだ。呪文を唱えて杖を振るう時代ではない。そんなことをすること事態、センスがない。

オカルトや魔術の時代ではないと彼ら自身も言う。魔術師たちも火を起こすならライターを使うのだ。一々、呪文を唱えない。

しかし彼らが存在しなければならぬ理由もある。自然の摂理を人類が凌駕する日まで魔術師達の存在は必要となる。

そんな魔術師たちはその土地にある支部、連盟に参加し仕事を得る。笙子の参加している組織は今回の依頼先であるイザナギ。イザナギは魔術師たちに情報を与える重要な機関であり関西魔術連盟の地方組織である。

長瀬悠も現在はその組織に名前を連ねている一人である。

連盟は魔術師たちが規定に沿って判断し独立する権限を与える。

魔術師が自分の魔術の発展を目指す。その時、他人に害が及ばないとは限らない。権限を与えられ公式に活動する術者は関西において百に満たない。事務所を持つているのは一部の成金や資産家が多いとされる。そういった一部以外は自由気ままに仕事をこなしているにすぎないのだ。

事務所の設立には連盟より認可が降りる必要がある。笙子は未だ認可されていない。だが協力者たちの生活を優先した結果でもある。まだ十五の悠が一人で生活できることが理由の一つである。

「それで場所は？ この橋の真ん中？」

「見てのとおりよ。淡路島。明石から船が出てるからそれに乗るといいわ。着く前に現場もみれるしね」

写真ともう一つ、彼女はパンフレットを渡した。赤いタコのキャラクターが笑っている画とフェリーの写真が載ったものだ。背景には大きく橋も写っている。いかにも人の集まりそうな場所で橋には多くの車が走っている光景が見れる。悠はこういった人の多いところは好きではなかった。

「海だとしても人が多そうだね」

「交通規制もされてるわ。船を利用するお客が多くなってらしいわよ」

「好きじゃないな。他に交通手段は？」

「高速バスしかないわね。あと飛び降りには全部昼間に起きているから深夜に移動するのはなしよ」

悠は他人とともに同じ場所にいる事は好きではなかった。笙子は「あきらめなさい」と肩を叩く。彼らの仕事の大半は人気のない場所。自然に囲まれた農村やくたびれた廃村が主となる。また海や山の中といった自然のながが多い。確かに橋の下には海が広がり写真に写る淡路島の風景は緑一色の山だったが人の通りは途切れることはないだろう。

「じゃあ、私は先に行くわね。人と待ち合わせもしてるし」と言つて玄関へと歩いていく。

悠はそんな笙子に目もくれずパンフレットを見ていた。人の多い場所には行きたくは無かった。静にしていたかった。かといって我侭が通るわけでもない。そうしているうちに笙子は部屋を出て行ってしまった。彼女は土産と仕事の話を聞かせにやって来たにすぎない。用事を終えるとそそくさと出て行ってしまふのも当然だった。二人の間に必定以上の馴れ合いはない。

悠はまた一人になるとチーズケーキを一かじりする。甘いチーズの香りが口いっぱい広がる。やっぱりこの味だ、と感心しながら目は写真へ向ける。その写真には上から下までいっばいに青が広がっている。

アイス珈琲で喉を潤しチーズケーキの甘味に酔うと笙子の事はなかったように再びギターの弦を張り始めた。

第一章二話

笙子が訪れた日から二日、悠はいつもの日常を繰り返していた。

昼間の間は部屋から一步も外へ出ずに新曲の作詞とギターの調整をするだけ。夕方の涼しい風が吹くとようやく義足をはめてギターと共に部屋を後にする。

一人向かうのは人通りのない河川敷。昼間は少年野球や散歩にやってくる人がいるこの場所も夕方頃にはすっかり途絶え悠一人きりとなる。頭上に見えるコンクリートの橋には車のエンジン音が忙しくなく流れていくが少年の姿に目を向ける者はいなかった。

ギターを掻き鳴らす。唄は歌わない。ギターはアンプも何もなしに音を響かせ自由に曲を奏でる。その音を聴くのは人ではなく川の中の魚や草むらに潜む小さな命だった。

三日という時間はすぐに過ぎた。その間、もう一人の尋ねてくる人物はどういうわけか来なかった。かわりに夜中になると「今、どうしてる?」「会いたいな」「私は今一人で空を見てるわ」と一方的な報告メールが届いたくらいだった。その受け取りに使っている携帯電話もまた支給された物の一部である。笙子のほかに悠を訪ねてやってくる者はいる。しかしこの暑さにまいつているのか来訪する事はなかった。

出発の朝は日曜日。青一色、雲一つない穏やかな日となった。気温もまずまずで時たま吹く風が半そでのシャツから入ってくる。笙子から渡されたパンフレットは明石からの出航となっていた。人ごみに紛れるのが嫌だった悠は出勤時間で混雑する朝を遅くに出ることで避けてから電車に乗った。

大阪の鬱陶しいビル群から緑が増えていく。たった五分もあれば景色は全く別の物となった。緑が流れ出してまたビル群、繰り返して変わる景色をぼうつと見つめたまま過ごした。

明石につくと港を目指して歩く。すると青い海、瀬戸内海が目の

前に広がった。港は日曜だというのに乗客の数が少なく列を作って並ぶ車もちらほらとあるばかり。笙子が言うほどのものではなかった。待合場所も十人に満たなようで繁盛している風には見えない。

悠が待合場所に入るなりその人々が無意識のうちに開いた入り口を見る。ギターケースを肩から下げ黒のジーンズとロングブーツを履いた少年の出で立ちにすぐに目を逸らした。ミネラルウォーターを一本自販機にて購入すると外へ出た。

中はクーラーが効いていたが悠にとってみれば自然の風のほうが心地よかった。幸い影は多く日の下に立つ事はなかった。どこまでも続くような青天が視界を染め上げる。この場所でギターを弾ければどれだけ気持ちいいだろうかと思いつつ空を仰いだ。

しばらく経つと列を作っていた車が動き出す。悠も係員に従って船に乗る。客たちを乗せた船が汽笛を鳴らして出航する。船の中では椅子が用意されているにも関わらず悠はそこでも風が吹く甲板にいた。懷から貰った写真を取り出す。撮った場所とは間逆の位置にいる。橋は巨大な姿を晒しておりその巨大な身体を車が何十台も移動している。それに比べ船のなかはがらだった。旅行客を乗せた船はゆつたりと淡路島を目指して進んでいる。

約四キロもある超大型の橋は微動だにせずどっしりと腰をすえてその場所に存在している。本州と淡路島を結ぶその橋の上を何十台もの車が途切れることなく走っている光景は悠にとっても壮絶なものであまりの大きさに圧倒される物があった。

列を成して走るそれらにぼんやりと意識は惹きつけられる。大阪で笙子が言っていたことを思い出す。連続して起こっている自殺の現場というのがその橋の中間にある。写真で警察が陣取っていた場所だ。悠は自然とその場所に目を向けるとじつくりと見た。テレビもラジオも持っていない悠はここへ来るまでに知った情報は街頭で流れているニュースくらいな物だった。辛辣な顔をしたキャスターが哀悼の意を込めて話す内容はどれも同じように聴こえた。

自殺の方法は皆、同じ。橋の中央付近まで車で移動すると車を停

めてそこから飛び降りる。残った車には免許が残っており引き上げられた死体も一致していることからその点において不自然な場所はない。これまで自殺した人数は四人。すべての自殺で目撃者が存在している。だが誰も止めようとしなかったとキャスターは語っていた。

悠は青い空に目を向けようとして目を持ち上げようとしたが反対に落ちていく豆のようなものを捉えた。橋の中心から零れ落ちたその点は足元に広がる海へ一直線に向かっていく。ただその場所から下に向かって落ちる。

最後、悠の瞳にだけは海に落ちる直前で白い靄が見えた。

「……五人目か」

豆だと思っただけに見ていたものは間違いなく人間だ。おそらく海面に衝突した瞬間に死亡しただろう。橋の高さを考えれば生きて上がる事は万が一にも有り得ない。海面に衝突した時点で死亡は確定する。

口にした直後、背後で悲鳴が聴こえた。

甲板に出ていたのは悠だけではなかった。スーツ姿の女性が一人そこにいた。彼女もまたさっきの飛び降りを見ていた。顔が青ざめてスカートから伸びた細い脚は震えていた。それでも悠とは違い彼女はすぐに携帯電話を取りだしている。

それにしてもさっきのはなんだろう。不自然だ。まず昼間のこれだけ交通量を維持しているあの場所で飛び降りるだろうか。死ぬのなら交通量の低い深夜を狙えばいい。それとも誰かに止めてもらいたかったとでもいうのか。

理由はわからない。

「ね、ねえ。君も見ただしょ」

電話を終えた彼女が悠に向かってやって来る。笙子とは違う長いポニーテールが風で煽られてよく揺れている。

「見たよ」

「君、なんとも思わないの？」

あまりにも関心のない言い草だったため顔を覗いてくる。前髪に

隠れた悠の瞳は黒を映し出し中心に青い点を映していた。人の目とは変わった色だったが女性にはその色を見ることが出来なかった。ただ関心のない瞳だけを彼女は見た。

「そんな言い方って」

「なら落ちるとき白い靄は見えた？」

「なんのことよ？」

無関心な少年の言葉に対しどこか怒りにも似ている口調でもあった。それほどまでに悠が無関心に見えていた。事実、彼に自殺を図る人間に情は持ち合わせていない。

どれだけの事があっても自ら命を絶つのは許せない。

「別にあんたが気にするようなことじゃないか」

よほど気に障ったのか、かっとなって目を見開いた。怒る彼女を見て悠はよく見れば綺麗な人だなと感心する。しかし他人の生き死、それも自殺に首を突っ込んでどうしようと言うのかと冷めた気持ちも同時に湧く。目の前にいる女性にはさっきの死が飛び降り自殺以外のものには見えていないはずなのに、と心の中で思えばかりだった。

「そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ」

怒ることをやめて女はそう言った。二人とも口喧嘩などしている場合ではないと距離を置く。

無言のなか、橋の上では停まった車を見つけているはずと思う。

じきに警察がやって来る。なにもここから連絡する必要もない。笙子からの連絡では橋には一日数回の見回りが出ていると知らせもあった。海に落ちた人もすぐに引き上げられるだろう。

「気にしないさ。僕はあんな死に方はしない」

素気なく返す悠。女から目を背けて海と空が広がる光景を視界に入れる。

（さっきの白い靄…… あれは……）

これまでの半年で嫌と言うほど見てきた靄と同じ形をしている。もし彼女にそれが見えていたなら少しはおかしいと言うはず。なの

にそれはなかった。だとするならとギターケースに意識を促す。ケースの中で張り替えた弦が撓る。笙子の感はどうやら正解だったようだと言意識が高まる。

「私、行くわ」

悠は答えなかった。自分のすべきことを捉え見つめる先には青が広がる。潮風と太陽が交差し目的の島が前方を埋め尽くす。

（そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ）

さっきの言葉がなぜかよぎった。彼女の言葉に想いを巡らせたが自分のために悲しんでくれる人がどれだけいるだろうか。

まあ笙子さんくらいは損をした程度には思ってくれるだろうけど。それだって損得勘定でしかない。律先生に申し訳ないとも思つかない。返事の返ってこなかった彼女の表情は曇っていく。しばらく橋の方を見て船内へと戻って行った。

第一章三話

橋を後にし淡路島に近づく船が一度大きく揺れた。ケースの中でまたギターの弦も揺れる。もう一度、笙子の感に間違いはないと確信する。

かなり距離はあるが現場を見られたのは好都合。ギターの弦が震える様が手にとってわかる。あれが本人の意思で行われた自殺ならこつはならない。ギターを取り出す。遅かれ早かれ必要になる。あれは笙子さんじゃだめだ。いずれ白い靄は物体となつて現臨する。久しぶりの大仕事になるかもしれない。

船は一度大きく揺れはしたもののその後はたいした揺れは無かつた。大きさは違つたが誰も異常に思わなかつた。何より無事に淡路島の港へと到着した。潮の香りが散漫した漁港が続く。見上げると大きな山が視界に入る。民家はまばらでアパートやマンションのよくな集合住宅は見られない。

「遅かつたじゃない、悠」

港、といってもコンクリートの駐車場が広がるばかり。その駐車場のはずれ、送迎用の列から笙子がやってくる。随分と待っていたように手にはペットボトルがあつた。中身はもうほとんど無いみたいで容器の中で跳ねている。彼女は田舎でも黒のスーツ姿で悠を迎えた。その姿が周囲とかけ離れていた。

「おかげで一つ見れたよ」

「こつちも連絡を貰つたわ。もう警察が動いている、あら……イザナギの子と一緒に乗ってるはずだけど知らない？」

周りを見回す。悠の背後に近づく一人の女に向けられた。悠が振り向くと女があつと驚く。さっき甲板で話していた人だった。驚きの顔はしたもののすぐに仕事の顔へと変化する。

「笹塚笙子さんですね、イザナギより参りました。四条彩です」

魔術師が仕事の依頼を引き受ける際、事件の報告と現地での行動

を支える特派員がいる。毎回、地域と事件の内容によって特派員は変わる。これまで笙子が出会ってきた彼らはかなりの数だったが四条彩とは初めてであった。

「はじめまして四条さん。こっちは私のパートナー長瀬悠よ」

ちよこんと頭を下げる悠。

「さっきの……」

再び会う二人。甲板でのやり取りに四条が先に謝った。上下関係は彼ら魔術師たちのほうが上になる能力の有無が一つの壁を作っている。悠からすればそんな事はどうでもよかったが彼女の場合、そうはいかない。

「さっきはどうも。長瀬悠です」

「うそ、若いつて聞いてましたがまだ中学生じゃないですか」

確かにそう見える。年齢もばっちりあっている。生い立ちを知らないなら当然。しかし本人はもうこの手のことには慣れていた。

「大丈夫よ。イザナギだって悠の力は認めているし何より今回の相手は私より悠のほうが良いはずよ。ねえ？」

笙子も今回の件を気付いていた。悠へと視線を動かすと言葉の意味を理解してうなずいた。今回は魔術師に出番はない。必要なのは別の力である。

「それじゃあ、海月荘へ行きましょう」

「それどこ？」

「現地の協力者が用意した元民宿よ」

送迎用の車を作る列。その中の一台、一番みすばらしいワゴンR。タイヤ周りは泥まみれで随分と洗っていないため付着した汚れを全体に纏っている。そのワゴンRの傍で男が立っている。三人が近づくと小太りの中年はタオルで汗を拭きながら礼をした。

「どうも遠いところを」

「現地協力者の日高さんよ」

「イザナギの四条です。いつも協力ありがとうございます」

四条の礼に伴って悠も礼をする。魔術師のサポートは大半が一般

人である。都市部だけでなく離れた地方にも多くいて彼等の仕事に携わっている。といっても魔術師たちのサポートは寝床の確保や物資の補給などで直接戦闘に関与することはない。それぞれの役目をまっとうするためにいるのだ。

日高の車に乗り込むとワゴンRはタイヤを軋ませた。軽い三人の体重でもこの車には非常にきついものだった。しかしながら小さなワゴンRの中は冷房が効いていて涼しい。空からの光を遮るものもないこの場所では最高の場所となる。コンクリートの港を出て海を横目に車は走る。窓をほんの少しだけ開けると潮の風が車内に入り込んでくるのが心地よい。

「見てきたんでしょ」

助手席から後部座席に座っている悠へ振り向きながらに笙子が言った。車内全員、なにをと聞く者はいない。悠は首を縦に振る。

「どうだった？」

笙子も見当はついているのだ。

「不自然だったよ。これまでの自殺がどうか知らないけどあは…

…」

「妖魔だった。それもかなり大きいよ」

につこりと微笑むと身体を前に向けて話を続ける。

「まだ実体化は先だよ。でも放っておくとまた死人が出る」

「これまで自殺した人たちの経歴を調べるといくつか面白い点があるってね。それについては話すほどのものじゃないけど聞く？」

「べつに聞きたくないよ。それにもっと近づかないと解らない事が多すぎる」

落ちる様だけを見ていたに過ぎない。だが現場で見た白い靄。隣りで話を聴いている四条彩には見えなかったあの靄こそがこの先、何が起きるか予想できるひとつである。あの靄はいずれ実体となって現れる。

「さっそくで悪いけど現場を見たいんだ。船は出せる？ 小さいやつでいいんだけど」

言い切るとちょうど車が停まる。信号は赤だった。港から続く小さな町がすぐ傍にある。今度は運転していた日高が口を開いた。

「そりゃ無理やな」

一人、度のきつい関西弁だった。ルームミラーで日高と目が合う。彼は肘をドアに引つ掛けて信号の色が変わるのを待っている。

「イザナギの仲間から連絡が入ったんやけど、さっきの被害者を引き上げるとか何とかで漁師も一般人も船はだされへんねん」

やはり警察はもう動いている。遺体の引き上げが優先されると言うわけである。

「少し離れていてもいいから、現場が見たいんだ。自殺はこれで五人目、あれが現臨する前に仕事を終らせられる可能性だってある」

あの場所に近づかないとこちらも打つ手がないとする悠。

「せめて橋の上に出て現場を見下ろすくらいはしないと……確かな位置さえつかめない」

「無理を言っではいけませんよ。こちらにはこちらの事情というものがあるのです。イザナギにはイザナギの。警察には警察の、というふうな。ですから長瀬さんの事情もわかりますけどここは我慢です」

と、几帳面というよりは真面目な返し。

「四条さんの言う通り。今日一日くらいゆっくりして明日から動きましょ。必要なものもあるでしょ？ 新しい義足も届く手はずは出来ているわ」

皆して待つ的一点張り。悠としてはすぐにでも海に出たかったがそれも仕方なし。笙子は相変わらずのんびりで夏のバカンスを愉しんでいるにすぎない。人の命に関わるかどうかよりも仕事はさつとこなした方が良くに決まっていると悠は窓から映る海に目を向けた。こんな事だから事務所は先になる。そう思うも少年は告げられなかった。

「わかったよ」

あきらめるしかない視線はまた窓の外。大阪とは違う。昼間だ

というのに歩いている人は少なく、数人の歩行者も港へ向かっていくばかり。誰もが肩に釣り竿を掲げていた。再び動き出すと景色は随分と変わって山の中へと入っていく。緑の色が全面に現れてくる。橋の姿はまだ映っているが道路の様子は見えない。

「でも驚いたわ、仕事熱心なのね。もっと冷めてるかと思っていたわ」

外を眺めていた悠に彩さんが言った。なぜ、と問うと彼女は口を軽快に動かしてはじめた。

「だって船で会った時、どうでもいいって感じに見えたんです。それにこれまでイザナギへ集められた調査レポートに載っている悠君の人物像を考えるとそういう印象を持たなかったもので……」

「それもそうね」

笙子が頷いた。彩の手荷物はノートPCが入ったケースとハンドバッグ。これまでの特派員も同じように同じノートPCを持っていたレポートを書いていた。悠が何度も見た彼等協力者の姿である。彼女たちの仕事は戦闘ではない。あくまで事件の内容を詳細にまとめる事。そして事件の内容には担当した魔術師やその他の現地協力者の事柄も含まれる。その他に事件の終了と共に魔術師たちにも調査レポートの提出を要請する。魔術師がイザナギへ提出し二つのレポートが揃った時点で事件は幕をおろすことになる。

その後、連盟本部の京都にて事件の内容を鑑定し魔術師の評価へとつながる。

ただ、いつも笙子が引き受けて書いて提出するため悠は自分の事をどう書かれているか知らない。またそれを読んだ事もない。

「ちょっと安心しました」

「そう」

やはり素気ない対応である。後ろに見える港町には活気はなく人氣はないように感じた。事件が発生したため海に出ていた船も戻っていく姿が見えている。車の量もやはり大阪とは比べ物にならない。車はゆっくりと山を登っていく。およそ人の入る場所ではない山道

を車は登っていくことになる。地面も整備されていないからガタガタと揺れて下を噛みそうになるほど。

車内から後ろを見ると青い海が姿を現れる。ほぼ一面、青でその下にうごめく影がいることなど思えないほどに清く美しい光景だった。

橋の姿も捉えることが出来る。橋の下の現場へと船が向かっていた。港へ向かって戻る船とは違い二艘のボートは橋へ密着するように視界から消えていった。おそらくあれが警察の船だろうと見る。あと一時間もあれば悠と彩が見た死体は引き上げられる。これまで飛び降り自殺で死亡した人間は発生から二時間以内に見つかっている。どれも橋に身体が引つかかるようにして浮いていた。

一度、大きく車体が揺れて全員がどつと浮いた。
「着いたで」

日高は語尾を大きく強調するような物言いをして車を日陰に停めた。悠が視線を前に向けると雨や泥で汚れた看板に海月荘となんとか読める名前が書かれていた。

「ここが海月荘なの？」

「そうよ。どう？」

どう、と言われても見えるのは車二台分の駐車場……もとい木によって出来た日陰。先に停めてある一台は軽トラック。軽車二台で埋まってしまっている。まあ起用に動かせば軽トラックも出られるだろうという程度。

山中を無理やり切り開いたような場所には一軒の家が建っているに過ぎない。日陰から家までは歩いて数歩程度の距離しかない。家も木造で古い。溜め息が自然に出るほどのボロさである。

「どうもこうもないよ。なんだ、いい物あるじゃないか」

車内から出ると軽トラックの二台に水上バイクが目に入る。黒く鈍い光を放つまさしく新品。それはこの場所において一番、新しいものだった。

「用意してもらったのよ、二人しか乗れないけどスピードもでるわ」

「最新式だからはっええぞ」

にやりと笑って玄関に鍵を差し込む日高。こんな場所に鍵をかける意味は果たしてあるのかと疑問もある。外の熱さは変わらない。だと言うのに家の中は涼しく風が吹いていた。悠の部屋とは別物で風は途切れず熱も籠らない。

「よかった、窓を開けという正解だったな」

すると「でしょ」と親指を立てる笙子。「ここの二階で待ってたんだから」と中へ入る。狭い玄関をくぐる。靴はなくここには日高さん以外にはいないと知らせていた。

「さあさあ上がってください。どうせ誰もいないんで気楽にしてくださいよ」

すでに三人は階段を登り始めていた。全員、手荷物は少ない。悠も唯一の荷物であるギターケースを持ってあがる。木造の階段はため足を進めるたびに床がきしむ音が出す。古い建物だというのは外から見ても解る通りだった。

「壊れかけとるところもあるんやけど大丈夫やで。床が抜けるなんてないから」

ぎしぎしと音を立てながら二階へと進む。海月荘のなかは太陽の光を漏らさぬようにとどこもかも輝かせている。古いというが埃はなくこまめに掃除をしているのが良く解る。

階段を上ると左右に部屋が分かれている。家の中心にある階段はまるでセンターラインのように設置されていた。廊下は短く両方の部屋は話し声が聴こえるほどであった。

扉は閉められていなかった。左の部屋には笙子の荷物が置いてある。

「悠はそっちの部屋ね。四条さんは私と一緒に」

彩が「はい」と元気よく返事をする。そのまま後ろに回ると彼女の肩を掴んで部屋へと連れて行った。そういえばと悠は笙子の後ろ姿を見て思う。笙子は男女関係なくモテる。どういうわけかイザナギの特派員には彼女のためにと自分から名乗りを上げる人がいると

聞いたこともあったほど。普通、魔術師は気難しく相手をしたいとは思わないはずなのだ。

「そんじゃわしらも行きましょう。こっちですよ」

わざわざ案内する必要もないというのに日高は悠の前を歩いていく。ようやくやって来た部屋は殺風景な八畳間。一人でいると広いと感じる部屋には小さな机と布団だけが用意されていた。押入れもあるが使う必要はなさそうだ。

丁度、陽の光から外れた角がある。ギターケースをそこへ置くと全て終わる。荷物は唯一このギターケースだけ。隣りにある窓は開いており風が流れて入ってきていた。大阪と違って潮の香りがする。あのコンクリートの焼け焦げるような匂いはない。しかも先ほど車から見えていた明石の海が広がっている。絶好の場所だった。

「それじゃあ、わしは一階にいるんで落ち着いたら来てくださいね、美味しいお茶もあるんで」

部屋を出て行く日高に「はい」とまるで子供のように笙子は手を挙げて答えていた。彼は笑いながら一階へと降りていく。また階段の軋む音が聴こえる。

一人になったといっても廊下の先にある笙子たちがいる部屋は丸見えだった。彼女たちからは窓の外を見る悠の後姿が見えている。

外の風景から机に目を向けた。これまでイザナギの関係者がここを使った痕跡は随分と残っていた。机には引き出しがあり中にはたくさん紙が入っていてめいっばいに文字が書かれている。おそらくこの部屋で様々な計画を練った証明である。ここで仕事をするのは初めてというわけではないのだ。

魔術の専門知識は少ない悠でも解るほど奇怪な文章と文字だった。それらをしまつて再び外を見る。海に出ていた船が動き出していた。あの警察の船だった。橋の影から出てきた船には白い布のようなものが敷かれていた。そのまま明石のほうへ向っている。どうやら警察はさっきの遺体を見つけたようだ。

第一章四話

海月荘の一階には風呂と台所など一般家庭と変わらない設備がある。しかし民宿としての施設らしき物はこの建物ぐらいな物であった。木造であるが部屋は多く一階には他に部屋が三部屋ある。どの部屋も八畳ほどあり団体を迎えても問題なさそうに見える。

事件の内容を聞くために四人は茶の間に集まっていた。畳張りの部屋は広く四人いても半分も埋まらない。悠の住んでいる部屋と違いくかなりの大部屋である。彼らのほかには一時代、昔の雰囲気のなかでノートPCとプリンターが存在している。

「どの人物も橋の中央付近まで車で走行し、そこから飛び降りるといった行動に出ています。遺体の回収はされているようですが中には損傷が酷く本人確認が非常に困難だった人もいるようです。ですが車の中に免許証が落ちていたり本人が所持していたりと手がかりは豊富だったと報告されています。ああ……また精神的に病んでいた方もいますね」

わんさかと情報がプリントアウトされていく。イザナギのほうで回収したデータが机で広げられていく。履歴書のように写真と経歴が記載されている。四条彩のPC内にある情報は彼女の性格どおり几帳面であった。一枚を手にとつて見るが特に変わったところはない。悠の见ているデータは大学を出たあと一般企業に就職したとされる男性のものだった。備考の欄には借金で苦しんでいたと書かれているが返済が滞ることもないと記されている。

「自殺全てが奴らの仕業じゃないよ。絡んでいるのは間違いないけど別の何かがいる」

「わかるの？」

「なんとなくね、妖魔があんなふうに気取らせるなんてのも珍しいんじゃないかな」

現場に出ればもつと確かな事が解るという考えに違いはない。笙

子や悠が奴らと言うのは誰であろう事件の首謀者にして元凶。妖魔と呼ばれる怪物。今、ここに笙子と悠がいる理由。

「別の何か……まさか魔術師が絡んでいる？」

「ここへ来た時からあの場所を日に三度は見たけど魔術式の類はないわ。そっちは私が保証する。なによりあれだけ巨大な橋になるとそれ自体に必要な魔力も膨大なものになるわ」

明石海峡大橋は全長約4キロ。日本でも最大クラスの巨大な橋。それも地上から離れ海の上という立地条件。いかほどの魔術師といえどこの場所を意のままにすることは不可能に近い。

「まして特定の人物を誘い出して自ら飛び降りるようにしようと思つたらとんでもない力になる。網を張るなら一人ではなく複数で行なう必要があるわ」

笙子自ら魔術師の存在を否定する。こちらへ先にやってきていた笙子は何もしていないはずも無い。彼女にできる事は全てしている。「それでは一体？」

悠は「さあね」と呟いた。何がどう絡んできているのか詳細は不明で手元を集められている死亡者のリストも今のままでは意味がない。自殺というのは人目に付かない場所を選ぶのが普通だ。人知れぬうちに山に入ったり崖から飛び降りたり。最近では集団自殺もあるようだが今回の件は違う。何よりあれだけ目立つ場所で飛び降りるのはどうだろうか。学生なら馴染みのある学校の屋上から飛び降りるということもありえるが被害者はどれも社会人。しかも中には毎日のように仕事で通行するだけの人物もいる。彼らにとつてあの橋は日常の道でしかない。そのような場所でなぜ死ぬのか。答えは出せなかった。

「なんであそこを選んだのかな」

何気なく声が出ていた。

「解らないわよ、死にたいけど止めてほしいって人もいるでしょうし。そういう人からすればああいった人の行き交いが多い場所は絶好の場所になるんじゃない。普通なら、ね」

橋の上は高速道路になっている。もしあの場所で飛び降りようとしているのを目撃してもそこで車を停めてわざわざ飛び降りをやめさせようとする人間がどれ程いるか。考えてみてちよつとした絶望を悠は感じた。走る車の速度は八十キロ以上の高速だ。他人の行動に気を回す人は少ないだろう。

実際、五人の飛び降りは誰も止めてはいなかった。

鬱そうとしたなか、日高がテレビをつける。まだブラウン管の箱状モニターが映したのはここから少し離れた場所だった。橋の上からヘリで撮影している。二階に出れば窓から見える景色とそっくりだった。アナウンサーの声がテレビから流れてくる。

机の上ではこれが限界と三人もテレビからの情報を耳を澄ました。画面には海が映り橋の下で警察の船が移動しているのが見える。その映像の中、黒い影がぼつりと映り込む。笙子と悠だけが解るものだった。日高と彩は何事もなく見ている。

橋にはガードレールの傍で停車している車が映っている。死亡した人物の車だろう。黒い影はその車からすぐ傍で濁りのように染み付いている。カメラが離れる瞬間、その影もまた移動する。

事態は急を要する。携帯電話を取り出した彩がイザナギへと連絡する。話しの内容は詳しくする必要はなかった。画面に映る情報を見ていた人物はここ以外にもいる。電話の先も同じ映像を見ていた。「それではお願いします」

彼女が話を終わると悠たちに言った。イザナギは今晚一艘の船を現場近くまで出す。妖魔の出現は関係なくあれを止めろというのだ。先の飛び込みから二時間もなく二人目が飛び込んだ。この後、橋は厳戒態勢となる。

「せめて慧が来るのを待つてほしかったわね」

笙子が言う。遅かれ早かれ悠の頼みは叶えられる事となった。でも海に出られればそれで事は済む。

大事なのは相手と同じ場所に立つということ。
人ではないものであっても。

四人は船が出るまでの間、それぞれ適当に時間を潰す。時間は三時間。悠は一人、麓まで降りてみたいといって出て行く。青一色だった空はねずみ色の雲が覆い被さってきていた。降らなければいいかと願うがそれは無理なようだ。

道に出ると港を目指して歩く。突如として携帯電話が震える。取り出すとメールの受信だった。開くと「台風が近づいてるよ」と短い文章が現れる。

「大丈夫、解ってるよ」

空を見上げて呟いた。昼間、ここへやってくる時の青天は既に消え空の半分はすでに雲でいっぱいになっている。いつ雨が降りだしてもおかしくはない。ようやく着いた港には波が押し付けていた。風は強く吹きこれからの出来事を物語っているかのようでもあった。夕方になるともはや太陽の姿はなく雲が世界を覆っていた。遺体の引上げ作業を終えた警察は海から姿を消して今は対岸にいる。橋の上では停まる車がないかずっと監視が続けられている。曇天となった空はいつ降り始めるのか、船が用意されるなかで悠は見つめていた。黒と灰色に覆われている不吉な色をしている。波は高く周囲には悠達以外に人はいない。嵐の前の静けさに皆、危険を感じて家に籠っている。空が曇ってきた頃、丁度悠が港に出た時にイザナギ本部からという名目で明石から四人乗りの船を一艘をやってきた。海月荘にある水上バイクでは二人しか乗れないためこちらにする。少し笙子が落胆していた。彼女の場合こういった船よりバイクで颯爽と走りたかったのだ。とはいえ二人を乗せた船はぐんぐんと波を掻き分け進んでいく。海の青は雲の濁りを受けて黒く光を失っていた。船の舵を取るのには日高である。彼は荒れる海を速度を保ちつつ殆ど揺れさせずにいた。

「さすがですね」

髪を抑えて先頭に立つ。風も水しぶきも全て受けながら彼女は言った。

「俺も昔は猫に出とったからなー」

一般の船、それも五人も乗ればすぐに誰かがはじき出されそうな大きさをしている。加えて海の荒れは益々強くなるばかり。橋の付近へ近づくのは危険だと知りながら、ゆっくりと近づいていく。笙子と違って悠は足元がおぼつかない。なんとかボートから振り回されないようにとしがみついている。

「弦は震えてる？」

気付かなかった、笙子は悠の脚よりもその力へと目を向けていた。無理もない。笙子は悠になにも問題ないように見えていたのだ。ギターは港から出る前にケースから出している。そのギターには全くといっていいほど反応がない。首を振って伝える。昼間、ここを通ったとき弦は確かに震えた。今は波とは正反対に落ち着いている。少年の心は震えていた。

「もつと近づいて」

言葉どおりにもつと、もつと船は進んでいく。その度に波はきつくなっていた。すでに現場との距離は十メートルもない。すぐ傍に自殺した人間の身体が落ちた場所がある。首を曲げて見上げれば天空まで届きそうなほどに巨大なコンクリートの柱が立っている。ギターに相変わらず反応はない。船に乗ってやってきた時、ここから随分離れていたが感じた気配はなかった。単にここには居ないという事なのか、少年の瞳は周囲に向けられた。

一度、船が停まる。気を静めてギターを構える。足を踏ん張ればどこにもつかまらずに立てるようだと思いを閉じた。心を落ち着けてそつと相棒を抱く少年はその意識を海底まで落とす。

瞬時に僕の魂が弦を震わせた。

「やっぱりいる」

ボディに流れる赤がじんわりと光を帯びていく。悠の鼓動とギターの鼓動が同調する。船の周囲には物体による衝撃ではない自然のものとは違う波紋が広まる。膝から下の義足は意としないところで耐えていた。震えが膝に伝わる。しかし意識はもつと下に落ちていく。すでに少年の心はここにはない。

膝から義足へ、義足から船へ……そこから蒼い海の底、黒い闇の底。

意識の落ちる先に波のうねりはない。海底は非常に穏やかで船のある水上とは違っている。身体が自然と動き指が弦に触れる。どんな音かはさして重要ではない。鼓動にあわせて音になる。単なるひとつの響きが連続で鳴りリズムを刻む。

「はじまったわね」

ギターの音はアンプなど一切の道具をなしに奏でられ音はまるで空気を背に反響する。波の音など全てかき消すしなやかに彩られた音。途切れないように紡いでいく。指は思考とは別のところにある。「この辺りを回ってみて」

弦は指とは別に揺れている。だが一向に目的のものは見えずにいた。船が再び発進すると瞳にぼんやりとした蒼が浮かび上がる。

いつもと同じだ、問題はない。

海の中では魚がこの場所を避けている。一切の生命が消えた。場所はある。そう全ていつも通り。だが義足に違和感が走った。無機質な単なる物がひびの入ったような崩れた音を立てる。いつもという全てが一瞬にして崩れさった瞬間。

それこそが発端だ。

同時に船に振動が起きる。岩にぶつかったような激しい衝撃。

繋いでいた意識が完全に途切れる。海底から海上まで一瞬で戻ってくる。並行であったはずの視線はゆがみ右側へ傾いていた。身体から義足が外れている。そればかりかはずれた義足ごと悠の身体は船の上にはなかった。

「悠！」

宙に放り出された悠がようやく事態に気付いた時、笙子は叫んでいた。手を伸ばしていた彼女の姿から遠ざかる。悠は自分よりもギターを優先して放り投げる。手から放れると赤く宿った光は消えていく。笙子がギターを手にしたのを確認できただけまだマシだった。義足から離れた身体は襟を掴まれる。強力な力だが姿は見えない。

力で無理やりに引き込まれる。悠の身体は軽く貧弱である。肉体面においては外見同様少女並み。その力に抗うことなど出来なかった。笙子と目が合う。その直後、瞳は蒼に包まれた。

冷たい海水に身体が溶かされていくような感覚ただ引きずられて底へと落ちていく。今度は意識だけではない。身体も一緒だ。義足が外れていたのは幸いだ。再び海面に上がるなら腕だけで泳がなくてはならないのだ。義足が付いたままだったなら重くてとても泳げない。悠の目には義足が落ちていく様が見えた。海底の底にある砂がふわりと巻き上がる。

最後の一瞬で吸った空気も長くは持たない。まるで錘のようになった悠を落としていく。誰かが引き上げない限り悠は海面には戻れないだろう。なら、と瞳を凝らす。先の事がある。必ずいる。

「さあ一緒になりましょう」

ここは海底、魚一匹いない。深き黒の世界。上から見れる青い海など存在しない。ましてや声などかけられるはずもない。

「かわいそうな子……まだ若いのに」

人が言葉を話せるはずはない。なのに悠の前に現れた女は声を出す。

全身が蒼のなかでもはつきりとわかる。長い髪は足の先まで伸びていて半身は焼け焦げていた。顔は青ざめて頬の肉が削がれたようになくなっている。そのくせ瞳はやけに美しく生きているような輝きを見せている。

「あなたも一緒になりましょう」

脳に響く声だった。そればかりか黒く燻った腕が伸びてくる。悠の瞳に恐れはない。腕に掴まれる前に息が持たなかった。空気を求めて口が開く。しかし入ってくるのは海水ばかり。すでに意識は朦朧としていた。

少年の身体は限界を迎える。吐き出した息の泡が昇っていく。薄れていく意識の中、遙か空へと伸ばした腕を女が掴んだ。半身が焼け焦げた女ではない。まぎれもなく実体であり生きている女の手だ

った。暗闇の如く光のない海底で人の暖かみに繋がれた。だが掴み返す力などなく悠は意識を失った。

第一章五話

溺れた悠を拾い上げて数時間が経つ。海はますます荒れ雨が降り風は強くなっていた。台風之余波はすぐそこまで迫ってきている。

海の底へと落ちていく悠を引き上げた時、意識はなかった。僅かな時間ながら悠の身体は芯まで冷えきっていた。笙子は日高と分かれ一人、海月荘へと戻った。倉庫からストーブを取り出すとすぐに悠を暖めた。外傷はないように見られ死を免れたが意識は戻っていない。今はただ静かに眠っている。

「手間のかかる子……」

眠りにについている悠の額をさする。

「笙子さんは大丈夫ですか？」

海に入ったのは一人ではない。海底近くまで追いかけた笙子もまた同じ。シャワーを浴びてきた彼女に四条彩は茶を淹れて待っていた。海に残った日高はまだ船を港にしまっている。今、海月荘には彼女らしいない。そのためか、笙子はバスタオル一枚で過ごしている。

「私なら問題ないわ」

腰をおろすと無防備な身体がふんわりと揺れる。彩は彼女の身体から視線を外した。同性でありながらもその色香に頬が赤くなるほどに笙子は魅力的であった。しばらくはラフな格好でいられる、という安易な考えが周囲を惑わせる結果になる。

「でも悠が意識を取り戻すまでなにもできないわね。義足も落としてしまったみたいだし」

義足は海の底にまで落ちている。悠を助けた時、義足は後回しにした。引き上げる道具もなかったため仕方がなかったのだ。回収するには台風が過ぎ去るのを待つしかない。それには二日以上かかると思われる。荒れた海の中で回収など出来るはずはない。

悠の容態は変わらない。笙子は服を着ると彩と一緒に一階へと降

りていった。居間へと移動するとテレビをつける。ちょうど気象情報映っていた。現在、兵庫県南部に迫っている台風はあと三時間ほどでその暴風圏に入るとされる。テレビではレポーターが徳島で暴風の中、実況していた。

「強そうですね」

「早く通り過ぎると思ったんだけどね、やっぱり当てにならないわ」
呟く彩。あの台風が去るまで義足の回収は不可能だ。笙子が引き上げる時も海は逆巻き唸っていたのだ。とても船を出すことさえできない。

「でもどうするつもりですか。悠君が事件を解決させると言うなら足は海の底ですよ」

「代わりが届く手はずよ。それも今向かってきているわ、台風と一緒にね」

微笑む笙子の前で携帯電話が鳴った。丸い卓袱台の上で震えて小さな地震のように揺らした。黒のメタリックカラーの二つ折り型。鈍く光り青いデジタルモニターが相手の名前を表示していた。

「どうしたの」

携帯電話を手に持つと開いた。名前も告げずに言った。

「悠の電話がおかしい。なにかあったの」

笙子には誰からの連絡がわかっていた。穏やかというよりはあまりにも冷静すぎる声だった。まるで氷のような冷たい刃物みたいな音で女、時雨は言った。

「鳴らなくて当然よ。海に落つことしちやっただから」

「あれほど気をつけろといったのに……悠は？」

「寝てるわ。起きたら連絡させましょうか？」

しばらくの無言の後「しなくていい」と告げて通話が途切れた。

笙子は耳元から電話を離して液晶の画面を見る。待ち受け画面へと変わった液晶には黒い髪をした背の高い男と一緒に映った彼女がいた。まだ笙子は幼く学生服を着ている。男のほうは片目を隠すように長く伸びた髪をしていた。

「例の？」

その問いに頷いてみせる。

「あの子も心配なら来ればいいのに」

「確か今日は定期検診ですよ。先輩達も言っていました」

あっと思いついてハハハと笑う。笙子の周りには三人の協力者が集っている。一般的な魔術師として普通。一人は二階で寝ている長瀬悠、さっきの電話をかけてきた冷たい印象を与える女、時雨。そして最後はここへと向かっている織戸慧。全員、魔術師ではない。しかしながら彼女のサポートを確実にこなす者達である。

ただ一人、時雨だけは別である。彼女は人ではない。関西魔術連盟から定期検診を常に受けることを約束に行動を許された人外の類である。

「イザナギのレポートでは悠君はいつもこういった意識障害に陥るようですね」

彩は再びパソコンを広げていた。モニターには長瀬悠のデータが映し出されている。その一箇所、彼女の言う通りで事件の途中で大半、悠は気を失っているという報告が記されていた。特に今回のようなケースでは必ずといっていいほど。

「私、今回笙子さんと仕事をするなんて聞いて悠君のレポートを見て思っただけです。この子は危ないって……笙子さんはいつも傍にいて大丈夫だと確信されているのかもしれませんがあまりにも」

「危険よ」

言葉を先に言う。彩の表情は険しい。解っているなら止めると言いたげな顔をしていた。悠の担当した事件のレポートを見れば皆同様に彼は異常だと云うだろう。事実、これまで協力にやってきた関係者たちはそう言ってきた。事件に関わる度に何をしているのかと問う連中も多い。しかし笙子はその度に問題はないと言ってきた。

答えは簡単だった。

「彩ちゃんは奏者の仕事が何か言えるかしら」

「当然です。土地神に音を届けてその力を静める。魔の怪物たちを

音によって浄化する」

キーボードから手を離していた。

「合ってる。けどそれだけじゃ足りないわ」

首を傾げる彩。現代の魔術師の傍には必ず協力者がいる。その協力者が同じ魔術師であるかどうかは別だが個人で動く者はいないだろう。関西にいる数百の魔術師たちも皆、笙子と同じように誰かと手を組んでいる。

「あの子はね、他の奏者とは違うのよ。奏者の力は何か知ってる？」

「楽器です。それぞれの持つ楽器により音を奏でて力を具現化する術者ですから」

「悠はギターを使用して音を鳴らす。奏者の仕事はさつき彩ちゃんと言ったとおり、土地神の穢れを浄化することや妖魔の浄化にあるわ。相手の魂が何であれ完全に消滅……つまり浄化することに意義を持つ。いわば鎮魂の音色ね。悠が他の奏者と違うのはその場に残った思念や魂なんかも自分の魂の波長と合わせられるの」

「そんなデータ載ってませんよ」

モニターに表示されている長瀬悠のプロフィールにはやはり書いていなかった。

「載せる必要がないからね。で、靈感……いえ自然と同調する事ができる能力。だから人間の魂さえ観る事ができる」

「その力は知ってます。随分昔にもいたって聞きますよ。特別強い力を持つて生まれる人がいるって……」

「魔術師だけが特別じゃないのよ。魔術師ってほんの僅かな素質があれば誰でもなれるのよ。奏者は違う。先天的な力は産まれたときに決まっちゃうから」

少年の身体と心が傷つきながらも成長していく様を笙子は隣りで見てきた。その瞳にはある男の姿が覆い被さったように悠の姿と酷似している。

「で、その力を持っていたっていう人は長瀬律」

一人の男の名前を口にした。

「あの子が危険に身を投じているのは解ってるわ。でも誰かにしろと命令されてやっているわけじゃない。あの子は父親の言葉を守ってるだけよ」

彩が悠のプロフィールを次へと移した。その頁にこれまでの経歴が全て記されている。もちろんその中には笙子が悠を引き取った日付も載っていた。

「悠君には父親はいないはずですよ。保護者は……長瀬律となっていきますが彼とは血がつながっていません」

「そこよ。血の繋がりがなんていないのよ」

長瀬律は身元引受人であり父親ではない。悠は捨て子、親知らずである。まだ赤ん坊だった頃、ある教会の前に捨てられていた。幸か不幸かその教会はこちら側の世界と繋がりがあり悠は授かった力とともに進む道を決められたのだ。

奏者としての素質がなければどうなっていたか解らない。

「そ、それは笙子さんと同じ……ということでしょうか」

「私の場合は感謝ね。私が高校を卒業するまで大事に育ててくれたことへのね」

彼女もまた同じようにして育った一人である。親がいてもその人に育てられるかは必ずではない。笙子を育てた人物は親ではない。

「悠の大事にしているものはそんなものじゃないわ。もっと根本的な根源にある。つまり魂の浄化。自然への回帰とでも言うのかしらね」

「わたしには解りません」

モニターの中の悠は無表情で冷たい瞳をしていた。

「彩ちゃんも悠のギターを聴けばすぐにわかるわ。どれほどあの子がどういう子かということ。さて慧に連絡しなくちゃね。何所まで来てるのかしら」

再び携帯電話を手にとるとメモリーの中から織戸慧という名前を呼び出す。携帯のメモリーはすでにいっぱいになる手前まで記憶されていた。グループ別に別けられたメモリーのなか慧の名前は長瀬

悠と同じ場所にあった。

第一章六話

悠が膝から下を無くしたあの日からまだ半月ほどしか経っていない。それなのに面倒なことになった。義足の注文は金が掛かった。数少ない奏者を危険に晒し肉体の一部を破損させたことは事務所設立を遠ざけた。時雨という強力な仲間が加わったが彼女も気ままに動く。笙子の目的は指の隙間をすり抜けるように遠退いたのだ。

今回注文した義足は海底に沈んだ物とは全く違う。単なる足の代わりではなく戦闘用のもの。連盟の所有する技術と魔術の結晶。一般家庭で普及しているような代物とは違っている。単なる物体として活動するのではなく、文字通り身体の一部として活動する。身体に装着した時点で痛覚、触覚も働きだす。地を踏めばその感触は脳へと伝わるし、切られれば血は出ないが痛みは感じる。本当に身体の一部として機能を果たす。

そうした義肢を作っているのは笙子と同じ魔術師である。

魔術師の本分は戦闘にあらず。

魔術とは人為的に奇跡、神秘といった非科学を行使することにある。隣りでパソコンを自由気ままに操っているのとは訳が違う。使うものは自然界に存在する力と魔術式。それらを駆使することで火を燃やし風を起こす。時が経っても基本は変わらない。奏者の持っている先天的な力ではなく、ほんの少しの才能と努力である程度のところまではいける。笙子自身がその例である。

そんな中、稀に「正に是」という才能に長けた人物が現れる。イザナギで義肢を製作している魔術師は世界有数の魔術師である。協力者の一人、織戸慧は直接イザナギとは関係ないが京都にある本部と繋がりある家柄から彼やそのほかの魔術師と面識があった。普通ならば世界有数の魔術師と直接会うことなど到底不可能だ。その会う事さえ困難な者達は自分の工房となる事務所の設立を早くに行い独立している。そしてその事務所の場所は内密にされている。

魔術師が方々へ必要な物を新生する場合、自分の所属する団体へ依頼書を送る。団体、笙子の場合イザナギだがそこから今度は連盟本部へと送られる。手間がかかるという意見もあるが古くからそういった仕組みになっているのだから仕方ない。でも時間がかかる事は無く即座に行動に移るため各方面へ連絡が伝わるのは一瞬だ。この辺りは科学万能の時代の進化が全てである。

今やメール、電話、動画、なんでもありとなっている。すでに現代の一般市民はその機器を手足のように使用できる。使い魔に手紙を持たせて走らせるなんて時代錯誤はない。

イザナギへ新しい義足を発注したのは随分前になる。現在、完成した一品は慧が運んでいる最中だ。台風よりも速く走る彼女のバイクに乗せられた物に期待と不安が募るなか電話をかけた。

「おかしいわね、出ないわ」

「運転中なんじゃないですか」

いつまでたっても通話にならない。バイクの運転中なのは知っていた。だがいつもなら路肩に停めてすぐに対応するはずだ。特に笙子からの着信なら呼び出している織戸慧は喜び勇んで受け取るというもの。しかし電話は留守電となってメッセージ録音へと変わる。なにもそこまでするほどでもないと言電話を切ると山の坂道からけたたましいエンジン音が響いてきた。

雨音をかき消す獣のような音は大型バイクのものだとすぐはつきりとする。慧の乗っているバイクとは違う。もっとバイク自体の精度が根本から違う精密機器の骨が鳴らす音。笙子の耳には聞き覚えのない音だった。砂利に足をとられる事もなく登って来たのは赤と黒のカラーで塗装されたバイク。至るところにBMWのマークが入っている。

バイクには黒いヘルメットとライダースーツを着込んだ運転手が乗っていた。その後部には無理やり括りつけた荷物が青いビニールを纏って風に揺れている。バイクは縁側に停まるとなんとか雨から身を防ぐ事が出来た。

「遅くなったか？」

ヘルメットの奥で黒い瞳が動く。棘のように刺さりそうな目をしている。ヘルメットを脱ぐと肩にさえ掛からないショートのが現れる。また適当に切ったんだろなと笙子はその形を見て思う。

「早いくらいよ、慧」

「急がせたのは笙子だろ？ まったく夜通しぶっ飛ばしてきたんだ、感謝しろ」

外見とは正反対のぶっきらぼうな言葉使い。男のように話す彼女はライダースーツの胸元部分を開く。随分長い間、走っていたのだろうじんわりと汗をかいていた。バイクの後部にあるブルーシートの箱を縛っていた紐を解いた。

「また新しいバイク……それもBMW……」

「親父からの贈り物だ。オレが買ったんじゃない」

不貞腐れるように言うがバイクは紛れもなく新品そのもの。雨のなかを走っていたため濡れているがまだ新しい部品の数々は光り輝いて眩いばかりだ。一台の車をずっと乗り続けている笙子とは全く正反対で愛車へのこだわりはない。

「それよりも、だ。また倒れたみたいだな。何回目だよ」

「数えてないわってなんで知ってるのよ」

「さっき携帯で見た。そっちの四条が報告したろ」

「そうなの？」と名指しされた彩に向かつて聞くと彼女は首を縦に振った。彼女の報告はインターネット回線によってイザナギへと送られる。イザナギは京都の本部へと報告する。その情報が携帯電話という端末を用いて見る事ができる。

「頼んだものはそれ？」

解き終わるとブルーシートもはがす。差し出された物は木箱。両腕の力をめいっぱいにして持ち上げる。箱を置くと中からごとつと金属音にも似た重厚な音がした。

「あいつ……やっぱり向いてないんだよ。こっちの仕事」

「そんな事言ってほんとは悠が心配できたんでしょ。上がって、あ

の子二階にいるわ」

二人で箱を持つ。それでも中身は重く腕が肩から落ちそうになるのを堪える。荷物を持って階段を登る。

「で、あいつは？」

「あいつ……ああ時雨ね。彼女なら定期検診よ」

雲に隠れた太陽によって海月荘は薄暗い。電気をつけて明るさを保っていた。そよ風が吹いているがそれは何時までかわからない。

そのうち、この海月荘を吹き飛ばさん限りの嵐となる。海の波も時期に激しくなっていくだろう。昼間の暑苦しさはすでに消えていた。悠の姿を見た慧が「バカ」とつぶやいた。彼女との仲はもう随分と長いものになった。それなのにこの頃はいつもこんな調子で距離を置いている。

二人は悠の傍に箱を置く。

「でも随分と速かったわね。まさか余ってたやつじゃないでしょうね」

「違うよ、完璧なまでの新品だってさ。なんでも今回の事件で最高に役に立って豪語してたぜ」

自信満々なその口調は作った魔術師のもの。彼女が言うには義肢製作を行なっている魔術師は頑固なおっさんとのこと。イザナギに所属する魔術師又は関係者の技師をすべて一人で受け持つ職人でもあるが誰も会ったことはないとも笙子は聞いていた。

「おっさんに渡された物だ。間違いなく本物だよ」

箱の蓋を開けると黒い金属の塊が現れる。義足として頼んだ物だった。がその中に在る物は足の形をした金属にしか見えない。さつきまで二人で抱えて持ってきたが重さは二十キロ以上はあった。そんなものを寝ている少年が履けるわけがない。

「重くない？」

「おっさん曰く履いたら重さはゼロになるらしい」

義足は冷たい鋼鉄で出来ていた。笙子が触れる。その触れた場所から身体が凍りつくほどの冷気に晒されるようだった。まるで海に

落とした義足がゴミに感じるほどの精巧さを持っていると知る。特に接続部分には魔力の流れをまるで血管のように繋ぐコードが充満していた。これなら悠の力を最大限に発揮させられる。特に霊に掴まれて海に落ちることはなくなるだろう。それにちよつとくらいの攻撃じゃびくともしない。でもこれだけの品物だと値段が気になるところ。

「金だが試作品だから無償らしい」

「ホント！」

笙子の心配を見透かしたように慧が言った。慧がうなづく。こない物がただなんて今回はついてるわとはしゃぐ。こういう時ほど慧のことをありがたく思うことはない。

「今回の事件だけど」

慧が突然きりだした。腕を組んで窓から外を見ている。窓には大きな姿をした明石海峡大橋がどんと構えている。

「飛び降り？」

慧がうなづく。

「犯人だけど視たぞ。オレならいつでも殺せるけどどうする？」

彩がいつのまにかやって来て慧に茶を渡す。彼女は珈琲を飲まない。家柄なのか洋風の食べ物には手を出さない。茶の香りに受け取った慧は口に含んだ。

「だめよ。あれは悠のためにいるの」

「なんだって悠なんだ？ あんなのバツサリ殺っちまえばいいじゃないか。その後、後ろに隠れてる奴も一刀両断に……なんでもない」

笙子の瞳が慧の言葉を遮っていた。事件の解決という点で言えばこのまま慧が終わらせてしまうのがベスト。何時とも知れぬ悠の回復を待つよりは人が死ななくて良い。見た所、ろくな装備もしていないが刃物のひとつでもあれば事は足りる。それくらいは常備しているだろうからバイクで行ってそのまま大阪へ行ける位だ。

「海の上よ？」

「問題ないさ、泳げるからな」

でもそれは駄目、と瞳で示す。仕事という名目以上に大事な事がある。悠には一人の男が親として接していた。その男はまだ悠の芽は小さなもので開いてはいないという。魔力のない慧と彩には観えていないが今、悠の周りには胎動する力が渦を巻いていた。その光景を見ているのはたった一人笙子だけである。

「実戦の経験が少ないだけよ。それに今回のような妖魔相手には奏者が一番適任なの。それぐらいは解っているでしょ」

慧は黙って肯いた。

「悠や他の奏者が奏でる曲こそ最高の武器になる。私や貴女の剣なんて適わないわ」

今度は窓の方へと歩いていく。まだ海はゆったりと揺れている。そのうち橋は通行止めとなる。

「特に今回は悠の為になるの。だから慧は手出し無用、良いわね」

「わかったよ。俺もただ暇なだけだし、面白そうってだけだったから気にするな」

海を見ながら返答する慧。彼女は魔術師ではない。悠のように能力者でもない。傍にいた四糸彩と何も変わらない。ただの人で他より運動神経が少し良い程度の人間だ。この道を進まなければアスリートになっていただろう。彼女の身体はライダースーツの上からでもはつきりと鍛えられている事が見てとれる。そんな彼女が視たというのは連盟より与えられている専用のゴーグルを使って覗いたにすぎない。霊などの実体を持たないモノを見る事ができるのは限られている。

「でも面白いことを言うわね。いつも面倒だとか何とか言っていて関わることを避ける慧が自分から関わろううなんて」

「なんでもない。ただ暇なんだよ」

頬を赤く染める。暇だ、暇だと口では言ってるが実際はそんなはずはない。今日も台風と共に北上し逸早く駆けつけたのだ。

「それじゃあオレは帰るぞ」

一気に手にした茶を飲みきる。湯飲みを彩さんに返した。私の言

葉に返事はない。

「遊んでいけばいいじゃない。仕事ないんでしょ？ もうじき悠の目も醒めるわ。仕事が終わって一息つくくらいの時間はあるでしょ」

「なにも急ぐ必要なんてない。彼女に仕事はない。笙子の元にやってくる仕事こそが彼女の仕事になるのだから。それにここには海もあれば山もある。観光だけでも暇つぶしにはなる。」

「生憎そんなものに興味が無いし俺がここにいとあいつが怒るだろ」

「それだけ言うとは慧は部屋から出て行ってしまった。最後、寝ている悠の髪をなでたのは驚きだった。笙子も同じように悠に触れる。」

「この子を預けた本人は今頃どこにいるんだろうか。私には何も言わないで消えた彼の行方は現在イザナギと学院で調査してもらっているが不明となっている。もう死んでいるのかもしれない。彼に限ってそれはないだろうけど。学院のパレードで聞いた彼の音楽は私の脳裏に焼きついたまま。強烈なイメージと魂を揺さぶる激しさは忘れられない。最後の言葉もはつきりと覚えている。」

「悠は俺より奏者としての能力がある。だからお前の力にもなるさ」
彼はまだ幼い悠の事を理解していた。だからこそ私の元に預けたんだ。私はそれに答えるために何事も力で解決するわけにはいかない。少しでも悠のためになるならと事件の解決は悠自身の音楽で終わらせることに意味がある。

「初めて織戸家の方を見ました」

「彩さんが言った。古くから続く連盟に織戸の名前は大きく関与している。京都の本部でも織戸家の発言は響く。彼女は産まれた時から定められた人生を歩んでいた。」

「あの子も私の仲間よ」

仲間というよりは妹に近いか、とふと思う。あのクールな彼女がその内側を見せるときは仕事の最中ぐらいなもの。バイクのエンジンに命が灯る。爆音をひっさげてバイクは走り出した。

第一章七話

暖かい風を感じて目を醒ます。部屋の中にいることは良く解る。冷たい海の中で途切れた意識はまるで空の上で蘇ったようだった。

窓を叩く雨の音に胸のうちがかき回される。雨音が異常に大きく響いて頭のなかまで叩く様に鳴っていた。

瞼を上げるとぼんやりと天井が見えた。目を動かせば隣の部屋で笙子さんが話をしているのが見える。自分が無事であるということを確認できた。妙な感覚だ、自分の生死を確認するために他の人を捜すなんて。

少年の身体は自由が利かず鉛のように重かった。腕はある。両腕とも健在、目が動くという事は顔も無事だろう。痛みは不思議と感じることはない。なによりあの海で落ちた時、身体の異常はなかったのだ。心と意識が吸い取られそうになった以外に問題はない。ただ、膝より下にあったはずの義足は見当たらなかった。

起き上がろうとすると全身が軋むように痛んだ、はじめて痛覚があるということにほっとした。痛みを感じることで生きていると感じる。だが、すぐそこにある階段のように音が鳴りそうなほど骨からの痛みを受けるとさすがに歯を食いしばる。特に指の先から肘にかけて筋肉が麻痺しているように鈍く感じる。眠っていた頃には感じなかった全身のひびを逐一得る。

しばらくギターを弾くことは出来ないかもしれないと危惧するが指先は悠の意識に従って1分の狂いもなく動いた。

身体の痛みは一旦、諦めて部屋を見渡す。

壁に首を持たれかけているように置かれたギターがケースと共に在る。どすボディをもった相棒は海水に浸かっても尚、その姿を新品同様に保っている。

(なんだ、これ……)

声は出せなかった。心で呟く。悠の瞳に見えた物は黒い塊。彼の

瞳には微かに炎を纏っているように見えた。海の中に落ちたとき履いていた義足とは別物だと一目で確認できた。

痛みに堪えながら腕を伸ばす。ギターに触れると忽ち黒に赤が灯る。真紅のような赤は悠の身体と繋がった証でもある。すると身体の痛みは和らぎ自由が戻る。今度は背を起こして黒い塊に手を伸ばす。触ったとき一瞬だけ痺れる。静電気に似たような痺れが指先から走っていく。その痺れは痛みというよりも衝撃であり苦しみはなかった。

そのショックでさっきまで見ていた夢さえも思い出す。記憶のなかにそれは存在していた。はつきりと憶えている。夢のこともある女のこともすべて。

とにかく黒い塊のような義足を脚にはめなければ立ち上がることも満足に出来ない。足が破壊された半年前からようやく慣れた義足だったがと新しい物を装着する。膝の途切れた部分は皮が綺麗に肉の部分を覆っている。義足が触れるとざらざらとした生の肉が擦れあうような感触を受けた。肉などないというのに義足から生えているコードのようなものが装着部分で接合されていく。そうやって繋がっていくのだ。

次第に黒から肌の色へと変わっていく。繋がった部分にはまるで骨のような継ぎ目と間接が出来上がっていた。それは肌の色をしていて血管もある。外見は本当の脚のようだ。ミミズのような管が刺さるように神経が一体となった。

「起きたようね、悠」

廊下越しに笙子が言った。悠の寝ている部屋は笙子の目から一望できる。襖は開かれています。悠が目覚めと同時に笙子を視界に入れたのと同様に彼女もまた同じようにした。つられて彩も部屋の奥から現れる。「おはよう」とだけ言って足の感触を確かめる。義足はすでに義ではなく真正銘の足となっていた。

相棒のギターも同じく自分の身体の一部となっている。傷んだ所はないか確かめるように一度、弦に触れてみる。確かな音が部屋に

響く。重く耳に響いた。破損箇所はなく濡れていた部分もない。いつも通りの姿をしている。それでも弦の取替えはしなければ駄目だった。ギターを握った手に自身の身体に流れる力の流れを感じる。いつも以上にいい音が鳴らせそうだと確信できている。すぐに弦を外していく。ケースの中に入れていた予備から取り出す。笙子たちは部屋から出ずにその様子を見るだけだった。

悠のギターは単なる楽器ではない。奏者と呼ばれる能力者にだけ与えられた紛れもない道具。義足と同じで作った人間は魔術師である。奏者は技術者ではない。調整は出来ても直すことまでは出来ない。壊れていれば今頃、橋の上にいただろう。窓の外では大きな音をたてて雨と風が嵐を作り出していた。

弦の張り替えと共に隣から笙子がやって来る。

「何日くらい寝てたの？」

「二日よ。体調はどう？ もう平気？」

体力は全快ではなかった。痺れは取れても身体に溜まった疲れはまだ残っている。しかし二日という時間の経過が何よりも優先させる必要を作っている。新型の義足のおかげで下半身に負担はない。指が動けばギターは弾ける。あとは自分自身の気持ちだけだ、と力をいれて立ち上がる。

「時雨が電話してきたわ。悠の携帯、海に落ちちゃってね。悪いけど壊れちゃったわ。新しいの用意する」

「いいよ、悪いのは僕だから」

「悪いのが解っているならいいわ」

笑って対応する笙子。彼女は「何かいる？」と聞いた。

「大丈夫だよ。でも……なにか食べ物でもあれば最高だけど」
腹のあたりをさすると空腹感があったことに気付く。

「すぐ用意しますね」

笙子の後ろで彩が動いた。隣の部屋では資料が並べられているのが見えた。その資料からさっと離れると階段を降りていく。やはり軋む音は鳴った。

「義足はどんな感じ？ 試作品だつて行つてたけど」

脚を上げる。膝から下の重みはない。まるで地上から浮いているような錯覚さえするほど。あの黒い塊だった時とは大違いである。上機嫌な彼女の言葉。いつもなら掛かった費用や面倒でこんな風を言う事はない。悠はいつもと違うなと感じながらもその性能の良さを伝えた。

「いいよ、これ。馴染む」

義足の感触は前の物より自然につながっている。破壊された脚が蘇ったかのように思えるほどだ。以前のように歩くことも出来るだろう。これなら長時間走り回っても大丈夫だと自信を持って言える。「さつき事件のことについて話していたんだけど」

「僕が意識を無くしている間、被害者は出た？」

部屋の入り口で壁に背を預ける笙子。首を横に振る。誰も事件に巻き込まれていない。この二日間、誰一人として死亡していない。

「犯人は見た？」

「ばつちりと。笙子さんは見えなかった？」

「見えたわよ。もう特定できてるわ」

一枚の紙を差し出す。左上にある写真に悠の目は動く。目の下に隈ができた髪の毛の長い女。細く痩せている人だった。あの海の中で囁いていた女とは肉付きが違うが同じ目をしていた。

「この人で合ってる。名前は……高岡美咲か」

海に引きずりこんだのは誰であろう彼女。しかし彼女が死亡したのは五年前と記載されていた。

「これまでに飛び降りて死んだ人たちのファイル見せてよ。その人たちのことも知っておきたい」

今回の事件、飛び降りで見なされたのは五人。

差し出した紙には高岡美咲のプロフィールが載っている。あの海の中で触れた瞬間、悠のなかには彼女の意識が流れ込んできた。その光景はまだ頭の中で再生できる。五人の被害者が死に至る場面も同じように流れる。

笙子が彩と一緒に見ていた資料の中から被害者のプロフィールを手に取り悠へ渡す。計六人のプロフィールと睨み合いがはじまった。海月荘は台風の中に在る。北上してきた台風は兵庫県全域をその手中に入れ力の限り暴れている。明石海峡大橋は朝から晩まで通行止めとなり船も出る事は出来なくなっている。各地への物資は四国側からに頼るしかなかった。窓には風が何度も叩きつけられ雨が壁に突き刺さりんばかりに振り続けていた。テレビではこの台風の進行スピードが異常なまでに遅いと報告されている。この二日、まるでこの淡路島に根を張るように台風は動かない。

テレビではこの異常気象についてずっと実況されていた。竜巻とも嵐ともつかぬ海の荒れ模様は全ての国民の目を釘付けにしている。「用意が出来ましたよ」

彩が階段の下から声を上げる。二人が降りると居間にはテレビが付けられ四人分の食事が並べられていた。テレビでは気象情報が右下に陣取っている。食事といっても豪華さはない。人数分のおにぎり味噌汁があるだけだった。

「ささつと作れるものっておにぎりくらいしかなくて……後、朝作った味噌汁ですけどいいですか？」

申し訳なさそうな彼女にありがとうと礼を言って座る二人。奥のキッチンから日高が戻ってくると手には梅干と焼き海苔を持っていた。

「まだ病み上がりだろう。あんまり食うとかえって身体に悪いんだ。これぐらいが丁度ええ」

悠はおにぎりを手づかみすると一口。噛めば米の甘味が口に広がる。程よい塩の味。味噌汁も塩辛い胃にやさしい薄味だった。

「これからどうするの」

「食べ終わったらすぐに行く。眠っていた二日の間にあれが現臨しなくて済んだのは幸いだけとおそらくもう時間はないよ。被害者が出ていないってのが理由だ」

「行かつて外は台風だぞ。やめとけ、また海に落ちることになるで」

日高が言ったが悠は義足の部分を見て首を振った。彼はこの二日、期を狙って沈んだ義足の回収を試みていた。しかしこの台風と事件の発生から船を出す事ができなかった。まだ悠の装着していた義足は沈んだままである。

「笙子さんは結界をお願い。あいつでかいよ」

戦闘準備は完璧だった。目標の居場所も掴んでいる。ここで時間を掛ければ間違いなく大変な事になる。四人のいる居間からは目標が見えている。雨は止まないだろう。だが悠の決心は揺らぐ事はない。

「この義足なら大丈夫。でしょ？」

「ええ。海の上でも地上以上の力で戦えるはずよ」

そう言う笙子も同じようにおにぎりを口に入れる。彼女は焼き海苔で巻いていた。ぱりつと割れる音がする。

「こんな雨の中で弾けるんですか？」

「雨や風なんて関係ないよ。元より音とは違うんだ」

「奏者の鳴らす音っていうのはね、私たち魔術師にしてみれば魔力の結晶に近いのよ。耳に聴こえる音とは違うの」

雨や風は差し支えない。奏者の力がその程度の騒音でどうにかなるものではない。彼らの力は何かで遮られるものではないのだ。音の前にあらゆる自然の遮りは効果を無くしそこに現れるのは色と音。演奏が始まれば奏者の力は何人たりとも犯せぬものとなる。

お茶を飲んで口の中を清める。急ぎすぎる心が抑えられたように思えた。

食べ終わる手前で笙子がテレビのチャンネルを変える。左上に表示されている時刻は五時を過ぎていた。

「人払いは三十分以内に完成させるわ」

「わかった」

まだ味噌汁を飲んでいる笙子だがその言葉に偽りは無い。悠は一度、部屋へ戻りギターを手にする。窓から見える橋にはここへ来た時とは全く違う負の感情が渦巻いて見えた。一階に降りてニュース

を見る。笙子は何度かチャンネルを変えていたがどれもすぐ近くの橋を映している。録画したものはかりだった。現在、ヘリが飛ぶには風が強すぎる。地上からの撮影も危険だと誰一人近づける者はいなかった。

その映像に必ず映る飛び降りた場所。その下には青い海があつて黒く渦を巻いている。

「それじゃ行つてくるよ」

「ちゃんと帰つてきなさいよ」

笙子は動かない。立ち上がった悠を見てただそれだけ言葉にした。このやりとりももう何度目だろうかと思ひ出を振り返る。悠は息を飲んで一人、山を降りていく。

第一章八話

船乗り場には一台も車がない。雨と風の中、悠は傘も差さずに一人歩いて目的の場所まで進む。台風は強烈な嵐を作り上げていた。それでも少年の足は鉄のように重くがっちりと大地に踏みしめる。一人きり歩く悠の周囲には一人も人間はいない。出港を見送り船は波止場に停まっている。休憩所にさえ人の姿はない。まるで見棄てられた廃屋のように凄惨とした風景が広がるばかりである。同様に周囲の建物からも人の気配が感じ取れない。悠はこの海を目の前にして唯一の存在となった。

海月荘から出て三十分は経っている。誰もいないのは笹子が結界をはったからに過ぎない。彼女は橋を含める周囲約二キロに渡り完全なる空間の拒絶を行なっている。タイムリミットは一時間もない。だがその間はいかなる人物もこの場所を意識する事も出来ず記憶する事も出来ない。人を払うは魔術師の役目である。いかなる超常な能力を持っていても奏者にこのような事は出来ない。また人間の力においても同じである。強大な権力も魔術の前には意味がない。魔術師としての本領が発揮できる場面だ。

奏者は彼女の手助けなくしてこのような地で戦う事は出来ない。対岸の住宅街は人で溢れかえっている。その目を欺く役目を彼女が果たす。

無人の港は荒れる波と暴風で景色を壊している。フェリー乗り場から進むと漁師達の使うボートが並んでいる。そこへたどり着くと海の底で標的が目を醒ました。浜に着くとその広大さと激動に感動さえ吹き飛ぶ。対岸まで広がる青は黒のように濁り逆巻いていた。砂浜はすでに侵食されていて降ることが出来ない。防波堤の先は崖のようになっていて一步踏み出せばあっという間にあの世行きだろ。

愛用のギターに手をかける。

深呼吸してゆつくりと弦に触れる。指先に全神経を集中させる。体を通して音が息を吸うように鼓動する。ギターから鳴る音は波を作り出す。確かな衝撃と共に降り注ぐ雨粒を弾いて服を濡らしていた雨さえも消し飛ばす。

眼差しは彼女たち六人を捉えた。

海の上、逆巻く波の上で浮遊する六つの影。悠がやってきた事に反応して浮かび上がったもの。そのうち一つが中心に浮き、まるで星の如く位置を取り悠を見つめていた。

テンポを上げる。次第に音は一つのメロディーラインにそって曲を奏でていく。雨や風の作り出すものとは違った音の波が海の波を宥める。ギター以外に何も無い。だが曲は大きく響き渡る。そして彼女ら六人のもとへ届くなり急激に激しさを増していった。

荒れる海の中、女の思念が浮かび上がっている。海の底にあった思念は自由に上昇していた。六つの影が天に昇るように飛翔する。悠には被害者たちと最初の一人、高岡美咲の顔が見えていた。あの痩せ細った顔ではない。自身らの本来の姿だ。だが白く灰が舞ったように脆いその姿はただ浮かぶばかりでこちらに来る気配はなかった。

まるでオルゴールの回転盤。星の五人はくるりくるりと踊る。誘っているのだ、少年を。

弦に力を込める。音は衝撃となり海面を切り裂いた。衝撃は女に向かつて走る。

「また来てくれたのね、あなたも一緒にいたいんじゃないの？」
女との距離は五百メートル以上、加えてこの暴風。互いに音も声も聴こえるはずはない。しかし悠の音は彼女たちに届き、彼女の声は意識への介入へと至る。あの海の中と変わらない。彼女の声は例え深海百メートルであろうとも変わらず聴こえるだろう。そう例えば橋の上であっても変わらないのだ。

音に魂を込める。音に色が点る。やさしい青色。悠は確固たる意思のもとギターを弾く。彼女の声が届かぬ場所に心はある。他人の

声に負けはしない。自ら命を絶つなんて想像さえ出来ない、と念じる。

「まずは一人目だ！」

瞬時に標的を絞る。まずは周りの五人。その五人はまだ踊るようにしているだけだがそれこそが彼女の力を強めていた。一人目は最初に落ちた人間。力はそれほど強くない。思念の強さはその人物の思いの強さに比例する。もちろん生きている人物でも同じで思いの強さがそのまま強さに変わる。

奏者にとって肉体の強さは関係ない。そして奏者の繰り出す音も思念の一部に変わりは無い。一人目の思念はすでに消えかかっている。おそらくは魂は半分ほど喰われている。

音が走る。海面を走る衝撃で一瞬にして消滅したのだ。あっさりとしたものだった。この世との最後がたったこれだけで終わってしまう。続いて二人目も同じようにして消えた。これが今生最後のお別れというのは切ない。

「なにをするの？ お友達になりたいんじゃないの？」

叫ぶ女。だが悠は手を止めない。

「せつかくできた友達なのよ、やめて」

鳴り止まぬ音について中心の女が飛び込んでくる。その速さはまさに神風。彼女に触れるのは良くないとすかさず飛び退く。義足的能力は人間を圧倒していた。三メートルは飛んでいる。

「なにが友達だふざけるな！」

本望じゃなかったかもしれない。不幸な事故だったかもしれない。だからって他人を巻き込んでいいはずがない。

強く弦を弾く。魂の高鳴りが響き、女以外を吹き飛ばす。さすがに消し去ることは出来なかった。だが動きを止めることくらいはできたようだ。動きを制限され身動きの取れなくなる周りの三人。そこへ一撃、衝撃を飛ばす。丸い筒のような衝撃が飛んでいく。見事飛散させる。

「これで三人目」

「やめてって言ってるでしょうが！」

彼女の叫びを無視して再び高く飛び上がる。刹那、正面には残りの霊が二体。視界に入る。邪魔はいない。ならばとギターを鳴らし同時に消し去った。彼女を取り巻いていた存在は全て消え去った。周囲を浮いていた彼らは誰もが確かな意識をもっていなかった。考えることの出来る霊はただ一体。髪の毛の長い女、高岡美咲の霊以外に他ならない。

さすがに空中で動くことは出来なず彼女の腕が触れる。痛みとともに押し迫ったのは意識だった。彼女の思考が逆流してくる。彼女の死ぬ直前。なぜ死んだのかその感情が雪崩の如く悠の頭にかぶさっていく。

「あんたのこと、可哀想だと思う。けど、だからってやっちゃいけないんだ！　こんなこと」

全てを払いのける。女の力が弱まったような気がしていた。まるで払いのけなくとも彼女は自分から手を離れたような感じ。彼女の意思が消え去る。同時に彼女も悠の身体から離れていく。そして落ちる。足場はない。下降にはその身を飲み込もうとする海があるだけだった。渦を巻き落ちてくるのを待っている。

義足が震える。何も意識していない。膝から下が勝手に体勢を整えると装着する前の黒い姿へと戻った。

「そんな嘘でしょ？　なんで立てるの？」

「これって！」

悠自身も驚愕した。しかしそんな考えは瞬間でしかない。確かに悠の足は、身体は海面に浮いていて義足は逆巻く波さえ寄せつけることもない。蒼い光を放って立っている。

「この義足本当にいい物だ、ありがと」

ここにいない笙子への礼をする。

「君のその脚……邪魔よ」

女が追いかける。しかし悠の見た方向は違った。彼女へ向ける音はない。迫ってくるもう一つへ心を向ける。

白い靄。

船でやってきた日、最後の被害者を包んだあの白い靄。白色の巨大な闇が包み込むように迫り来る。義足は悠の意識とは別にあるように勝手に飛び跳ねる。しかしその動きが少年の行動を予測したように可動するのだ。あまりにも無茶苦茶な軌道に白い靄は動きを追えずにいた。

靄の中、白い姿を確かに見た。

赤い眼をしている。大きさは七メートル……いや、それ以上。海面に浮き出た身体だけじゃその底は測れない。

「ようやく出てきたな」

女の霊は一人では何も出来なかった。彼女の心がどうであれそれを実行させることが出来る者がいる。古くから人の心を操り世界に歪みをもたらす者がいる。それを妖魔と言い彼ら奏者によって静められてきた存在。

眼前の敵を見る。視界はこの大きな怪物を捕らえ靄を消す。

「蛇か」

白い体躯をくねらせて海面に現れている。とても大きな瞳は赤く光る。両者の瞳が交差する。互いに敵と認識した瞬間であった。

再び海面に降りて距離を取る。ギターの力を最大限に引き上げる。少年の相棒は全身で掻き鳴らす。今度は全身の力を一点に集中させた。大きな力を纏めるには時間がかかる。二対一だと不利かと見上げれば彼女は空で停まっていた。

呆然とその場で停止している女に大蛇は口を広げて進む。

昔から世界には闇がある。その闇は時に人の世に姿を現し全てを飲み込む。

肉も、骨も、記憶も、魂も、その存在さえも。

妖魔は生物の魂を喰い生きるとされる。彼らの誕生から死に到るまで全て他者の命で生成されているのだ。

飛び込み命を失った者達の魂が希薄だったのはすでに蛇が食った後だったから。悠が消し去ったのは最後の欠片。力をつけた妖魔は

身体を得てこちら側へと現れる。

それを現臨という。

この世に現臨した蛇は今まさに役目を終えた女の魂を喰らい尽くそうとしていた。

「やらせない！」

弦に心を込める。狙うのは蛇だ。一気に力を解放する。音は衝撃波から赤い光と姿を変えて蛇に伸びる。一筋の光が捉えたのは肉体。光の動きはギターで奏でる曲で調節される。光は音が鳴りつづける限り消えることはない。光は消えない。大蛇の身体を光のロープで海へ叩きつける。そこに腕力はいらない。必要なのは音。それも強い意思の籠った音だ。身体の大きさは比にならない。

大蛇は海面へ叩きつけられるとそのまま海へと潜った。光はまだ蛇の身体を縛っている。そのまま釣り上げる。波が強く大きく揺れる。圧倒的なまでの強さだった。だが義足が耐えられず痛みを訴える。悠が足元を見ると脚が浸水していた。

海底からの咆哮。一撃だった。身体は真下からの暴力的な水に押し上げられる。義足は力の限り主の体を守る。

蛇の咆哮は巨大な水の塔を形成しそのてっぺんに押し上げられた。飛び降りる事は出来ない。すでに悠の身体は空にあった。それでも心は強くある。どこにいる、と大蛇を探す。

遅かった。思考が行動へ移る前に大蛇はその体躯を移動させてきた。

身体は塔のてっぺんからさらに上空へと追いやられる。まるで玩具のように浮遊するしかなかった。驚くほどゆっくりとした時間の流れた。雲にさえ手が届くほどに思えた。さらには遙か先にいる地上にいる笹子の姿まで瞳に映った。

浮遊から落下へと変わる。口を開いて待っている大蛇へ落ちる様は傍から見て酷いものだなと感心する。

「イメージは……虹。七色の光の虹だ」

コントロールノブを精一杯に引っ張り一点集中型に変更する。

窮地に関わらず悠は冷静だった。

「光のシャワーだ。受け取れ」

最初は赤。次は青、緑と次々に虹色の光が溢れる。天から降り注ぐ光は次々に蛇を掴まえていく。口を閉じさせてその上に悠が乗る。生身の魂と触れる。妖魔に身体はない。肉体は魂が実体化したもの。触れればその熱さに身を焦がす魂の現象。まるでマグマのように燃える命。だが義足は物ともせず立っていた。

「ここまでくると凄いつていうより卑怯だな。でも、お前にはこれくらいがいいのかもな」

最後の一本。ギターネックより生まれる光は無色透明。雲の上で輝く月が一瞬だけ悠に呼応したように輝く。暗闇を一筋の光が照らした。まるで琥珀色の槍。

黄金色に染まった光が蛇を一刀両断にした。

蛇には叫び声さえ出ない。あげさせない。

引き裂いたその最後、蛇の腹に溜まっていた人間の魂が解放されていく。さつき消した人たちのものだった。その残りが溢れ出す。

彼女、高岡美咲の魂さえもそこにあった。

まだ海は荒れていたが悠の心は穏やかで波紋一つない水面そのものだった。

塔が崩れ悠の身体は海へと落ちていく。落下する中で見た命の光は異常なまでに美しい。海面に降りるが痛みはない。すべて義足が吸い取った。

消える命のなかに彼女の意識が垣間見えた。

「これで本当に最後だ。でもこんどは一人じゃないよ。さようなら」
上昇する先には彼女を待つように五体の霊がいる。地上、淡路島からは六人が見失わないように緑色の川が流れていた。

少しばかり先に逝ってしまったが最後に残った心は彼女と一緒に
行こうとしている。消える瞬間、彼女が涙を流したように見えた。
でも幻影だ。

彼女の姿はいつの間にか消えていたんだ。

してやれるのはここまでだ。

すべての光がなくなる。

雨曝しのなか僕はその後もずっと一人でギターを弾いていた。

第一章九話

かの少年が戦闘を始めてから五分ほど経つ。雨が降りつづける中、一台の車に乗った笙子と彩が少年を見ている。人を避けさせる魔術はすでに発動している。少年の戦いを見られる者は二人以外にない。対岸の街も少年と嵐の中で揺れる影を認識できない。それは壁を作るわけでもない。人間の意識そのものを背けさせるのだ。術の発動している間、そこに何があるのかなど誰も気にしない。場所が大きすぎるため結界の耐久時間は少ない。持って二十分が限界だろう。しかしその間に悠は戦闘を終わらせると笙子は読んでいた。

戦局はどうだろうか、と悠に目を向ける笙子。

周囲の雑魚を一匹ずつ消している。あれでは時間が掛かるかもしれない。なにより奴の姿が隠れたままだ。死者を弔うことなど後回しで良いというのに。ほんの少しの苛立ちの中、飛び回る悠の姿には圧倒される面も現れる。今回の義足、間違いなく最高級の一品だ。まさか海の上を走れるとは思いもしなかった。

「笙子さん」

隣りで双眼鏡を通してみている彩。連盟から与えられている霊視を可能とする眼鏡である。魔術師と知合いだからと言って誰もが霊能力を持っているはずはない。連盟で働く人間の大部分は普通の人である。彼女らが少年と戦う影を見るにはこういった装備に頼る事になる。

「あの飛んでいる彼女、例の高岡美咲さんで正解ですね。写真とそっくりですよ」

高岡美咲。悠を引っ張り上げる際に見た女だった。

今回の事件、一番最初の原因はなんだったのか。その問いの先に彼女がいた。この数週間で起きた自殺が引き金になるには少し時間が早い。妖魔に操られた人物がいるならもっと確かな意思を持った魂が必要になるはず。なのに最初の犠牲者は極めて普通の考えをも

つていた人物でとても自殺するような人物ではなかったと知人、友人からの証言も取れている。この世に絶望も失望もしていなかった。また生活は順風満帆とはいかない物の不幸せではない。そこに妖魔自ら心に介入するのは不自然だ。生きている人間の意識を意図的に操る事はいかに奴等といえど難しい。特にあのような中級の妖魔であれば尚の事。

完全に心が無防備になった者こそが妥当だ。

それが彼女、高岡美咲。

「哀しい人生ですよ。特に最後は……私でも死にたくなりますよ」
双眼鏡越しに観る彼女がつぶやいた。私たちが得た情報は彼女の末路だった。高岡美咲の出身はこの兵庫県淡路市、つまり淡路島の北部となっていて彼女の実家はこの近くに存在している。イザナギの情報はとても早く正確に彼女が死ぬまでの経歴まで綺麗に調べあげていた。

彼女の家は私達の行く先にあつた。

人避けの魔術はその効力が切れるまで仕事を果たす。笙子は車のエンジンを再び点けると無人の道路を走る。

高岡美咲は高校時代まで何不自由なく暮らし、こちら側とは違う普通のまともな人生を送っていた。自殺の原因は神戸の大学に進学した頃。その頃に出会った友人。それが全ての元凶とも言うべき存在となった。

「友人に恵まれなかったのね」

その友人と出会った直後、彼女の運命は激変する。大学二年の夏、彼女は大学を退学処分される。理由は学費の滞納と本人の出席率の低さだ。春頃からはどの講義にも出席していない。その背景には麻薬が隠れていた。昨今、日本でも麻薬は簡単に手に入れることができる。単にそのルートが存在する側にいるかどうかが問題だ。

彼女の場合、友人が線引きとなった。手に入れた麻薬を使用した彼女は日に日に狂っていった。ほんの少しの快楽は彼女の神経を破壊するまで時間は掛からなかった。

最初は遊び感覚だったんだろう。すぐに止められると思ったのだろう。その軽い気持ちで身を滅ぼした。彼女に残った多重債務の額は二百万。親はその金額に驚いたらしい。一人娘が大学に入学した頃の嬉しさなど消え嘆きだけが溢れた。

レポートには記載されている。どうやら薬を購入するのに親からの学費をつぎ込んでいたらしい。中退してからの後も酷い。繰り返し薬物で身体は徐々に内から破壊されていく。精神も病んで入院していたと記載されている。身体が崩れていく前に精神が駄目になったんだろうな。この頃には親は彼女を見離していた。それでも可愛い一人娘だ、何とかしたいと神戸にあった精神病院をあてがっていたのだろう。結局それが彼女の最後を決めてしまった。

「彼女の最後は自殺なんですよね？」

「違うわ」

彼女の最後は自殺と記されている。でもそれは違っている。もし自殺と言う選択を選ぶなら離れたこの場所へやって来ることはない。「彼女のデータに書かれているでしょう。病院から抜け出した彼女は車を奪って走っていたと。そのとき目的の場所があったのよ、おそらくその場所は彼女の実家」

高岡美咲が車を強奪したことは表には出回っていない。精神病患者が病院から抜け出し死亡したなどと世間に知られればどれだけの被害が出るか解らない。病院は隠していた。連盟はその情報をも短時間で聞き出した。

「なぜですか？」

「人間、弱り果てた最後に目指すのは大抵、自分が生まれた場所よ。もしくは育った場所。彼女もそうやって実家を目指した。自殺として断定されたのは彼女の精神状態やブレーキのかけた際の跡がなかったことからでしょうね」

その頃の彼女に自我はほとんどなかったはず。実家に帰ったからってどうなるものでもない。ただそこにあるのは精神の崩壊があつて真っ白な空白となる……それだけだ。どうしようもなくなった時、

人間が向かう先は家だろう。大半の人間は家に暖かみを持ち無償の愛を受けとっている。そこは自分の敵がない最後の砦。

笙子の瞳に映っていたのは無人の道路ではなく荒れ果てた木造の家だった。車の先にそんな物はない。ただの幻想であり彼女の想像でしかない。

「橋から転落したのは偶然でもなんでもない。無理やり運転していたのよ。免許もない彼女が最後の思考で……最悪の状況下で彼女は運転をしていた。そしてあたり前のように海へと落ちたのよ」

巨大な橋の柵はとんでもなく軽いもの。時速百キロ以上で突撃すればひとたまりもない。彼女を乗せた車はそのまま海へと落ちる。レポートには遺体は車と一緒に引き上げられたと書いてある。おそらく最後に残した一人で死にたくないという思念だけがあの場所に留まったわけだ。そしてその思念はやがてあの妖魔に利用され今回の群発自殺を招いた。

「あの五人は何気なく走っていただけ。彼女の声を聞いて突然、死んだって言うことですか」

「そうでしょうね。高岡美咲はもつと漠然とこの橋を走る人たちに向けられていたでしょうね。被害が五人で少ないほうよ」

そう語る笙子の瞳にも妖魔が映った。悠は天高く飛んでいる。なにも心配することはない。あの子の瞳は揺らぐことのない信念と意思を持っているとざわつく心を落ち着かせる。悠を預かるとき男が言っていた。自分を超えることの出来る奏者だと。その素質を持っている大切な子だと。笙子は彼からあの子を任されているのだ、死なせてはならない。だが無様に死を迎える程度なら助けはしないだろう。

それは私自身もそうだ。

「悠君、大丈夫なんですか？ 助けなくていいんですか」

丸い後が付きそうなほどに双眼鏡をくつつけて見ている彩が言った。笙子はいつとすでに瞳にその光景を映しておらず道路へと向けられている。

私はあの子を見てきた。あの程度じゃ死なない。それどころかもう勝っている。光の矛先はすでに蛇を捉えていると肌で感じていた。「信じているんですね」

「ええ、だって私の息子よ」

自信を持って発言する。血の繋がりはなくとも、何所の誰から産まれたか知らないけれど、あの子は自分の息子だ。

見れば光は蛇を穿つ姿が見えた。琥珀色の光はこれまで見てきた奏者全てを超える輝きであった。関西という枠に収まらず全世界でも稀に見る光。

本当に律さえ超えてしまいそうなほど輝いている。でも律は悔しいなんて思わないだろうけど、それはとてもおかしくてうれしい出来事なのだ。

車が停まる。高岡の表札が掲げられた家がある。だが人は住んでいない。無人の屋敷はすでに寂れ雨に晒されていた。高岡美咲が死亡した日からすでに五年が経っていたのだ。車から降りると傘を差す間もなく冷たい雨が全身を濡らした。

振り返れば丁度、悠がいる場所が見えた。事故の現場からもこの場所は見える。空高くに浮遊する彼女はじっとこつちを見つめていた。その瞳の先には私ではなく彼女の家があるだけ。

「ここでなにをするんですか？」

「供養……かな」

笙子が懷より杖を取り出す。といっても宝石や装飾はない真直ぐで細い棒のような物だった。杖を指揮者のタクトのように振るう。すると寂れた家は光を放ち天へと昇っていく。その最中、消え行く彼女の魂を包み込まれていった。

第一章十話

大阪、いつものように電車で揺られて辿り付く帰路。人気のない道を選んで進む悠。淡路島の一件は笙子が後を引継ぎ先に帰ってきたのだ。とはいえ引継ぎといっても事件の犯人たる人物は死亡しており妖魔も悠の音楽によって消滅している。あとは事後処理があるだけだった。そうなれば悠がいてもする事はない。笙子は「遊んでいけば」と声をかけたが無駄だった。嵐が去り船が出港できるようになった途端に乗った。

そして今、自分の部屋となっている質素な空間へと戻ってきた。あの潮騒の香りは当然ない。

生活感のないフローリングの部屋。冷蔵庫の中に入っているビンを取り出す。部屋の隅にまで進むと壁に背を預けてギターをケースから取り出す。あの台風の中でもギターは一切の損傷も錆びもせず身体を保っている。誰もいない無音の空間だった部屋に静かな音が鳴る。

弦は彼ら奏者の力を響かせるパーツ。すぐにギターの手入れに入ろうと予備のパーツを広げた。全ての弦を取り部分ごとに分割する。ボディ部分を丁寧に磨く。このギターの本来の持ち主は現在行方不明で調査中。旅に出た本人が最後に悠へ預けたものである。

黒いボディに光の角度で色が鈍くも明るくもなる特殊な偏光色加工。ボディの右下には赤い色の破線がながれている。破線はネックへと一本の線を残している。まるで生き物のようなこのギターは悠の相棒となっている。

ゆっくりと丹念にボディを磨き上げていく。分解したパーツを組み立てていく。最後に弦を張っていくと再びその姿を取り戻す。もらったこのギターの手入れはこれで終る。なにも特殊なことをするのではなくギターを吹き上げるだけといったほうがいい。もし半壊するような事があれば術者は奏者ではなく専門としている人物の

力が必要となる。

ピンと張った弦を弾くと部屋に心地よい音が響く。力を放つと弦は痛みすぐに新しいものと交換する必要がある。

「やっぱり悠の作る音は素敵だね」

擦れた声がする。かすかに女性の物だとわかる程度のもの。振り向けば窓辺に夜風と一緒に彼女がそこにいた。

「ちゃんとドアから入ってこいよ」

悠はそんな彼女に目もくれずドアを指さす。

美しい銀色の髪にこれまた整った顔。背は百八十センチはあろうかという長身の女。悠と並ぶとまるで子供と大人。彼女こそ笹塚笙子の事務所立ち上げに奮闘する最後の一人である。名を時雨という。面倒なんだから

「ここは三階だよ」

「関係ないわ」

まるでどうということはない。地上三階であろうとも彼女は軽く飛びやってくる。だがこれは彼等二人の日常であった。時雨はドアから出入りせず開けっ放しの窓からやってくる。半年前の一件以来、彼女は悠にべったりとなっていた。

「検査、どうだった？」

「退屈だったわ。何時もと同じように薬と身体の検査ばかり、それより悠はどうだった？」

「どうって？」

「淡路島に行ったんでしょ。お土産とかないの」

手を差し出す。白い掌が下を向く悠の目に映った。何かよこせと言いたげなその動きにも悠は動じない。するとそのまま身体を摺り寄せる。

「ないよ」

時雨は身体をぴったりと合わせると視線は足へと動いた。眉間に皺を寄せるようにして覗く。

「足……変わった？」

悠が頷くと手をあてがった。一心同体と化した義足から時雨の温もりが伝わる。荷ねくんよりも僅かに熱い体温だった。

「向こうでさ、前の奴落としちゃったんだ。でもいいでしょ、これ」

「波長が合うみたいね」

摩るように義足の部分をさわる。義足を通して時雨の力が流れ込む。

「どうしたんだよ」

いつもとは違う彼女の仕草に戸惑う。彼女の身体が密着する。背中に暖かみを感じる。

無機質でしんと静まり返った部屋に人の触れ合いで火が灯る。

「寂しかったんだ。音、聴かせて」

時雨の身体は継ぎ接ぎでできている。服の下からその継ぎ目がほんの少し透けて見える。胸は平べったく背中には彼女の純粋な温もりだけが伝わっていた。

僕はそのぬくもりの中でギターを鳴らすことにした。

第一章登場人物

ながせゆう
長瀬悠

年齢は15歳。

イギリスの教会前に捨てられていたところを拾われる。

出生は不明だが奏者としての能力に優れており長瀬律の養子になる。

律が旅に出る際に笙子に預けられ現在一人暮らし中。

両脚を失っており義足である。

使用する楽器はギター。

ささづかしゅうこ
笹塚笙子

出身は淡路島。神戸イザナギの党首である「泰然長治」と愛人の間に生まれる。

魔術師としての才能、素質に恵まれている。

学生時代に長瀬律と恋人関係にあったことから長瀬悠を預かる。

おりとけい
織戸慧

京都、関西魔術連盟本部に所属する。

笹塚笙子とは姉妹のように仲がよく仕事も協力関係にある。

魔術師ではなく普通の人間。戦闘は強化スーツと日本刀を使用。

しぐれ
時雨

正体不明の言霊使い。

悠のことが好きらしく一緒にいることを願う。

異常なまでに戦闘力、生命力が強い。

四条彩

連盟に所属する協力者。

第二章一話

神戸の山間。まるで永遠に凸凹の続くような土地。あまりにも不釣合いな一本の線が天へ向かって立っていた。地上から少し首を上げればその塔を見ることはできた。たった一棟、山の天辺からそびえ立つ。

近代、特にこの2000年以降、都市部ではその街のシンボルとして背を高くした建造物が増えた。増加する人間を収容するための施設とはいえ数は多く自然を破壊して作られた。その時代の流れかすでに人の住む場所さえも空へ向かって高くある。人々はその巨大な建造物に恐れを抱くどころか自らの業の素晴らしさを誇るようになった。

関西、兵庫県は土地の安定が非常に厳しく瀬戸内海に近い都市部は山に囲まれるようになっていく。海岸の華やかさに比べ山は多く巨大である。主要都市から離れればすぐに山が出現し行く手を阻もうとされる。ここが日本であるため仕方ない事だが不便この上ない。住民はその山を削り取り作られた住宅街に住むほどだ。

そのような立地に関わらずこの真白き塔はそびえ立っている。根をはったのは他に較べると平地のように削られた山。その肌の殆どは高速道路のため削られていた。地上五十五階建ての建造物にはあまりにも不都合だった。だがこの場所に建てた人物はここでいいと言い張った。

まるで塔の如き出で立ちである。日本全国を捜してもここ以上に高い場所は滅多にないだろう。数キロ離れた都市からでも周囲の山よりも高いその塔は確認できる。

塔の名前は『神戸言霊学園』という。そして塔の中身はマンションである。

建てたのは日本人ではない。少し昔、この土地を買収したドイツの会社がある。その社長であるセルマ・フォースターという大金持

ちがいた。自分たちが日本へ移住する際に必要だと主張し、たった一年程度で建ててしまったのだ。

建造主であるセルマ・フォースターは自分達の意志だけで工事を進めた。マンションとして建造されたのにも関わらず日本人……いや他人のために用意した部屋はなかった。入居者は全て、彼女の知人とされ部屋を借りる事も購入する事もできない状況であった。所有者の意向なら仕方がないこと。それぐらいは理解できるが他にも地域住民からの苦情や風景を壊されたなど反発もあった。

その全てを受け取ったのは関西魔術連盟であった。このマンションは彼らにとつても必要なものであったのだ。事態を收拾するには時間が掛かったが程なくして騒ぎは消えた。今ではまるでシンボルの一つとしてその姿を見せている。

マンションには当然、住民達がいる。セルマ・フォースターが言う知人達だ。だが以前より日本に住んでいた者はごく僅かである。完成後、どつと移住してきたのだ。親のいない子供たちが、彼女と一緒に何十人も一斉に。

一階あたり二十室から三十室とあり、そのどれもが3LDK以上という空間を保有している。子供達が住むにはあまりにも贅沢なものだ。防犯システムも最先端の物を導入しており目の肥えた高額所得者さえ満足する内容である。もちろんこのような建造物がメディアによって報じられないなどと言う事はない。建造開始頃からずっとマスメディアの目に晒されていた。

当然のようにテレビ、新聞、ネットといった媒体を通し情報が流れた。それを見てここへ入居を願った者たちが殺到していたとも報じられていた。だが建てたセルマはそれを鼻で笑うように拒否した。最上階の一室。窓から覗けば遠くに瀬戸内海が見える。元より都市が位置する場所よりも高い場所に立っているのだから当然だ。夜になれば海岸を輝かせるイルミネーションが見える部屋。見下ろせば遙か下、意識が揺らぐほどの高さを思い知らされる。それがこの場所がまるで別世界にいるように思わせる。平行に景色を観ると一

面の青。

まるでここは雲の上のよう。

しかしながらこの素晴らしい景観に一切の興味を示さないのがこのマンションの住民たちだ。彼らには景色など見えていない。窓から見えるその全てがどうでもよく写る。それはこの部屋でカタカタとキーボードを押しつつける男にも同じだった。もう彼此半年近くになる。一日の殆どをパソコンの前で過ごしていた。部屋を出ることはなく食事はインターネットによる通信販売で届くものかデリバリーばかり。運動などまったくしない。一日に歩く歩数は百歩以内、不健康極まりないこの生活を送ってきた。それでも身体能力にそれほど衰えはなく脂肪もついていない。元々、痩せ細っていたため少し肉がついて程よい感じになっただけである。

部屋の中はシンプルといえば聞こえはいいが言い替えば殺風景である。パソコンの十五インチモニターによる光以外はなく広い部屋の端にベッドがあるだけで生活観はまるでない。フローリングの床は痛みも埃もなく出来たばかりの頃と何一つ変わらない。部屋を遮るドアの隙間からも光が漏れてくることはない。どれだけ広い空間を持っても彼はこの部屋で一人きりなのだ。

この半年、部屋を訪ねてくるのは限られている。その一人がやってきた。

「お父様、お呼びでしょうか？」

それは突如のこと。美女が現われる。部屋のドアは閉まったままだ。美女は腕はおろか指さえ動かしていない。もちろん彼はパソコンの前から動いていないためドアに近づいていない。だが驚く事はなかった。突如として現われた美女に一切の挙動なしに話をはじめた。

「ええ、時間はぴったりですね。良い事ですよ、氷室」

彼の見ている物はモニターの右下に映っていたデジタル時計だった。

氷室と呼ばれた美女はにっこりと微笑む。彼女の声は凜としてい

て清々しい。自信に満ち溢れている。キーボードを押すことをやめるとモニターへ向けていた身体を彼女のほうへ向ける。彼は壁に手を伸ばし電気をつけた。部屋にぼんやりと琥珀色の光が点る。

氷室の姿は実に痴美で誘惑的である。肩より少し長い赤い髪はふんわりとしたウェーブがかかっている。名前とは違い青い瞳があった。彼女は薄い青の制服を着ている。制服はシャツワンピースタイプでネクタイはない。このマンションに住む住民の九割がこの制服に袖を通してしている。だぼったさはなく彼女のくびれも豊かな胸も良く見える。日本人離れした彼女は名前こそ日本人のものだが姿は別の国であった。

「当然ですわ。遅れるはずありませんもの」

胸の辺りに手を当てて話す。おっとりとしながらも気品溢れる口元と仕草から彼女の育ちの良さが見える。

対してパソコンを弄っていた彼は同じように動くがどこか歪である。ゆっくりと動いているというよりは動かすのに時間が掛かると言うべきか。言うならば人間らしくない。そんな彼は白衣を着ている。部屋と同じ色の白い染みのない一品だ。そればかりか所持しているシャツ全てが城で統一されていた。上半身は彼の白髪と合わさりほぼ白であった。その髪から覗く瞳の黒はまるで闇の中に誘うように動く。

その闇を和らげるのは眼鏡。黒のフレームで作られていた。中心の瞳との壁を作っているガラスが膜の代りをしているように黒を濁す。

「氷室にお遣いを頼みたくてね。行ってくれるかい」

立ち上がり美女の頬へ細い手を重ねた。やはり彼の行動は少し遅れたように動く。ひんやりとした手と薄い皮の触感が美女の心に触れる。氷室はその手に自分の手を重ねた。

「もちろんでございます。氷室はお父様の言うことなら全て聞きいれ実行しますわ」

彼女にとって当然の返事であった。これまでと一緒に、ずっとそう

してきたようにこれからもそうであるように彼女は口にする。

「しかしながら」

氷室が口にした。自分から発言する事は滅多にないというのに彼女は口を開いた。

「なんででしょう？」

胸の前にあつた手を下ろす。

「このような時期に私が動くということは……やはりお姉さまの件なのでございましょう？」

「察しが良いですね」

男は口角を上げて微笑む。それとは逆に氷室は俯く。

「ですが私はお姉さまの対であり敵に成りえませんのになぜ私なのですか」

彼女にはお遣いの意味するものが解つていた。この後、自分に課せられる使命も。だが自分の力がどの程度かということも知つている。だから理解できないでいるのだ。困惑は思考を鈍らせる。男は告げた。

「それなら大丈夫ですよ。あの子はもう、すでに私の娘でも氷室の姉でもないのですよ。私はその彼女の元から、かの少年を連れて来て欲しいのです」

「それは……それは少し哀しいですわね」

触れた手に頬擦りしながら氷室がつぶやく。ここにいない姉を想う。瞼を閉じて男の肌に全てを預けるようにする。しかしその口元は緩んでいてまるで善かったと口に出すものとは逆を示しているようにもあつた。男はそのことを解つていた。解つていて髪を撫でる。「それでは行つてきますわね、お父様」

頬を離しそつと口づけを交わす。美女の熱い吐息が微かに男に触れる。雄を誘う雌のの匂いがした。唇は芳醇な果実のように絞れば赤く弾けるだろう。今すぐにでも奪いたくなるその一息に男は微動だにしなかった。唇が離れた瞬間、氷室の姿が消えてしまう。残ったのはあの男を魅了する肉体から伝わってくる甘美な香りだけであ

った。

「頼みましたよ、氷室」

一人残った部屋で呟いてみる。静けさの戻った部屋ではパソコンの静かな音がするだけで他には何もない。再び机に戻ろうとすると入れ替わるようにドアを叩く音がする。男はその音に向かう事はなかった。二度、三度とドアが叩かれようやく鍵が開く音へと変わる。「ちよつと聴こえてんでしょ！ 出なさいよ、夾」

さっきまでの雰囲気全て消し去るやかましい声だった。

「セルマ、静かにしなさい」

金髪のロングヘアがよく揺れる。ついでに着ている白と金のドレスもよく揺れていた。夾と呼びセルマと呼ばれた彼女は男から見てもまだ幼くあった。さっきまでいた氷室に比べると少し年上だろうか。そんな彼女はひらひらのドレスを着てよく跳ねる。彼女こそこのマンシヨンの建造主である。

「あんたねえ、ここの部屋を誰が貸してると思ってたんのよ」

「君だったね。感謝してるよ」

「ええ、そうよ。存分に感謝しなさい」

自己主張の少ない胸を張る。背丈もあまりない。まるで洋風人形のようなのである。

「で、なんの用ですか？」

男の問いに部屋を誰かを捜すようにきょろきょろと見る。しかしここは白い壁に包まれただけの部屋。男以外に誰もいない。セルマは鼻を一息鳴らすと眉毛を上げた。

「氷室に行動させたの？」

部屋にはさっきの匂いが残っていた。同じ女ならその匂いに気付く。とくに彼女ならよく解る。男は声なく頷いて見せた。

「私の子供達じゃ不満ってわけ？」

「そういうわけでは在りません。私の個人的な用ですからね。セルマに力を借りなくともこの程度……」

「わかったわ、でもあの子失敗するわよ」

ふふつと笑うだけだった。ここを出て行くとき氷室は口づけはいつもより熱かった。その熱さを思い出すだけで心は高揚する。

「失敗したら君に頼むよ」

「そうするのが利口ですよ。白河先生」

自分の言いたい事を告げるとまるで嵐のように彼女は去っていった。セルマの騒がしさに白河夾は心を乱さず一人、机と戻っていく。彼のなかに入っては消える彼女たちに自身の意を持ちあわせていなかった。

第二章二話

季節は巡り赤く燃えるような秋。猛暑は過ぎ去り少しひんやりとした風が肌をなぞる。窓を全開にして自然の風を身に受ける。八月、九月の熱くゆるやかな日々突然の終止符を打ったのは何者でもない、彼等全体の行動を管理する関西魔術連盟である。連盟と称されるこの組織は笙子や他の魔術師たちが在籍する巨大な組織であり滋賀から岡山までを範囲としている。その本部は京都にありその他県の関西地方組織を纏め上げる巨大組織である。同様に関東、北陸、中国……と地方によって統括する連盟が存在する。関西魔術連盟は日本の誇るもつとも古い組織である。

連盟は各県にある地方組織への仕事を斡旋する。魔術師や奏者の大半は連盟ではなく地方組織に所属している。笹塚笙子や長瀬悠も同じである。彼らの所属している組織イザナギは兵庫県南部、神戸から淡路島にかけてを取り締まっている。所属する者達の住む部屋から仕事まで全ての政を行なっている。

夏の淡路島で起きた一件以来、卒業してやってきた新人たちへ仕事が行われた結果、大きな事件とめぐり合う事はなかった。かの少年こと長瀬悠は奏者としての力を限界まで使うことはなくいつものように作曲を行い一人、連盟より課せられている奏者の使命を果たしていた。

奏者の使命は妖魔の浄化だけに留まらない。各地に向かいその場所に溜まった穢れを浄化する。穢れとは生物の死や人間の負の感情が溜まると現れる汚れのような物。その穢れが一箇所に溜まるというずれは妖魔と化す。とくに人間の死亡は強く濁って溜まるのだ。夏の一件がそうであったように。

大きな力を必要とせず戦闘になることもない。ただ一人で現地に赴き音を奏でる。もちろんただの音ではない。彼らの力が湧き出る奏者としての力。色と思いの募りが溢れる。

そんなゆつくりとした時間が流れていた。

いつものようにギターを抱え作曲に勤しむ悠の所へやってきたのはスーツに身を包んだ橘さやかだった。彼女は玄関で呼び鈴を鳴らすこと五回。いつものように笙子がやってきたのではないと知ったのはそのときだった。悠の身体には足がない。膝から下が消滅している。立ち上がるには夏に起きた明石海峡大橋での戦いで貰った義足をはめるしかない。こういう時、傍にいる時雨が玄関まで向かえばいいが生憎、今は眠りに着いていた。起きる気配のない時雨に溜め息をついて義足を装着して出迎えた。

一方、橘さやかは冷静であつた。五回のベル鳴らしで痺れを切らすかと思いきや部屋の住民が出てくるのを平気な顔で待っていた。関西魔術連盟の特派員である彼女は他と違う役目を担っている。彼女の家は代々連盟本部の協力を行なってきた名家である。小さな頃から魔術師たちと過ごし超常を学びこれまで何百という彼等の試験官を務めてきた。

橘さやかが行ってくる理由は一つである。特派員の中でもっとも特殊な任務を行なう試験官が彼女。

「誰？」

初めて会う彼女を出迎えた悠は聞いた。少し冷たい言い方だった。感情を表に出していない言葉だった。だがさやかは何一つ表情を変えずに礼をして自分の素性を紹介する。

「私は連盟本部より参りました、橘さやか。長瀬悠くんね、あなたに試験に関する事柄を伝えに来ました」

このことを伝えればどんな魔術師も能力者も皆同じ表情をしたものだ。どれだけ冷静を装っていてもそれは変わらないはずだった。しかし長瀬悠はそうではなかった。少年は「入って」と静かに言っ

て彼女を招き入れるだけだった。

先に表情を変えたのはさやかのほうだった。レポートで彼に関する情報は全て知っている。膝から下、色の違いで見える義足に心は負けた。

長瀬悠の両足は春先の一件で消滅している。どれだけ苦しんだだろう。義足に慣れるまでの時間はどれだけかかっただろうか。十五の少年にとってあまりにも酷い仕打ちだったと心が負けて表情が歪んだ。その顔は誰も見ることはなかった。

「時雨さん寝てるのね」

「今日はずっと寝てるよ」

足を奪った人物はタオルケットとベッドに身体を預けている。悠は時雨を伴って二人して行動していることが多い。時雨は悠にべったりだった。

自分の時間というものが存在しないかのようにいつも悠の傍にいた。彼女は関西魔術連盟の定期検診日以外はずっと悠と一緒に行動している。眠る時もご飯のときも。仕事に赴く彼の隣りで当然のように立っていた。今眠っている彼女はまるで銀色の髪を纏った狼のように。獣じみた野性的な艶をしている。彼女も時折、ふといなくなることがある。風のように現れてまた消える。いなくなったかと思えばまた現れる。そんな彼女に悠は何一つ言わなかった。二人の関係はそうであった。

「机とか座布団……だっけ、そういうのないんですけどいいですか？」

まだ日本へやってきて一年程度、言葉こそ話せるものの悠は所々に解らない部分があった。「構わないわ」と言って二人ともフロアリングの床に腰をおろす。すると早速とばかりに彼女はバッグの中から白い封筒に包まれた手紙を取り出して渡す。封を切り中身を取り出すと目を通す間もなくさやかが口を開いた。

「試験に関して聞く事はある？」

手紙には連盟の本部より認定試験のお知らせとあり日時、場所が記載されている。

「笙子さんは知ってるんですか」

「ええ、笙子には私のほうから連絡済よ。とても喜んでたわ」

突然の訪問で現れる来客たち。その中でもっとも頻度の高い保護者である笹塚笙子はこの一ヶ月とんと姿を見せていない。「また新

人研修の仕事？」「そうよ、嫌になっちゃうわ」と愚痴を溢していたのを憶えていた。

笙子のほうはというと悠とは違い雑な仕事をこなす日々が続いていた。奏者は定期的に仕事を行なうが魔術師はそうはいかない。彼らの本分は人助けや世の中への奉仕ではない。魔術は個人が願望や欲望をかなえる手段の一つでしかない。この卒業生が溢れてからの二ヶ月、彼らの先輩として同行することで仕事を得ていた。だから試験当日も来れないだろう。

「十月十日、京都の本部にて試験決行か」

紙に書かれた試験の日程。その下には試験官の名前が書かれていた。橘さやか、今日の前にいる彼女である。

「試験の内容は載ってないの？」と聴くと「土地神の鎮め儀式」と言った。

奏者の使命は妖魔の浄化だけに留まらない。各地に向かいその場所に溜まった穢れを浄化する。穢れとは生物の死や人間の負の感情が溜まると現れる汚れのような物。その穢れが一箇所に溜まるというずれは妖魔と化す。とくに人間の死亡は強く濁って溜まるのだ。夏の一件がそうであったように。

彼女の言った鎮めというのは言わば奉仕に当たる。

京都に限らず日本は上から下まで山がずっと続く。動物達が住み命を育む大地と水の合わさる場所。長い時間の経過によって神が宿る事がある。古くまだ人類の文明が発達する以前より彼らは存在していた。ある時は獣の姿として現れ、またある時は同じ人間の姿をして存在した。

関西魔術連盟の大役目は彼ら神の魂を護る事である。日本には実に大小様々な一万八千にも数えられる山が存在している。神も大小様々で獣の化身としても現れた。それは妖魔や妖怪といった化物の類とは一線を隔した存在でもある。力の差は歴然であり人知を遥かに凌ぐ。

神の出現は稀であり現代において新たな髪の出現は見られない。

山の中を流れる河を始めとする一点において生物の魂が集中的に集まる事がある。集合した魂は長年培われた土地から離れることがない。純粋な魂が数千、数万、数億と集まってひとつになる。

それはとても大切なこと。

それはとても純粋なこと。

ひとつの魂となったものは土地を守護するものとして宿る。その魂は形を作り土地神と呼ばれるようになる。土地神は自分の土地にやって来る侵略者を外敵として排除する。昔であれば狩猟にやってきた人間を襲うこともあった。もちろん土地の生態系を守るために人間を襲うことは目的ではない。彼らは自分達から姿を見せるような真似はしなかった。姿を見せることなく自然を操り圧倒したのだ。だが時代の流れと科学の進歩に土地神の力は及ぶことはなかった。どれだけ力の在る者だとしてもそれ以上に人間の願望や驚異的な力の前に彼らの力は意味を成さない。山は削られ岩肌が現れる。そこにコンクリートの道を敷き人は車を走らせた。また趣味で登山を楽しむため昔より山に入る人間が増えた。生態系は崩れ生き物の住処は奪われる。

そんな状況下に置かれて何もしないはずはなかった。

工事の邪魔や、訪れる人を殺すといった呪いのような現象が起こしたのだ。彼らは自分の土地を守るためになんでもやった。それが己に与えられた使命なのだと確信して。

人間も土地神の気を落ち着かせるためにと様々な方法を連盟は試してきた。人身御供、お祓いと様々な儀式を用いた。結果、古き連盟に属した者達によつて土地神との交流ははじまった。土地神の心を静め山の生命を守るため奏者をはじめとする能力者は全力を尽くしたのだ。

今では奏者が定期的に音を届ける事によつて被害はなくなった。また彼らの住処も守られてきた。奏者の力は彼ら神々の穢れを払うことができるのだ。

「京都本部ってことは」

「ええ、きみの鎮める相手は荒神様。京都本部が最高位として位置付ける土地神よ」

まだ目にした事はなかった。さやかの言う荒神様という土地神。鎮めの儀式は戦闘になることはない。だが一度、音が奏でられると体内に存在する穢れによって暴走する事がある。身体の苦しみにとっしようにもなく暴れるのだ。穢れの浄化には痛みがつき物である。つまり最高位の土地神を目の前にして戦闘一歩手前にあるわけだ。

「どう？　できる」

「やるさ」

恐れなどなかった。悠はあいも変わらず告げた。冷やかな反応を繰り返す少年をさやかは頭に叩き入れたレポートと照らし合わせていた。すでに試験は始まっているのだ。試験の場所と日時を伝えるなら携帯電話で事は足りる。しかし彼女は態々、京都からやってきた。これは面接でもある。

どれだけ強大な力を持っても連盟より認定を受けていない魔術師は正式な一員とは呼べない。所詮、地方組織に所属する一魔術師でしかないのだ。認定がなければ個人で事務所を開く事が出来ない。自由に行動する事も出来ないと非常に困った状況となる。仕事も自由にえり好みできず結局は組織に厄介になるしかない。今の笙子がその例である。満足いく仕事はなく新人教育のために時間を取られる日々。仕事上、好敵手となる彼等の育成に手を貸す羽目になる。

現在、笹塚笙子は夏の一件で株を上げている。事件に関与してから被害者は一人で済み連盟にとって一人の奏者を導いた。結果、悠のもとへ使者がやってきた。

魔術師が独立、事務所の設立をするには以下の条件を必要とする。連盟にとってなくてはならない人物だと証明すること。これは魔術師自身が認定を受ければ済む。笙子に到っては日本へやってきた時、すでに認定されていた。それは早急に跡取りの欲しかった泰然長治の仕業である。彼は苗字こそ違えど彼女の実父である。

二つ目は個人ではなく魔術師以外の仲間がいること。そしてその仲間のうち認定を受けた人物が二名以上であることとされる。この夏、義足を届けた織戸慧だけが彼女の仲間で唯一の人物であった。長瀬悠は未だ連盟から認定されていない。奏者に求められる能力に彼は達していなかった。春先に起きた事件で足を無くしたため認定は不可能とまで言われていたくらいである。だが夏の一件でその考えは改められた。特派員、四条彩のレポートが物語っている。

三つ目、最後は二年以上の活動期間があることとされる。だが過去に二年以内に事務所設立を行なった人物は山ほどいる。この三つの条件は現代において殆ど関係はなくなっている。魔術師たちの間ではこの二年間というのの一つの目安であり事務所設立が可能かどうかの期間とも噂されているほどでもし二年以内にできなければ望みが薄いと言われるようになっていた。

「……女の匂いがする」

傍で時雨が呟いた。ゆっくりと瞼を開いて辺りを見る。さやかと悠は彼女のほうを向いて動向をうかがう。時雨は身体を起こすと悠へと倒れこむように寄り添った。まるでさやかへ自分達を見せ付けるようでもあったが時雨が意図するようなことはなんとも思わなかった。

「何の話してたの？」

「認定試験のことだよ」

「それって嬉しいの？」

寝ぼけているのか囁くような問いかけ。さやかの見抜けない悠の心を彼女はわかっていた。悠の言葉や表情ではなく心臓の鼓動で彼の気持ちが昂ぶっていると知った。表情にこそ変わりはないものの悠は少なからず喜びにあったのだ。

笹塚笙子が日本へ帰ってきてもうじき二年が経つ。悠のもとへやってきた試験の手紙は一つのチャンスでもあった。また悠にとってもこの試験はチャンスでもあった。日本へやってきてからというもの生活の全てに笙子の補佐がなければ成り立たなかった。言葉は話

せるが十五の少年が一人暮らしをするには少し面倒が多い。笙子がたまにやってきて与える食事がなければこの歳にして健康に害が出ていただろう。

何より恩を返したいと願ってここにいる。イギリスで一人きりになるところを彼女は日本へ招待してくれたのだから。

まだ認定のない悠が奏者として活動し時雨が自由に活動できることも笙子の存在あつてのこと。彼女の実父である泰然長治がいるからであつた。彼こそがイザナギの当主である。泰然長治は特例として彼らの行動に制限を設けなかったのだ。

山の風景が赤く染まるこの時期に連盟は長瀬悠の試験を執り行う事を決めた。笹塚笙子による試験の陳情とイザナギからの報告で急かれてもいた。遅いくらいだったのだ。

試験を受けるには一定の基準をクリアしなくてはならない。悠は能力は日本へ来た頃にはクリアしていたが実戦経験が少くなくこれまで試験を受ける事が出来なかった。加えて足の欠損でストンプがかつていた。だが淡路島での事件報告を受けた連盟は試験に踏み切った。

悠に与えられた課題は土地神の清めであつた。

「よかった……悠がそうなら私も嬉しいわ」

特に答えなかった。二人の関係は見てとれる。今は問題ない。このことも後に提出するレポートに記載する必要があつた。イザナギの泰然長治による特例で認められているが彼女は人外である。この部屋に人間は二人だけ。彼女は継接ぎで作られた物にすぎない。前回の定期検診でもまた健康状態はよかった。精神状態も安定。また連盟から与えた任務も抜群の能力でこなしている。問題はない。

「十月十日、また来ます。京都へは私が送りますので当日は用意して待っていてください」

「わかった」

橘さやかは立ち上がる。玄関まで歩くなか悠は追いかけてなかった。時雨がべったりとひつついて身動きが取れなかったのだ。最後に一

礼して部屋を出ると空を仰いだ。

久しぶりに面白い少年に会ったと彼女は思う。冷静な顔を崩さないが内に秘めた想いは伝わった。そればかりか時雨という人外に對しての接し方。やや行きすぎではあるが二人の關係が強いのだろう。十月十日の試験が待ち遠しくなっていた。

第二章三話

広がる大地を駆け抜ける。早朝六時にも関わらず橘さやかは長瀬悠の部屋にやってきた。すでに出発の準備は完了していた。準備といても相変わらず持ち物はギターと手荷物くらいなものでその質素さにさやかは驚いたくらいだった。

「試験はすぐ終わると思いますが二日はかかりますよ」その事を告げてもしのなら「替えの服は適当に捜して買っよ」と興味なく言った。レポートにあった通りだった。長瀬悠は自分の身の回りの物に無頓着であった。

そればかりか「私も行っていい?」という時雨の発言から試験の最中は静かにしている事と言うと悠に抱きつき車に飛び乗った。かくして三名を乗せた車は朝陽の昇る中を走李出した。

高速道路から山道に入ると稲畑が一面に広がった。朝早くから仕事に来ていた農家とすれ違うたびにさやかは挨拶をされる。誰もがさやかを笑顔で迎えていた。目的の山へ着いた頃にはすでに太陽は頭上高くにあり大地を暖かく照らしていた。

「この先、道は険しくなります。もうすぐですよ」

車はすでに道に散らばった砂利でがりがりと言を立てていた。岩肌を削り取るように坂道を登っていく。目指している場所は到底、人の進むような場所ではなかった。見える景色は美しい緑の山だったが走っている場所は土煙りを立てる険しい峠である。目的の山には作られた道路がいくつも流れている。その全てから離れてさやかの運転する車は茂みの中へと侵入した。周囲からは全く見えなくなり十分。無造作に切り取られ開かれた一角へと出た。

「着いたわ」

車が一台駐車できる程度の場所だった。ハンドルを切って方向を変えるので精一杯の広さしかない。悠はギターケースを持って外へ出る。同じく時雨も外へ出たが彼女の腕は自然であり何一つ持った

いなかった。まだ季節的にも早いロングコートを着ているくらいだった。程なくして悠の目はある方向へと吸い寄せられる。

「あの奥？」

その視線の先には洞穴があった。茂みの続きで入り口は半分以上見えなかったがその中から溢れ出る冷たい風の流が伝わってくる。

「そうよ。ここは山の内側へ通じる水脈の入り口なの。荒神様もその水脈の中で暮らしてるわ」

「もし人が入ってきたらどうするの？」

登って来た道の入り口は立ち入り禁止の看板があった。「熊が出現する」「野犬がいる」などの看板を立てていた。だがそれが全ての人に伝わるかどうかは解らない。遊び半分でやって来る者もいるだろう。特に道にはタイヤ跡が残っているのだ。

「荒神様は誰にでも見えるわけじゃないわ。見せる相手は選ぶのよ」
「僕の目には？」

「見えるでしょ、君にはなんだって」

悠は答えなかった。

「さ、時間よ。悠君、試験を開始します」

さやかは腕の時計を見て言った。すでに時間は9時30分となっている。悠は時雨に「行ってくるよ」と言ってみている洞穴へと一人進んでいった。追いかけようとした時雨をさやかは止めた。

「試験は奏者と土地神の一对一で行なわれます。なにか危機的状况にでも陥らない限りは手出し無用です」

無言で振り向く時雨の顔は冷たく見えた。その内側に秘める人間以外のモノらしく生命の暖かさなどないように感じる。

「……わかったわ」

数秒間の睨みあいの後、そう呟いてさやかから放れた。悠のいた頃は感じなかった彼女の狂気にも似た感情が周囲の空気を替えるようだった。時雨に関するレポートも彼女の目には入っている。目覚めたのは半年前、その時現場に居合わせた長瀬悠の両足を彼女は破壊した。

時雨が橘さやかを消し去る事は造作もない事。気に入らないと判断すればすぐに命を絶つだろう。時雨にとってみればさやかは所詮人間でしかない。極度の緊張は自ら遠ざかる。一人、茂みのなかへと入っていく。

「遠くには行かないでくださいね」

無言で進んでいく。

「きつとあの子には私のことなんてみえていないのね」

肩の力を抜いて車へと戻る。ハンドル越しに時雨の身体は見えている。彼女が長瀬悠の非になるようなことはしないはず。警戒しながらパソコンの電源をつける。同時に洞穴の中からギターの音が微かに聴こえた。心と山が震え試験が始まったことを告げた。

橘さやかのレポートもはじまっている。時雨とパソコンのモニターを行き来する視線。文字と緑と銀色の髪が彼女の全てになった。

認定を受けていない奏者による儀式はこれまで最短で二時間、最長四時間かかったこともある。長瀬悠の能力なら最短時間を更新する可能性さえあった。かの少年の能力は本部でも有名で他の奏者も気になる存在になっている。奏者の力の源は生態エネルギーともされる。音を奏する間、ひたすらに力を消耗するため長い時間は演奏できない。ただギターを弾くのは訳が違う。同じ演奏一時間でも力の消耗は三倍以上。最長四時間行なった人物は休憩をはさみながらの演奏だった。さやかからしてみれば少年の身体が持つかどうかが一番の悩みであった。試験の合格を望む者は全員であり誰一人、落ちる事を期待してなどいないのだ。

認定は通過儀礼であり自分達の仲間として認められるかどうかの審判である。ここにはいない笹塚笙子も悠の合格を祈っている頃だった。彼女こそ、一番に願っている人物であるだろう。レポートの作成を急ぐさやかは笙子の事を思う。長瀬悠の保護者となった彼女とはもう長い付き合いになる。彼女の合格はさやかにとって初めての試験だったのだ。あの頃の事は良く憶えている。笹塚笙子の試験合格は自分のことのように思い出せる。

「久しぶりに面白い仕事ね」

いつの間にか一人呟いていた。保護者となったときも驚いたが今ではもう一人、時雨という厄介な者まで連れている。彼女の生き方は自分に真似できないほど興味深かった。視線を時雨に向けてそう思う。

彼女の行動に波があると本部でもよく噂になる。そして彼女を実の姉のように慕う織戸慧の試験の時もそうだった。個別に見ればプロフェッショナルな人物たちが集う。独立し一人でいることを望むような者達が彼女の下に集まっていく。自分の受け持った全ての魔術師よりも彼女はあらゆる面で秀でていた。

洞窟の中から聴こえる音色はただ優しく激しさは皆無だった。

今までの儀式では最初に大きな戦闘が行なわれる場合が多かった。最初、山が震えたのはそれと同じ事。土地神が力を爆発させて身体に溜まった穢れを排出するための儀式のような物だ。異常ではなくそれこそが本来の在り方でもある。奏者達はその暴走を自ら食い止めるのだ。

「そろそろ二時間ね」

パソコンの表示している時間で計っていた。一度大きく息を吸うと目に飛び込んできたのは時雨だった。今までぼうつと立ち尽くしていた時雨が駆けてくる。車内からその姿が見えてどうしたのかと彼女は外へ出た。

「なにしてるの！ まだ終わってないわよ」

試験の最中は何人たりとも進入禁止である。中にいる悠になにか起きたようにも思えない。静かだがギターの音は聴こえる。にも関わらず時雨は着ているコートと長い銀色の髪を揺らして洞穴へと入りそうになる。

「聴こえないの、今入ったら失格よ！」

がっしりと腕を掴む。足を止めてさやかを見る時雨。冷たく刺さるような氷の棘のようだった。さっきの彼女とは違っていた。身体の内芯から冷める。さやかは掴んだ手を放す。

「何が起きたの？ 解るなら教えて」

「悠の音色が変わったわ。解らないの？」

表情は変えなかった。さやかには音色の変化などわからなかった。時雨はつぎはぎでできた女。目覚める前からすでに人間ではない存在。その美しさもまた人外である。

音は突如として消える。二人の間に静寂が流れる。まさか、と時間を見るとまだ二時間経っていない。だが最短記録達成とは思えなかった。そこに足場が崩れるかというほどの地震が起きる。奏者の演奏中、このような事態に陥ったことはなかった。今は演奏していないがさやかがこれまで見てきた試験とは違った。もし何か起きた場合、試験官は立ち入りを許可できる。

時雨の顔はただ一緒にいたいという思いだけではない。瞳を見れば解る。

「私も行くわ」

「勝手にすればいい」

時雨が駆け出す。向う先はただ一つ。悠が歩いていった洞穴の奥だ。さやかは知っていた。洞穴の中がどうなっているのか。足元には水が流れ出す。この山には水脈がとおっている。気温は急激に下がり真冬のように身体を冷ましていく。まるで時雨の肌のように冷たくある。そんな冷たい洞穴が何所まで続くかも彼女は知っている。時雨はほとんど先へと進んでいく。もはや追いつけぬさやかは一人必死で駆けた。

第二章四話

洞穴を進んだ先にあつたのは水の流れる音と雫の垂れる静かな空洞。長瀬悠の瞳に写つたのは透き通るような青に染まつた岩山だった。天高くまで続いた長い煙突のような穴がついており壁の青とは違った空の青さが差し込んでいる。太陽の光がそこから入り込み水晶のような壁に命を吹き込むように輝かせていた。

「荒神様が……」

空洞には大きな5メートル四方に渡って作られている藁のベッドがある。悠の身長よりも高い位置に作られていたベッドには一匹の獣が寝そべっていた。全身が黒の毛に覆われ頭角に生えた二本の角は人一人分の大きさはあつた。また前足は野太い樹木のように太かつた。

「ほう、ぼうずが悠か？」

「そうだ」

巨大な獣は寝そべつたまま赤い瞳を悠へと向けた。人の言葉を話す。見上げるとそれ以上に上へ視線を向ける。獣の姿をした神はその身体を持ち上げたのだ。体重は何百ではなくトンではないかというほどに見えた。前足に較べると後ろ足は短く小さかつた。尻すばみする体形であり尻尾は長かつた。

「ならば、速く弾いてみせろ」

尻をずどんとベッドに落とす。背を壁に預けるようにして悠のほうへ瞳を動かす。悠も言われたとおりにギターを取り出してさっそうへ弾き始める。試験がどのようなに行なわれるか、特に聴いてはいなかつた。そういうものだと思っていたし聴く事もないと彼自身心で感じとっていた。

荒神様と呼ばれる巨体は空洞の中で発生したメロディーに身体を震わせた。歌うように叫んだ咆哮が山をも震わす。大気は震え大地は共鳴する。木に止まっていた鳥達は大小問わずに一斉に飛びたつ

た。鹿や猪も同じだ。山に住む全ての命が咆哮によって目を醒まして騒々しく身体を振るわせた。

その最初の咆哮から荒神様は動く事はなかった。一切暴れずにただ悠の奏でた音楽に身を任せただ。身体の中で浄化された穢れは水流に乗って流れていく。緑と青の粒子が解き放たれていく。

悠の力はこれまでの奏者よりも強く鳴響いていた。その音楽のなかで荒神様は天を見上げてときたま吼えるだけになった。吼えるといっても最初の咆哮とは違い山は震えなかった。ただ身体から消えていく穢れにこそばゆいだけだった。

奏者の力は長く続かない。連続で弾くなら三十分……いや一時間が限界だった。それは彼らの体力と精神力によっても左右される。だが長瀬悠は一時半という長い時を経てもその指を止めなかった。それどころか曲はテンポを上げていつのまにか彼の好きな六供町へと変わっていた。弦の唸りにあわせて壁が反響する。たった五つの細い弦から放たれた光のような音は心を鎮めていった。

すでに荒神様の身体に溜まった穢れは残っていなかった。そこそこの山に微塵のような穢れさえ全て消えている。悠の力は強大であり獣の神も認めていた。だからこそ彼の弾くギターの音色に身体ごと心も預けていた。

奏者と土地神の間に亀裂が生じたのはその曲のフィナーレ。橘さやかとともに走ってきた無謀に切り開いた道よりもっと前、そこには高速道路がある。他にも一般道路が流れている。山は外と内とでは見えるものが違う。道路の傍では拡張工事が行なわれている。

ラスト直前、フィナーレの最中で荒神様は身体を動かした。

「どうしたんだよ」

悠も演奏を中断して見上げる。

「さやかめ……話が違うぞ」

これまでとは違う振動が壁を伝ってくる。その振動が義足にまで到達する。急な振動で弦から指が離れる。目の前にいた巨大な獣は穏やかだった表情を一変させ辺りを見る。蒼く光る壁ではない。そ

の先、太陽の下にある緑の大地に向けられている。荒神様にとってこの山は全て目が届く範囲だった。

洞窟の中には空から一本の光が落ちている。頂上付近にある穴を荒神様は見る。さっきまでの穏やかな時の流れは一瞬で消し飛んだ。獣はその巨大な体躯を奮わせる。身に溜まった穢れはない。自らの限りにけたたましく吼えた。

「まって！」

悠が叫んだ。神の行動を肌で感じ取っている。怒りだった。何者かに向けられた怒りに声は洞窟に響いた。

「小僧！ 約束が違うぞ！」

「約束ってなんだよ」

全身を覆う黒い毛を逆立てる。このままではここから飛び立って行くことは間違いなかった。悠は再び演奏を始める。疲労していないはずはない。今も肩で息をするのがやつとだった。それでもあと僅かだった演奏を再び途中から始めるしかなかった。弦の唸りで光が出現する。

「それがお前の本気か？」

光を縄に見立てて荒神様を縛る。大木さえなぎ倒してしまいそうな腕も足も一気に抑える。突然にしてむくむくと大きくなっていく。「暴れないっていうなら解く。僕に理解できるように言ってくれ」

「それは無理だな」

人の身体ほどある筋肉は今にも光を引きちぎりそうになっている。解ければ力の向う先は悠しかなかった。少年の身体は対応できずに軽がると吹き飛ぶだろう。あの瀬戸内海で見せた黒の義足を履いていても変わらない。義足共々、粉々に粉碎される。

無理か、と思うも力の限り弾き続けた。だがやはり神の力は偉大である。悠の力は太刀打ちできない。そして音と一緒に光りは途切れた。

非情な暴力が少年を襲う。こぶしは身体と同じ大きさをしている。指先が触れるだけで骨は砕けるとおもうほどの強烈な一撃。目を逸

らずに立っていた。

第二章五話

「氷の華よ、護れ」

途端に女の声。マントのようにコートを翻し銀髪の女は両者の間に割って入った。右手を翳していた。掌の数ミリ手先で分厚い氷の華が咲いた。丸い棘のような氷が幾つも重なって咲かした華はこぶしから防いだ。

「……貴様」

白い息を吐いていた。

「時雨？ どうしたのさ。呼んでないよ」

「音を聴けば解るよ、だから来た。私が来なかったら潰れていたわ」
彼女にとって悠の存在は何物にも替えがたい。さやかを振り切り一人駆け出したのは間違いではなかった。間一髪、長瀬悠はこぶしから繰り出された風だけを受け怪我をしなかった。

「荒神様、これは？」

遅れてやってきたさやかが三者の状況に目を開く。彼女の経験でこのような出来事は滅多にない。とくに試験ではあり得ない状況だった。

「さやか、我との約束を忘れたか？」

「何を言って」

「何をだと……なら外で暴れている者どもはなんだ」

すぐにさやかが携帯電話を取り出した。このような場所でも連盟の通信機器は感度量衡で仕事をこなす。どこへ掛けているのか突如彼女は電話の相手に怒鳴った。動く事が出来なかった時雨と悠はそんな彼女を見ているだけだった。

「そうよ、解つたらすぐに止めさせて！ いいわね！」

携帯電話をしまうと彼女は荒神様の傍までやってきて頭を下げた。
「外の工事はすぐに止めさせるわ。こちらのミスよ、ごめんなさい」
荒神様だけではなかった。悠に対しても彼女は頭を下げた。

「どういうこと？」

「試験の際中は工事なんかは全部止める事が条件なの。命の流れをかえない為にね。荒神様が怒ったのは私たちの言う事を聴かずに工事をし始めた人たちがいたのよ。すぐ職員が向うわ」

「なら……よしとしよう。だが二度めはない。こういう事態になるのは好かんことは知っているな、さやか」

獣の神は姿に似合わず寛容だった。さやかが頷くとこぶしを大地に預ける。再びベッドへと進んで腰をおろす。怒りは収まっているのか息は荒かったがさっきまでの豪腕は細く凝縮していた。その光景に時雨も掌から咲かせた氷の華を砕いて消し去る。華は彼女が必要とした分だけ咲いたのだった。

「それとお前」

時雨を指さす。先ほどの氷はすでに消えていた。確かに全てを粉碎する一撃だった。その攻撃を防いだ時雨は何食わぬ顔で立っている。

「人ではないな？」

「お前に関係ない」

彼女にとって相手が誰かなど関係なかった。

「貴様のような者がなぜいる。さやか今日はなんだ？」

「彼女は……」

「僕のボディガードだ」

悠が言った。全員の目が彼へと向った。

「ぼつずの音は最高だった。しかしな……」

「試験に問題でもあるの？」

「いや、ない。我は貴様らの試験など興味はない。そっちの人外よ、貴様からは複数の人間の匂いがするぞ」

「それは私の身体がつぎはぎだからよ。まっとうな人間の身体じゃないさ。皮膚だって、骨だって最初はばらばら、私は誰の子供なのかどうやって生まれたのかも知らない。でもね、これだけは断言できる私は悠のモノよ」

悠にそつと抱きつく。悠も動じずに好きにさせている。荒神様の赤い瞳は時雨ではなく悠を見ていた。それも外見ではなく内側に秘めた力を。

「ふん。つぎはぎか人間はつくづく実験が好きだからな。ぼうず、お前はどう思っているんだ」

「どうもこうもないさ。時雨は僕のボディガードだ」

やはり神の瞳は少年を見ている。時雨の姿は写っていないかった。悠の内側に蒼い光を見ていた。だからこそ、その隣りで寄り添う女から目を逸らそうとした。

「ぼうず、こつちへこい」

呼ばれて悠が近づく。とてつもなく大きな手が動く。さつき少年を粉碎しかけた手だった。指一本でも少年より太く見える。その大きな掌を悠の頭に置いた。不安はなく畏れも抱かなかった。ただ、やんわりとした浮遊感に包まれる。

「少し力を引き出してやろう。お前には役に立つだろう」

土地神はそう言って悠の頭に置いた掌を退けた。それを見ていた二人には何が起きたのかわからなかった。当の本人も何がどうなったか解らないままだった。力といっても筋肉が付いたわけではない。外見上何も変化は見られなかった。

「さやか、儀式……お前達が言うところの試験は終了だ。我の身体もすつきりした」

頭を下げるさやか。解放された悠に時雨がべったりとくっつく。するとさやかの携帯電話が鳴った。外で起きた突然の工事ことを伝える連絡だった。彼女は現場監督らしき人物に変わってもらうと叱責して電源を切った。

「今回のような事は二度とさせません。悠君にも、申しわけなかったわ」

改めて頭を下げる。荒神様は再び寝そべり三人がいる事に気も向けず寝息を立てはじめた。まるで姿そのものの獣のようだった。

「悠君、時雨さん出ましよう」

「いいの？」

「言ったでしょ。荒神様は終わったって」

これまで幾多の試験をこなしてきた彼女は今回のことには妙なことが多すぎると考えていた。車まで戻ろうと洞穴を歩き始めたが後ろを着いてくる二人を見ることはない。試験の間は山で工事など一切行なわない。それは初歩的な事務で決してミスなどするはずはない。過去数十年に対して試験の際に起きた事件は三件にも満たない。加えて試験官一人が山で同行しているわけでもない。彼らの見えない場所に数人配置された魔術師もいる。彼らに不備はなかったはず。何より橘さやか自身がそんなミスを犯したのは初めてだった。

荒神様こと土地神は怒ったが暴走するまでに到らなかった。身にあつた穢れが浄化されていたとしても沸点の低い荒神様であれば少年との戦闘は避けられなかっただろう。なぜか時雨の介入でそれはなかった。

陽の光が彼女の視界と思考を遮った。太陽は頂点へと昇っていた。見上げると眩しい青の景色が広がっている。深呼吸して息を整える。後方から追いついた二人が入り口を塞がるように立っているさやかに足を止めた。

「なにしてるんですか？」

突然、パンと両手で頬を叩く。赤くなる頬だったが彼女は気をしつかりと持つため必要だった。こんなことでどうする。これから長瀬悠の報告をしなければならぬ。友人のため、連盟のため……何より長瀬悠という少年のため。

「これで試験終了です。結果は本殿でお話します。悠くん試験お疲れ様」

笑顔で言つて二人を見た。見た目以上に疲れている悠はギターを時雨に預けていた。

さやかの目には二人は常に共にあつた。

第二章六話

空は青く雲の数も少ない。風はゆったりとした流れを作り出して山の香りを運んでくる。4WDの中型車を囲むように三人はいる。トランクケースには車内ぎりぎりの大きなクーラーボックスが入っている。中には人が入れそうなそのケースにはこれまたぎゅちりと本や機材が詰め込まれていた。

「さやかさんはあの神様と知り合いなの？」

荷物の詰め込みをしているさやかに悠が聞いた。それがとても珍しい事だとさやかは気付かなかった。長瀬悠がこれまで自分の側から声をかけることはほとんどなかった。ただ、荒神様との関係が気になったのだろうかという程度だった。

「私の家はね荒神様との交流によって支えられてるの。連盟の試験官は何も私だけじゃない、父さんもお爺さんもそのまた上も……ずっと試験官を務めてきたわ」

「長いんだね」

「神といっても宗教や見えない想像上の神じゃないわ。ちゃんと姿も見える。子供の頃、初めて会ったのはまだ五歳くらいだったわ。びっくりして泣いてたって父さんにまだ笑われてる」

仕方ないことだ。荒神様は大きな獣の姿をしている。話しが本当なら五歳の少女が耐えられるものではない。泣き出しても不思議ではない。悠はそのことに何も言わなかった。

「でもびっくりよ。彼が人の事を誉めるのは初めてだったもの。合格のお墨付きといったところね」

「試験なんだけど、さやかさんは洞窟の外にいたよね。どうやって判断するの？」

「判断を下すのは私じゃないわ。本殿で待っている人たちがいるの。彼らが判断するわ。私は報告するだけ」

「そっか」

最後の荷物を積んで三人は車へと乗り込む。助手席に座らずに後部座席へ乗る悠と時雨。助手席には多くの機材を乗せていた。それを避けたにすぎなかった。

「でもよかったわ。あの時、時雨さんが入らなかったらどうなっていたか」

走り出した車で彼女は言った。狭い道をがりがり言わせて下っていく。密着する時雨の身体も悠へぎゅっとぶつかっている。

「悠に手は出させないさ」

「だからってこっちも手を出しちゃ駄目だ」

悠は瞼を閉じていた。力を使い切っていた。いつもとは逆に時雨に向って体重をかけていた。悠の言葉はまるで寝言のように聞こえた。

「私の悠は特別な。あの程度の神なら清めるだけじゃなくて完全に浄化だってできるわ」

時雨の髪が少年の頬をくすぐる。自慢するような言葉だったが悠は否定する事はなかった。ただ面倒だったから声を出さなかった。

「浄化だなんて物騒なことは言わないで。それに土地神を浄化できたとしたら間違いなくリストに載るわ。日本にいらなくなる」

「時雨、冗談はよして」

悠に言われると頷いた。さやかの目には長瀬悠という少年によって飼われているように見えた。時雨は連盟から特別に認められているにすぎない。すでにリストに載っている手配中の魔術師が残した遺産でもある。その攻撃的な正確は橘鞘かも知っている。レポートに記載されている。

「私は悠を護っただけよ」

「わかってるわ。あなたの判断は間違ってない」

あの時、時雨が音の変化に気付かなかったら一人の奏者を亡くしていた。口に出さなかったが時雨には感謝していた。彼女は長瀬悠を護ったのと同時に土地神の存在までも護ったのだ。彼女も力の限り戦えば荒神様といえ無傷ですまなかっただろう。

土地神の消失は土地の死亡を招く。生態系は崩れ、土は腐る。木々は倒れ生きる生物の魂はその場に残るのだ。すでにそうになってしまった土地は日本だけにとどまらず全世界で起きている。人間の生活にも関わってくる大事な事だ。魔術師たちの力にも影響を及ぼしてくる。だから土地神を守ることは彼等が生きていくために必要な仕事である。

車は立ち入り禁止の看板を前にして一旦とまる。さやかは来た時と同じようにして看板を避ける。向かいに見える道路には車は走っていないかった。山にしては珍しいストレートの道でカーブの辺りにはミラーがあった。これは人目を避けるためである。

車を動かし再び看板で道を塞ぐ。山を流れるように車を滑らして進んでいく。その途中、例の工事現場が見えた。誰一人いなかった。彼女の命令を実行した連盟の職員によって工事は行なわれないだろう。だがさやかは何たることかと息を飲んだ。

第二章七話

「笙子は元気？」

過ぎた事は仕方がない。口を開いたのは友人の事だった。いつまでも気にしても仕方がない。別の事に意識を向けて気分を変えようとした。

「元気だよ、会ってないけどね。僕が試験を受けるっていったらおめでとうつてさ」

「おめでとう……彼女にはわかっていたのね」

合否結果が出ているはずもない。笹塚笙子は悠が試験に合格する事を願っていたのではなく確実と信じていた。彼女らしいとさやか
は笑う。

「連絡とつてないんですか？」

「仕事は仕事。私用で魔術師に連絡することはないわ」

友人といっても彼女たちは一線を引いている。用もないのに軽々しく電話は出来ない。また連盟の職員が特定の人物と接点を持つことはあまり好ましくない。

「笙子はプライベート用の電話持つてないから連絡する事もないわ。本部に来た時ちよつと話すくらいよ」

認定を受けた魔術師たちは本部より専用の電話を渡される。電話会社は一般企業ではなく連盟が運営している会社が作った物で形も能力も全て一緒である。違うのはGPSがついていることと個人を識別する事。

「会えばいいじゃないか。友達なんでしょう」

時雨の言葉に微かに微笑んで会話をやめた。車は山を降りていた。まるでジェットコースターに似た景色の変化だった。再び稲畑を抜けて京都の街を駆け抜ける。次第に人が増え人類の文明が目に入ります。

「どこかで昼ご飯食べましょう。時間も良い頃よ」

目に付いた和食の看板に向って車を走らせた。悠が人を避ける傾向があつたことも彼女の頭に入っている。適当に選んだように見えても彼女は最初から店を選んでいた。力を使い切った後の奏者に対する労いだった。

「お久しぶりです」

看板をくぐると言った。「待ってたよ、さやかちゃん」と店内から少しふくやかな女性が返した。さやかよりも歳は随分と老けていた。

店内は個室に分かれているようで客の姿は見えない。返事をした女性は割烹着を着ており三人を一番奥の部屋へ案内した。案内する女性はよく悠のほうを見ていた。

「彼女も連盟の？」

「そうよ。ちなみにここも同じよ。さ、お腹いっぱい食べましょう」
部屋に入るなり座ってメニューを開いた。三人はご飯大盛りで特別定食を頼み箸を勧めた。食事は静かだった。時間はおよそ一時間内、半分は悠と時雨の二人だけで過ごしていた。さやかは一人部屋を出ていた。

彼女が戻ってくる頃には悠は時雨の膝の上で眠っていた。時雨は唇に人差し指を立てたが戸の開いた音で起きた。出発するわよと告げて再び車へ乗り込む。あの割烹着の女性に礼を言つて店を後にした。

目的の場所に到着した時、車はまたしても住宅街よりも高い場所にあつた。京都の街より遠ざかり荒神様のいた山から南東に進んだ場所にある小高い山。下から見上げれば大きな神社が見える。神社にはいくつかの階段が続いており車は西側から下ったところに到着した。コンクリートの駐車場が広がっている。四方は山の木々によつて塞がれていた。

坂道を登るとき朝と違ってよかったのは道が整理されていて殆ど揺れなかった事ぐらいだった。

すでに外灯がついていた。広すぎる駐車場だと悠は思った。白線

が一定の間隔で四角を描いている。そこには数台の車があつたが人はいない。どれもさやかが乗っている白い車と変わらなかったから一台の車が目を惹いた。赤いボディカラーの外車だった。その一際異彩を放っていた。

三人は車から降りると陽の落ちていく赤い空が頭の上にあつた。辺りの木も身につけていたのは赤と黄色の葉だった。そして階段は長く高かった。悠はギターケースを時雨に預けていた。とてもケースを担いで階段を登りきることは出来そうになかった。さやかの手荷物は少なくバッグ一つを肩から下げている。

「この階段を登れば本部です。お二人は初めてでしたね」

無言で頷く。三人の今いる場所は関西魔術連盟の総本山であつた。階段の上にある神社こそが連盟本部である。二人並んで歩けるほどの石を何段も重ねて作られた階段を登り始める。相当古いのか表面は削られていて端には苔がついていた。登っていく中で上を見上げるがいつこうに頂上は見えなかった。だが遙か先から一人、降りてくるのが見えていた。それはその人物も同じこと。下る階段の先、視界に映っていた。

黒の髪を結った美人だった。仲間の織戸慧よりも若い人だと悠は思った。そればかりか歳は自分に近いとさえ感じた。「お久しぶりです、笙子さん」と彼女が言い「お久しぶりね。柳さん、仕事？」とさやかが返す。足を止めてお互いを見る。

「ええ、少しばかり力添えが必要で協力の要請に参りました。そちらは奏者の方？」

柳と呼ばれた彼女は時雨の担いでいたケースを見て言った。このような場所にギターケースを持っている人物がやってくるのは奏者意外にいない。

「先程、試験を受けてきた長瀬悠くんよ。笹塚笙子さんの身内よ、柳さんも面識あるでしょ。隣にいるのはボディガードさん」

悠たちがお辞儀する。彼女は「善い結果がでるといいですね」と言つて再び歩を進めて降りていった。悠は彼女の後姿に得体の知れ

ない光を見た。その光に自身も驚き目を擦った。

「どうしたの？」と声をかける時雨だった。さっき見えた光はなくなっていた。見間違いだったのか「なんでもない」と答える。再び階段を登り始めると先頭を進むさやかは口を開いた。

「彼女は本部に所属する一人で桐生柳さん。これから会う方々の一人、桐生泰治様の一人娘です」

「その人って偉い人なの？」

「まあ気負いしないでください。挨拶して聴かれた事に答えればいいんです」

そういうものなのだろう。三人は息を荒げる寸前でようやく階段を登りきる。すると完全と整理された石畳が広がっていた。土も広がっているが全てが統一された平らな地面を作っていた。庭は駐車場と同じくらい広がっている。

その先には巨大な屋敷が立っていた。足場と同じくらいに整理されて白い襖に一切ゴミはなかった。

「ここが関西魔術連盟の本殿となります」

さやかは振り向いて時雨を見た。

「時雨さんには申し訳ないけれどもあなたはここまでの客用の寝室でお待ちください」

彼女は淡々とした言葉で言った。左、悠達から見て右手側へと指を差す。そこには本殿と説明した神社よりも随分小さい建物があった。一つの屋根にいくつも戸が並んでいる。戸と戸の間には窓がついていた。屋根は一つだったがどうやら中には壁がありいくつかの家が繋がっているように見えた。あれが長屋つてやつか……始めてみた形に少しばかり注意を惹き付けられた。そして自分が育った寮を思い返していた。奏者として学んだ学園ではその長屋がすっぽりと入った寮に住んでいたからだ。

「なんで悠と離れないといけないのさ？」

「本殿内はいかなる関係者といえど連盟が認定した者以外は入ってはいけない規則となっています。それに悠君には今から試験の結果

を伝えるの、ちょっとした間よ。辛抱して」

「だってさ、すぐ終わるって言うんだ。言うとおりしょ」

これまで通りだった。悠が一言言つと時雨は従った。

「一時間もかからないわ」

時雨はさやかの言葉を見殺してケースを悠に渡す。そして指示された長屋のほうへと一人向って歩いていった。秋風に揺れる銀色の髪にさやかはほんの少しだけ嫉妬したように綺麗だと呟いた。

二人は神社、本殿の傍を回り込むように移動する。

「神社に入るんじゃないの？」

「こつちよ」

右手側を歩いていくと今度は左へ曲がる。本殿内ではなくその後ろ側に向かっているようだった。それでも本殿から目を逸らせなかった悠はその木でできた神社をじつと見ながら後をついていく。

「ここよ。皆様、お待ちかねのはず」

現れたのは長屋よりも小さな小屋だった。本殿の十分の一もない小さな建物は外から見るとあまりにもぞんざいな作りをしていた。そんな小屋の扉をさやかは開く。がらがらと音を立てる扉に中の男達が見た。悠は中から溢れた香りに身体の疲れが一瞬にして吹き飛んだように思えた。

第二章八話

扉が開かれる。味噌の匂いが小屋には充満していた。満たされたはずの食欲がまた湧き出してくるようだった。

「ただいまお連れしました。長瀬悠くんです」

玄関から中まで全て繋がっている。たった一室の薄暗いなか、囲炉裏を囲んでいる人が二人いた。一人はおじいさんでもう髪も髭も白かった。もう片方はさやかより若く見える青年だった。悠の視線はその若い方へと向けられた。その男は屋内だというのに男の人はなぜかサングラスをしていたのだ。

小屋は窓がなく光が差し込むのは二人が立っている入り口くらいなものだ。天井には煙突のような物がついている。囲炉裏の中心で煙を炊いていた味噌の香りの正体である鍋の煙を吸っていく。だから光はない。サングラスは必要ないはずだった。

「入りなさい。橘さんは外で待っているように」

老人が言った。さやかは一礼して悠を前に出られるように横に立った。足元には段差があった。小さな段だったがそこが玄関であると認識させられる。靴を脱いで足を上げる。黒い義足が見えたとき奥にいる二人の視線がそこへ集中した事は良く解った。黒い足は人間のものではない。

「大丈夫よ」と耳元で囁くとさやかは小屋を出て行った。「こちらへ、そこに座りなさい」と言われギターケースを壁にかけて向った。二人の男は鍋の中を一度かき回した。白いスープのなかでぐつぐつと野菜が煮えている。「もういけますね」「そのようだな」二人は悠が座るまで鍋に夢中だった。

悠はそんな鍋の中身を覗きながら用意された座布団に腰をおろした。「君も食べるか？」と誘われたがここへ来るまでにさやかと一緒に昼食は取ったと返事した。すると「それは残念。とれたての京野菜鍋なのにな」とサングラスの下で口元が笑った。

「さて」

鍋から目を逸らし悠を見た。二人の男が肩に気を入れる。

「まずは試験ご苦労様。これは、お茶だ。飲みなさい」

若い男は悠の左側に座っている。傍に置いていたきゅうすからお茶を注ぎ渡す。片手で握れる程度の小さな湯のみだった。「どうも」と受け取る。

「雪夜くん」

老人の一言に彼も気合が入ったように姿勢を正した。

「まずは自己紹介といこう。俺は関西魔術連盟の青龍の長、龍仙寺雪夜だ。こちらは桐生泰治さん。今は現役とはいかないが武術顧問をしておられるお方だ。これから君の、長瀬悠くんの試験結果を発表する」

龍仙寺という名前は初耳だったが桐生という名前には心当たりがあった。本殿へと続く長い階段を登るなかで会った女性だ。桐生柳といった。

「結果は……文句なしの合格だ」

対面に座っている老人、桐生泰治もうなずく。そして話しは続く。「奏者としての能力、人望、人格に問題ない。少々、危ない面もあり仕事に時間がかかっているなどの報告もあるがさしたる問題にはならない。君がひとりの奏者として成立しているのはよくわかる。なによりあの荒神様から賞賛の声を戴いたらしいね」

僕がうなずく。おそらく昼食を食べている時、放れた拍子にさやかは連絡したのだ。

「つまりお墨付きってことだ」

「だからこそ気をつけねばならんぞ。お前さん、脚が無いんじゃってな、その黒い奴じゃ」

二人の目には悠の義足は見える。黒い塊が二つ。

「元来奏者は五体満足でならねばいかん。全身、全ての感覚を研ぎ澄ませねばならんからな。義足はどうだ？ 特注品だと聴いておるぞ」

「問題ありません。それ以上に凄くやりやすくなった……」と思います」

「問題はない、か。上手くやってくれよ」

につこりと微笑み二人は湯飲みを持った。悠は酷い緊張を期待していたが拍子抜けだった。二人は世間話のように合格を言い渡して終わったのだ。ほかの魔術師たちも同じなのかと考えていた。

「さて、これからの事だがどうするかは決めているかな？」

「僕はこれからも笹塚笙子さんの事務所設立を手伝うつもりです」

雪夜は茶を一口含んで言った。サングラスの端、彼の目の辺りに横一線の痣が見えた。サングラスの下にはなにか隠しているものがある様に思えてならなかった。

「悠くんは関西魔術連盟がどうやって成り立っているか知っているかな？」

正直に首を振った。悠が知っているのは仕事のとくにやってくる特派員と神戸にあるイザナギという組織に属する数人だけだ。関西魔術連盟の仕組みなど知りもしない。

「簡単に説明しておこう。連盟はここ京都を本部として大きく四つの組織に分類される。魔術師達が所属するのは朱雀。君たちのような奏者や対魔の戦闘に関与する人物が所属する青龍。君の使っている義足や道具を製作する白虎。特派員や事務を行なう玄武に別けられる」

「つまりお主は奏者じゃ。青龍に属することになる」

先程の紹介で龍仙寺は自分を青龍の長といった。遠くはなるが悠の上司なる人物である。

「長と言っても直接関係はしないけどね。覚えていてほしいだけだよ」

軽く笑って流した。

「笹塚笙子の事務所といったね、彼女は兵庫県のイザナギに所属している。君も同じでいいのかな？」

「変更とかできるんですか？」と興味本位で聞いてみた。すると「

できるよ」と返事をする龍仙寺。悠は「聞いてみただけです」と言
って笙子を選んだ。すると雪夜は「伝えておく」とだけ言った。

つまり部署の移動は彼が握っている。誰が誰と組みたいかは自分
で決められるが最終的に権力をもっているのは彼なんだと悠は感づ
いた。だが同時に「朱雀や青龍とイザナギって違うんですか？」と
聞いた。

「違うよ。朱雀や青龍っていうのは地方組織じゃ使わない言葉だ。
本部にいる俺達が使う言葉だからね。そうやって呼ぶのは本部の連
中だけ」

「そうなんですか」

「関西には二十以上に及ぶ組織があつてね、その組織を纏めるのが
この本部だ。現代では魔術師たちが多く存在している。彼らの殆ど
は自分のために術を磨く。世の為、人の為と働いている者は少ない
んだ。君のようにね」

「そうでもないです」

「謙遜しなくていいよ。でも、好き勝手やる連中が野放しになると
どうなる？」

「無茶苦茶になりますね」

言葉を選ばず素直に言った。口元が緩んで二人はうなずいた。

「ここだけで魔術師全員を管理するのは不可能だ。それに地域に根
付いた事件も同じ。その地域でしか処理できないだろう。わざわざ
京都から兵庫県の端まで移動するのは愚だよ。地方組織の協力は絶
対だ」

「イザナギはいいところだ」

泰然が言った。龍仙寺も頷く。そしてこれで説明は終わりだと告
げられた。そして雪夜は自分の後ろから何か取り出す。悠の目には
暗く影になっていてさっきのきゆうすも見えなかった。

「連盟が認定した者に配っている携帯電話だ。受け取ってくれるね」
差し出された物は言葉どおりの物でスライド式の携帯電話だった。
同じ物を見たことならある。笹塚笙子が使っている物と一致する。

「日本、関西地方なら県外になる場所は唯一つも無い。魔術師やその他術者、協力してくれている組織全てと繋がっている専用サーバーへのリンクも可能だ。まだ現代風にいろいろと努力しているところまでまだ完璧とはいえないがね」

「さて、これで試験結果もこれで終わりじゃが、一つ忠告はしておくぞ」

悠の視線を携帯電話から逸らさせた。桐生泰然の目は鋭く寒気さえ感じさせた。

「おまえさんの連れて来た客。報告書には時雨と書いてあったが彼女には特に気をつけろよ。現在、行方を調査している魔術師……あの白河夾の関係者であることは確実だ。どのような仕組みを施されているか……わからんでな」

そんなことは百も承知だった。彼女との遭遇時、悠は緑の液体に漬けられていた見た事もないような生物に囲まれていた。あの場所で眠っていた時雨。危険は悠も承知している。でも、と少年は彼女を一人に出来なかった。いつも傍で護ってくれる彼女にまるで家族のように思えたからだ。

「我々はまだ話が残っている。君は外で待つ橘くんに着いていきなさい。それと今日は泊まっていきなさい、ここの風呂は最高だぞ」
断る理由はなかった。急ぐ事もない。悠は二人からはなれてギターを担ぐと小屋を出ようとすする。

「がんばってね」

幻聴かと思った。聴こえた声は少女の物だった。小さかったが少年の耳に入った。えっと思い振り返る。「どうした？」と雪夜が聴いた。小屋の中を見渡すが二人の男以外には誰もいない。そのはずだった。

「なんでもありません」

そう言っただけで扉を開く。少女の声はしなかった。きつと聴き間違いだと言いきかせた。

第二章九話

扉の傍ではさやかが立っていた。彼女がどうでしたと訊くことはなかった。かわりに「おめでとう、悠くん」と手を差し出した。握手を交わして歩き出す。

「知ってたんだ？」

「まあね、うれしいでしょ。喜ばない」

うれしいかと訊かれれば解らないというのが素直なところ。認定をされても悠自身は何一つ変わらなかった。ただ笙子のためにとしたまでだ。

さやかと一緒に向うのは時雨が待っているさっきの長屋だった。

その途中、さっき受け取った携帯電話を取り出す。小さな液晶画面には青色のデフォルト壁紙が表示されその上に時間が数字で表示されている。丁度、風呂に入るのに適した時間だった。

長屋の戸に手を触れたとき誰かの視線を感じて本殿を見た。すると眩いばかりの紅白が悠を見ていた。紅白は巫女装束で皆同じように黒い髪をしていた。歳も若く全員が二十歳そこそこである。彼女らは振り返った悠に手を振っていた。

「あの子達ったら」

頭を抱えるようにしたのはさやか。悠は彼女らが誰か知らないまま長屋へと通された。

「さっきのは？」

「職員たちよ。君のファン」

「ファン？」

「そう。奏者の奏でる音はここに集められる。あの子達のBGMみたいだね。悠君の音はその中でも人気なのよ」

どう見ても和の姿を体現したように見えた。巫女がギターの音楽を聴くとは思えなかったが彼女らの笑顔は嘘がなかったように見えた。

長屋の中に入る。どういいうわけか中には廊下が続いていた。長屋は横に広がっているはずで奥に続くはずはなかった。外と中では大きさが違うのか、ここは魔術師たちの総本山だと思い出す。どのような不思議が現れてもそれがここでの普通である。左右対称に続く先は見えなかった。

「やつと来た。待つのは苦手」

時雨がやってきた。どこから出てきたのかさっぱりだった。突然現れたのだ。悠の手を引っ張る。

「さあ行きましょう」

「行くつてどこへ？」

見ても廊下だけがあつて部屋はなかった。悠の質問に答えずまっすぐ歩いていく。さやかは二人を見送るようにその場に立ち止まった。時雨が連れて行くところとする場所も解っていたのだ。だから自分は進む事は出来なかった。

景色が変わったのはさやかから随分とはなれたときだった。いつのまにか右手側に扉が現れ時雨は手をかけた。急に気温が変わっていく。半透明のガラスと檜の部屋が現れる。部屋の壁際には籠が並んでいていた。

「お風呂？」

まだ何も答えなかった。時雨は突然服を脱ぎだす。悠は時雨の後姿を見ていた。肩に一本、腰に一本、左腕の膝から少し下に一本、彼女の身体に刻まれた継ぎ目が現れる。最後に右ふとももに一本、また継ぎ目が現れる。それぞれ赤や黒で肌の色はしていなかった。

「先に入ってるからね」

戸を開いて先に進む。平らな胸と小ぶりな尻を隠すことなく彼女はそのままの姿でいた。悠も同じように服を脱いでとの先へ向う。石のごつごつとした感触を義足で感じとりながら歩く。

屋根はなく黒い空が広がっていた。黒の中には光を放つ星がある。時雨はすでに湯船に浸かっていた。

「ここのお風呂いい湯を使っているわ。さっき巫女さんに聞いたけ

どこの山に流れる水脈を利用しているらしいわよ」

悠は時雨の隣りに入る。湯は緑色だった。水面には空の星が映っている。

二人で肩を並べて空を見る。銀河さえ見渡せるような気さえするその光景を愉しむ。首を傾け悠の肩へ預ける時雨。言葉はなくとも二人はお互いを感じていた。

「ねえ、時雨も試験受けたら？」

悠は口にした。無意識のうちに出た自然な一言だった。時雨に対して友好的に接する人物は少ない。人ではなくブラックリストに載った魔術師の作り出したもの。その彼女に対して友好的に接する事は難しい事だったが認定を受ければ考えは変わらなと思ったのだ。

「いらないわ、私はね。悠の傍にいたいってだけなの」

時雨の返事はそれだけだった。

それでいいのかもしれない。他人の評価を彼女が気にするとも思えなかった。悠も時雨を信じている。

「星……綺麗だね」

「ええ」

二人でずっと見上げていた。

綺麗だと心から目に焼き付けた。

第二章十話

始発の電車に乗って揺られる事、二十分弱。早朝の五時半頃になると悠と時雨は笹塚笙子が待つ神戸へと向った。携帯電話で結果を報告するのもよかったがどうせなら会って報告したらという橘さやか提案によってである。

さすがに朝日が昇るよりも速い時間だったためか二人のほかに電車に乗っている者はいなかった。席は二人一組で進行方向へ向いている。次第に明ける町並みを横目に眺めつつ二人揃って瞼を閉じた。線路が鳴らすリズムが不思議と眠気を呼び覚まし起き上がったはずの身体と心をもう一度眠りにつけた。

その眠りを醒ましたのは誰でもなかった。車内に並んだ窓から零れる光だ。太陽が昇って出来上がったが眩しい光が二人だけではなく車内を光でいっぱいにしていた。おもむろに携帯電話を取り出す。腕時計はもっていない。見たのはモニターに映ったデジタル時計だ。すでに時刻は八時をまわっていた。なのに、二人の周りには誰もいなかった。

「起きた？」

悠が目を醒ますよりさきに時雨は起きていた。悠のほうを見たのは一瞬だった。目は緊張しているのか強張っている。一目で警戒しているのだと悠は察した。

「おかしいよね」

通常ならこの時間は通勤、通学と一般人が電車を利用する時間である。しかし二人の乗っている車両はおろかその両隣にまで誰一人としていない。携帯電話をスライドさせて電波を確認する。圏外と表示されていた。橘さやかの話しでは圏外になるはずはない。外は住宅街が続いているのだ、そんな場所で電波が途切れるはずはない。なにか術が働いている。ここに笙子さんがいればと思うもない。今、ここには悠と時雨の二人だけが椅子に座っているのだ。

「悠はここにいて」

席を立つ時雨。それと同時に車両間を遮っていたドアが開いた。ドアの開く音も二人は始めて聴いた。

現れたのは赤い髪の水色の制服がひらひらと舞っていてまるでドレスのように見える。さっきまでいなかったはずの彼女は突然出現したかと思うとスカートを広げてお辞儀した。

「おはようございます、時雨お姉さま」

微笑む女。天使のようにも見える微笑は不敵だった。彼女から感じる全ては仲間のものではない。悠が後ろから聴こえないように「知り合い？」と聴くが時雨は無言だった。いつもの時雨とは違っていた。

「私に妹はいないわ」

「お姉さまは記憶をなくしてらっしゃいますのよ」

「知らない、そんなこと」

時雨が目を醒ましてからまだ半年。それ以前の彼女の記憶はない。彼女のことを調べたが誰一人として彼女に心当たりはないと証言している。彼女自身も自分のことを覚えておらず、ただ生活と戦闘に関する情報だけが脳の中にあるにすぎない。

「氷室は時雨お姉さまのことをずっと想っておりましてのに酷い言葉……」

少々大袈裟なりアクションをとる。まるで舞台女優のように振舞う。対して時雨は静かだった。その時雨の言うとおりに席から動かずに二人を見る悠。時雨を姉と呼ぶ氷室と名乗った女。その女は姿も顔も似ていない。どこをとってもつながりがあるとは思えなかった。

もしかしたらその首から下は時雨と同じで継接ぎなのかもしれないと悠は考えていた。時雨と同じ場所で作られたと仮定するならだが。

静かにしていた悠に向って氷室が指を差す。

「そちらにいる長瀬悠くん。私にくださいな」

まるで八百屋で野菜を選ぶような言い方。

「それは無理よ」

即答した。時雨の表情は友好的なものなど微塵も感じさせない。

「時雨お姉さまが決めることでもありませんわ。ただ……お渡し頂けないのならお話しだけでは済みません。実力行使に訴えますが……いいのですか？」

明らかな挑発だった。だが悠の傍で立つ時雨はここで渡すような女ではない。とくに眼前の突然現れるような輩には絶対。

「実力？ そんなもの貴女にあるの？」

黙ってうなずく氷室。悠は彼女から魔術師特有の魔力は感じられなかった。正体を隠すような魔術でも使っているのかとも思ったが彼女が現れるときを思い返せば違う事は理解できる。

「……セツト」

言葉がはしった。一瞬で世界を隔てたのだ。繋がっているはずの前後の車両とはすでに違う。この車両だけは世界が違うのだ。誰一人として侵入できない。三人はその一言で隔離されてしまったのだ。氷室の足元から円形状の光る線が広がる。時雨の足元にまで光は広がりそのまま車両全体に渡った。二人ともなにが起きたか理解する。氷室の能力が何であるか。

「鋼鉄の鎖は長瀬悠を捕らえる」

彼女は口をさらに動かす。「悠、逃げて！」ようやく時雨は叫ぶ。氷室の目的は言葉どおり悠だった。悠は席から飛び退こうとしたが遅かった。すでに義足部分に鎖が装着されていた。無理に動こうとすると義足が外れてしまう。

「こんなもの！」

いま装着している義足なら溢れ出る力で引き剥がすことができるだろう。悠は全力でもがく。だがすぐに「なんで？」と言った。義足は力をなくした鉛のように重かった。悠の脚力では動かせなかったのだ。それだけではない。鎖はがっしりと巻きついて外れなかつ

た。そればかりかもがけばもがくほど食い込んでいくばかりだ。それでも何とかしようともがく内、今度は座席から鎖が生えてきた。シートベルトのように悠の身体に巻きつくとその身体を固定する。鎖は首、手首にも巻きついて声さえ上げさせないようにしていた。

「すぐに離せ、でなければ殺す」

「それは無理ですわ。お父様のご命令ですもの。そうですね、時雨お姉さまも一緒に帰りましょう」

「三本の氷の矢、飛ぶは女の額」時雨が口にした。瞬間、言葉の数だけ氷の矢が製造される。時雨の眼前に突如出現した。矢はそのまま弓もなく反動もなしに発射された。威嚇のようなものではない。時雨の口にしたとおり彼女の額めがけて発射された。だが一切動じる事はなかった。

「炎の壁は矢を通さず」

その言葉は氷の矢を溶かす事など容易かった。氷室を囲むように炎が壁を作ると氷の矢は見事溶けてなくなった。

能力は同じ。

氷室の前で灼熱が壁を作るように燃え盛る。時雨は銀色の髪のように氷、対して氷室は赤い髪のように炎を扱った。

「連盟から言霊使いは二人一組で行動すると聞いたけど？」

「では時雨お姉さまはどうなのです。お一人のようですけど」

両者、言霊使いと呼ばれる能力者。溶ける氷と炎を境に二人は次なる一手を思考していた。言霊使いは口にした言葉を具現化する力を持った者。口を開く事はガンマンが銃のトリガーを引くのと同じだ。互いに次なる言葉を選ぶなか時雨だけは傍で捕まったままの悠を気にかけていた。「悠、ちょっとだけ我慢してね」につこりと微笑むと目を氷室へと向ける。そんなことから氷室に先を越された。左腕を向けて口を開く。

「圧縮、縮小する空間」

左手を開いて握る。悠の目の前で時雨の身体が簡単に折れ曲がった。炎でも凍りでもなかった。物理をも超えて腹から折りたたまれ

る。時雨の身体は豪快に吹っ飛んだ。上下と前方、まさに不可能な一撃だった。壁に向って一直線に飛ぶ。身体の中で骨の軋む音を彼女は聴いた。

「時雨！」

首を締め付ける鎖に構わず叫ぶ。赤くはれ上がるがおかまひなしだった。どれだけ叫んでも時雨は悠の声に反応しなかった。車両の最奥で蹲っている。

「第二射、炎の槍にて突き刺す」

「やめて」と声をあげるが氷室の言葉はとまらない。言霊使いが口にした時、その能力は具現化され超常の現象は発現する。彼女にとって言葉と想像こそが武器である。銃器であり刀である。悠の声は力なく止める術をもたなかった。

炎の槍が一本、現実となっていく。さきに時雨が作った矢よりも大きく全長一メートルほどの巨大な槍だった。車両の奥に倒れた時雨へ向かっていく。投げてはいない、氷室もまた言葉にしかだけだった。彼女の前に生成された炎の槍が発射したのだ。さっき時雨が作った氷の矢も同じ。トリガーを引かずとも彼女らの意のままに言葉通りに発射される。たった一人、悠の声は無力だった。

「氷河、凍てつく空気は全てをとめる」

車両内に畏れと共に浸透する。彼女は身体が折れ曲がったまま言葉を発した。例えば身体中の骨がばらばらに砕け散るうとも彼女の瞳と声が途絶えぬ限り最後まで戦いつづける。

悠は息さえ出来ないほどの冷気に身を晒す事となった。車内の温度は急激に下降する。全ての物質が凍りつく。命を燃やそうとする炎の槍も同じだった。壁も席も全て瞬時に作り出された氷河期の到来によって動く事もままなくなかった。勢いのなくなった炎の槍は炎さえ凍りつき落ちた。槍は落ちた衝撃で砕けてしまった。

「そうでなくては困ります。時雨お姉さま、二人で限界を超えましょう」

砕けた槍に動じなかった。攻撃が通らなかったことに何も疑問が

無い。ましてやそれさえも当然とし恐々と笑い始める。両手を広げて氷のなかで立つ。

「……殺してやるわ」

今や車両内の気温は一度もない。マイナスを上昇させているだけだった。悠も凍えて息さえ出来なくなっていく。

「いかなる炎の弾では私には届かない。私は全てを凍らす氷の刃」
時雨の身体から冷たい風が溢れ出す。さらなる冷気は車両を包んでいく。彼女自体が刃のように鋭く光る。全ての水分は大気を含め凍りつくまで後僅か。炎を体現する氷室も同じだった。しかし悠ほどの冷気は感じていない。時雨と同じようにこの世界に馴染んでいた。

「空間の凍結」

座席、壁、窓全てが完全に氷に包まれた。完全なる氷の世界となる。時雨は身体を立て直すと体内で傷ついた臓物と骨をそのままに悠の傍へとやって来る。すでに唇も白くなって凍りそうな悠だったがその瞳は時雨を見ていた。ゆるぎない信頼を寄せている。

「冷たいよ、大丈夫？」

頬に時雨の手が重なる。周囲の冷たさと比べると彼女の手は暖かった。その触れあいが今の二人には全てだった。人間と較べると冷たい彼女の体温もこの世界では熱を感じられる。先の一撃で時雨の身体は破壊されている。だというのに目の合う二人は互いに堪えた。

「この位、平気」

震える唇で答える。大きく動かせば切れるほどに白く染まった唇だった。だから精一杯の声だった。

「守るべき対象を凍らせるつもり？ お姉さまって無茶するのね」
二人の間に入ろうとする氷室。その彼女に向って投げるのは視線だった。強い衝動と信念を携えていた。

「大丈夫だと言っている。私の言葉に嘘偽りはない。悠、好きよ」
時雨の唇が悠の唇に触れる。微熱のようできて炎のように燃えた

キスだった。

「こんなときに何を！」

敵を目の前にしてする行動ではなかった。だからこそ氷室は体を包む氷の世界のなかでも動揺した。その少しの隙に銀髪が翻る。氷の世界で踊る彼女は少年の目に美しく映る。

「氷の楔よ！ 舞い散れ！」

車両は極寒の地と化している。天井には氷が幕を張ったように付着していた。足元も同じだ。氷のカーペットが広げられている。そこに時雨の言葉で氷に変化がおきる。平面だったはずが棘のように形状を変えていく。新たに氷を作る事は無かった。氷の世界に変化し作られた氷でよかったのだ。形を変えた棘が降り注がれる。氷室だけを狙って散る。

「炎よ、私の身体を灯せ！」

自分の身体に火を灯す。全身が氷室の髪のように赤く染め上げられる。火は彼女を焼かずに氷の棘だけを溶かした。彼女自身が炎なのだ。その身の周りに作られた氷の世界をも溶かしていく。冷え切った身体に体温が戻る。

時雨は悠へ一目向けてすぐ逸らした。

「このままじゃ悠くんの体力が持たないわね……」

「貴様の目的は悠のはず」

「生死は問いませんの。ですのでやめません、でも悠くんが死んじやったらお父様は悲しむわね。だからこれが最後！」

全力を正面へ向ける。

「炎の連弾。その数二十八！」

出現したのは炸裂する溶岩の弾。続々と発射される。その一つずつが人間の頭ほどの大きさがある。一発でも命中すれば時雨の身体は炎に包まれ燃え尽きる。だが時雨は冷静だった。氷室を捉えた瞳はそのままであった。

「完全遮断。何者も通さぬ絶対防御」

現れたのは光りの壁。炎の弾は壁にはじかれて飛び散っていく。

二十八の弾は互いに弾き合い破裂していく。そればかりか車両の壁を粉碎していく。マグマと噴火のごとく弾かれてはぶつかる。今度はあたり一面火の海と化す。

跳ね返ってくる爆発を眼前にして氷室は動かなかった。壁で跳ね返った弾は作り出した彼女にも容赦なく降り注がれているというのに一歩たりとも下がらなかった。

自らの作り上げた炎に身を焦がす。彼女は二十八発の全てが粉碎した後、辺りを見た。氷室と時雨の間には二十八の炎からなる極炎が広がっている。炎は氷を溶かして壁さえも破壊していた。今、氷室の傍には外からの風が吹いている。対する時雨は炎のダメージを追っていない。彼女が受けたのは最初の一撃のみである。

「解除」

短く言葉にする。氷室はあの激しい爆発の中で無傷だった。自分が仕掛けた攻撃で傷付くほど馬鹿ではない。彼女の炎は足元に広がっていた光とともに全て消え去った。悠の身体を縛っていた鎖も消えていく。言霊使いは作る時も消す時も口にするだけでいいのだ。

解放された悠を見て時雨も氷を解除する。ただし氷室とは違い無言だった。彼女は自分の意図するままにその能力を使用する。その部分だけが他の言霊使いと違った。

「逃げるつもりか？」

お互いに力の一部しか見せなかったが時雨は逃すつもりはない。突然の襲撃には頭にきていた。悠にも辛いを思いをさせている。この女をこのまま逃すはずはなかった。二人の間には距離はない。大きく股を広げれば四歩程度。時間にして五秒もかからない。なのに氷室はこの距離でも目を逸らした。目は炎の弾が爆発してできた穴に向いている。

電車は発進した時と変わらず速度を保って一直線に走っている。青い空と緑の田畑が見えては流れ繰り返されている。景色はその繰り返しだった。どこにも京都の町並みはなく名も無い風景が映像のように映し出されている。

「二人きりで戦えればもつと面白いと思いますが今回はこれくらいにしておきましょう。時雨お姉さまは大丈夫でも悠くんが死んでは意味がありませんもの」

「さつきは生死を問わないといったのに？」

「私は……ですよ。それにお父様なら死んでも……いえ、なんでもありませんわ」

最後、口にした言葉を躊躇った。かわりに少々 of 微笑みを散りばめる。「悠は誰にも殺させない」氷室に近づかないまま時雨は言った。

「それでいいですよ。お姉さま」

壊れた壁に手をついて外を見る。

「それではごきげんよう」

全てが嵐のように過ぎ去る。女の取った行動は異常だった。壊れた壁からただ飛んだのだ。電車は走っている。だというのに彼女は飛び降り景色の中に消え去った。途端に電車の構造が歪む。手すりも椅子もなにもかもが二重に見えたかと思うとすぐにひとつに戻る。そして身体も一度揺れた。

「なにが起きたの」

時雨が悠の手を掴むとそのまま引つ張り出す。「行くよ」と独り言のように呟く。悠はギターケースを手にするだけで他には何も出来なかった。突如、電車から氷室のように飛び降りる。まるでくもの巣にでも引つかかったような感触が全身を包んだかと思うと景色は一変する。

緑はそのままに寂れたコンクリートの上に立つ。苔と錆びの混じった標識が目飛び込んできた。標識は何が書いてあるか読めない。「どこだよ、ここ？」

見た事も無い場所だった。何所を向いても辺りは山で緑一面だった。草原のように見える背の高い草が広がっている。乗っていたはずの電車もいつのまにか消えていた。コンクリートと緑の草むらの間には線路があったがその線路もまた、草に侵食され錆びていた。

何一つとして悠の知っている物はない。

どうしてここにいいのか記憶が混乱するばかりだった。

「悠は大阪に帰って。私は追いかける」

「時雨？ なに言ってるのさ傷の手当てしなくちゃ」

彼女は腹を抑えていた。その身体の奥で引きちぎられそうになっているのが悠にも見えている。しかし悠の言葉に耳を貸さずに彼女は鳥の如く飛翔し駅から飛び立った。悠は時雨をどうにかしたいと叫んだが何も変わらなかった。

「まったく……」

肩の力を抜いてもう一度辺りを見回す。やはり緑ばかりでなにもない。大阪に帰れといわれてもどうすればいいかさえ解らない。立っている駅も誰もいない。使われなくなってすでに十年以上経っているように見える。悠は途方に暮れるしかなかった。

電話が鳴るまでは。

第二章十一話

白い部屋に再び赤い髪が靡いたのは二時間も経たない昼前の事だった。一瞬にして出現し同じように消え去ってから白河夾はパソコンに目を向けていた。白い塔のようなマンション全室に備えられているインターネットを使用するためだ。山の中、市街地から離れていようと現代では関係ない。彼の使用するパソコンは全世界と繋がっていた。

「申しわけございません、お父様」

現れるなりその場に膝を付く氷室。声はかすれ息をするのもやつとだった。身体に傷をおっていないかったが疲労に耐えかねていた。針金のように細い脚は震え肩は平行に保っていないかった。そんな彼女に男は父親らしいことをすることもなく目を向ける事すら無かった。パソコンの画面に釘付けになっていてそれどころではなかったのだ。

「氷室はお父様のお遣いに失敗しました」

悲しみに満ちた瞳。慈悲を乞うように声を絞り出す。彼女は崩れそうな身体を必死で抑え男を見る。ようやく画面から目を逸らしたのはその声に腹が立ったからだだった。氷室は彼が振り向くまでいつまでも泣いていただろう。

冷たい白河夾の視線が突き刺さる。役に立たない自分は説教されるのか。怒られて鞭を打たれるのか。それとも捨てられるのか。そんな負の感情が頭の中で交錯していく。夾はそれを見透かしたように口元を緩める。

「こちらに來なさい、氷室」

両腕を開き氷室を迎える。怖がりながらも近づく。今にも泣きそうな氷室はまるで子供のよう。幼い娘が父親のもとへ向かう様だった。夾は一切手を挙げなかったのだ。そっと抱きしめる。決して暖かくは無いがその胸のうちに氷室は涙を流した。筋肉の無い胸は夾

の心臓が激しく音を立てている。鼓動を聴きながら涙を流すと白衣に濁りができた。夾の目は冷ややかであった。

「氷室はあの子に対してのものではありません。だから勝てなくて正解なんですよ。それでもあの坊やを連れて来れないというのは残念ですね」

「ごめんなさい、お父様」

そのときだった、氷室が顔を上げて赤く腫れた瞳を見せるとともに大きく音が鳴った。それは玄関で厳重に閉まっているはずの扉が開く音だった。白い部屋は外と隔離された空間だ、外の世界の空気が入り込むと別の空気の流れと混ざり合う。外の空気は温度も違う、二人の身体は二つの空気が混ざった妙な違和感に包まれ玄関先を見た。

近づいてくるのは足音、フローリングの床が軋むくらいに高い音をたてている。コツツというヒールの立てる音だった。体重を乗せてありつたけの音を立て、床に刺さりそうな勢いで鳴る。自分の正体を見せつけるような響きをしている。

「聞いたわよ、聞いたわよ！ 失敗したんですって？ 天下の白河夾ともあるう男が、日本人魔術師の最高峰とも言われる白河夾が失敗したんですって」

まるで小さな怪獣。金色の髪はここぞとばかりに揺れてマントのように翻った。ドレスの裾は花びらのようにふわりと浮かんでは彼女が存在を強調させる。

「黙りなさい、セルマ」

実に可愛い怪獣だった。白河の目は彼女の平べったい胸を矢の如く射抜いた。だがそれは一瞬のことで勢いを増して吼える。

「何よ！ その言い方！ 失敗したくせに。っていか何してるの！」

キーと吠えたてる。怪獣というより犬か猫に近かった。子供っぽい仕草の割に彼女はすでに三十手前である。それと同様に若く見える白河夾も実年齢は四十程。二人とも外見だけならその半分程度に

しか見えない。そんな子供っぽいセルマが見たのは氷室を抱いている姿だった。あまりにも密着している二人に白い肌が林檎のように変わっていく。

「あやしていただけです。君がそんなことを言うからまた泣いてしまったじゃないですか」

氷室は顔を伏せて泣いていた。涙で服は濡れてしまっている。さすがにセルマは悪いことをしてしまったと目を左右に動かす。言葉に詰まるが誤ることは無かった。

「し、失敗したのは事実なんだからいいじゃない」

泣き崩れた氷室に目をやるとすぐに顔ごと背けた。

「それよりあんたが言ってた例の物、もうすぐ日本に来るみたいよ」「それを言つたためわざわざ」

夾の瞳が変わる。「暇なのよ」と返すもセルマが暇なはずは無かった。このマンションにいる学生たちの教育がある。各連盟施設とのやり取りもある。セルマ・フォースターが休める時間は決まっている。なのに彼女はやって来た。態々歩いてはこれないこの部屋へ。「どうするの？」

セルマが挑発するように言った。氷室は夾に肩を叩かれると彼から離れた。涙を拭って立ち上がる。水色の制服から同じく水色のハンカチを取り出して目元を押さえる。白河は腕を組んで天井を見た。「もちろん、手に入れます。あれが無くては成し得ない。私の全てですからね」

彼の見上げた天井にはなにもなかった。白い壁が広がっているにすぎない。彼は天井を向いていたがその瞳は別の場所を見ている。

言葉を察してセルマがにつこりと微笑み両手を合わせる。

「良かった。じゃ私の所からとっておきの二人を向かわせるわ」

「そんなことをしてもいいのですか？ 正体がバレますよ。ここを失うのは私にとっても辛いのですが……」

セルマは笑う。微笑みは少女のように。

「氷室が出て行った時点で勘ぐられるわよ。単独行動できる言霊使

いなんていないもの。彼女以外に」

白河が「そうですね」と小さく頷いた。氷室もまた同じ人物を思い描きハンカチの下で笑う。

「それにその場でみんな殺しちゃえばいいじゃない。なにより先に協定を破る事になるのは彼らよ」

その言葉はまるで悪魔のよう。

「良いでしょう。氷室、貴女も行きなさい」

天井から美女二人に視線を戻すと女のように細い身体で立ち上がると氷室の頬に手を当てた。彼の体温に涙が枯れていく。まるで魔法のようだった。

「ちよつと！ 私の所から出すって言ってるのよ。なんで氷室ちゃん出すのよ。ダメーじだつて残ってるじゃない」

隣でやつと泣き止んだ女を指差すセルマ。

「私の目になって欲しいだけですよ」

男の眼は圧力をかけてくる。セルマは言い返せずにつなずいた。昔からそうだった。男の瞳には言い知れぬ恐怖を感じることが多々あった。暴力のような物理的なものではない。彼女とて白河のような細いからだの男なら鈍器の一つでも手にした途端に力の差は変わるだろう。そのくらい身体能力に差は無いのだ。だが白河夾にはこの学園の長である彼女ですら恐れる力がある。その片鱗ともいえる恐怖を瞳から見るものがあつた。

「そつちはそれでいいわ。でも、氷室ちゃんが失敗したっていう件。私の所の生徒を向かわせるわよ」

「無理ですよ、どうせ君の目的はあの子を倒す事でしょう。あの子はすでに私の元を離れています、故に倒してもそれは私を超えた証にはならないよ」

「でも結果はでるわ。私の生徒があの子を倒したという結果がね」
自信に満ちたセルマの言葉。白河は特に止めることもなく「わかった。好きにきなさい」と告げる。そして赤くなった鼻をした氷室に言った。「今度は氷室を止められるものは一切無い。はりきつて

いつて来なさい」と。

「はい、お父様」

本当の少女のように笑う氷室。セルマは少しの嫉妬と一緒に彼女を迎えて部屋を出る。女二人が出て行くとまた静かさに包まれる白い部屋。そのなかで氷室がいた場所が汚れていた。足裏についた埃とゴミ。それは必ず残るものだった。しばらくその汚れを見ていると内側から沸き上がる高揚とともに口元は綻んだ。

彼の頭の中では狂気にも似た実験の数々を思い出させていた。ただ嬉しくてたまらなかった。部屋を歩き寝室へ向う。もはや光はなく闇の中だった。白河夾は部屋の構造を完全に把握している。壁に手をつく。薄く黒い枠が出来上がる。ほんの少し体重をかけるだけで枠が奥へと移動していく。

「椿、体調はどうです？」

氷室に向ける言葉とは違っていた。その声は娘にかける声だった。親としての彼が立っていてその声の先には一人の少女がベッドに寝ていた。歳は十歳にも満たない身体。まだ幼い身体は一切の衣服を纏わず裸身であった。

寝台に横たわるその姿はまるで死んだように制止していた。白河夾の言葉に一切の動きを見せなかった。なのに「次の実験をはじめます。体をひらきなさい」と語りかけると少女は脚を開いた。まるで機械のように忠実だった。

十に満たないような少女の身体は清く美しく作られていた。白衣のポケットから一本のピンを取り出す。小指一本分くらいの太さと長さだった。ピンは少女の身体中央から埋め込まれていく。苦悶の表情をする少女だがやはり自然なものではなかった。侵入する異物に顔を歪ませたが抵抗しなかった。なにより頬は火照り歳にそぐわない悦楽を映し出す。

「全て私の計画どおりだ」

瓶は中で溶け込むように消えていく。

少女の身体は乙女のように白く輝いていた。

第二章十二話

電話をかけてきたのは別れて間もない橘さやかだった。彼女は急いで合流したいと告げたが悠は自分が何所にいるかも解らなかった。それもそのはず、周囲は観たことの無い景色が広がっていて人の姿はない。駅の名前を見たが錆びと汚れで名前は隠れていた。困惑していた悠に携帯のGPSを使えばいいとさやかは電話を切った。

彼女の携帯電話が指し示す悠の居場所はとても遠かった。なぜか大阪を目指していたはずが京都の北部にしていることになっている。だがGPSの発信装置に不備があるとは思えず少年を目指して車を走らせた。一刻も早く合流する必要があったからだ。

悠達が京都を離れるため電車に乗った後、さやかもまた本部へと引き返した。その帰り道で彼女の携帯電話が鳴ったのだ。相手の名前は高村啓子。彼女の後輩に当たる特派員だった。

京都府綾部市……橘さやかが知っている彼女のいる場所だ。高村啓子の実家も綾部市に存在している。悠が来る一日前のこと彼女は奏者の柴村豊とともに向った。連盟所属の奏者のなかでもトップの男だ。魔術師の援護無しでも問題の無いくらい経験と修練を積んだ男である。さやかも後輩にとっていい経験になると思っていた。

「先輩、わ、私……ミスして、その……あのっ」

泣きじゃくる啓子の声に車を停めて話を聞いた。だが要領を得ずただひたすらに謝りどうしようかとパニックに陥っていた。まだ彼女は高校を出たばかりの歳で自分の心を保つことなどできなかったのだ。とにかくさやかは彼女を電話越しに落ち着かせ名前を呼んだ。「しっかりなさい！」と一喝する。泣き声が止んだのは十分も経ってからだ。ようやく啓子は事態を話し始める。

「豊さんが怪我をして……」

「どの程度の怪我？」

柴村豊が怪我をするという事態は想定できなかった。彼と橘さや

かはお互いを世おく知っている。奏者の中でも指折りの人物である。
「それが……豊さんは問題ないって言うんですけど。身体中痛そうなんです」

「そこにいる？」

「はい、テントの中で休んでいます」

「代わりなさい」と告げると歩く音が聴こえてくる。「柴村です」と男の声が変わる。さやかは自分の名前を名乗ると啓子の心配とは別に「よう、さやかちゃんか」と陽気な声が返ってきた。二人はお互いをよく知っている。中学生の頃から豊は奏者として本部を拠点に働いていた。その頃からさやかとは顔見知りだ。

「啓子がパニックになってて私に電話してきたの。怪我をしたって聞いたけど大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、すぐ直るさ」

そう言うが受話器のむこうがどうなっているか見えない。豊は他人に心配をかけさせまいとすることがある。もしかしたらという感情が現われてもしかたがなかった。なにより啓子の慌てぶりが気になっていた。

「仕事もすぐに片付けるさ」

「そう、啓子に代わって」豊は特に問題に思っていないようだった。彼自身の感覚なのだろうが啓子に代わるとそうではないように聴こえた。彼女はテントを出てまた一人になったようだ。

「豊さんはああ言ってますけど満足に動けそうに無いんです」

さやかは彼女の言いたい事を汲み取って「私が行くわ」と告げた。啓子と豊がいる場所もわかっている。啓子の「ありがとうございませう」という返事の後、電源を切った。そして本部を目指してアクセルを踏んだのだ。

本部まで時間はかからない。ものの十数分で着くと誰かいないかと探りを入れた。個人で勝手に行動する事など出来ない。さやかは本部で二人が向った現場の情報をまとめて策を仰いだ。するとまだ残っていた桐生泰治が「ならば」と少年の名前を出した。

「長瀬悠くんに出動願おうかの。まだ京都におるじやろ」

GPSは少年の居場所を表示していた。さやかの目にはなぜか北上する信号が映っていた。彼が向ったのは間違いなく神戸方面である。間違っても北上するような事は無い。

だが電話をしても出なかった。仕方がなくGPSを追う事となりさやかはまたしても車に乗り込んだ。

繋がったのはついさっき、昼前のこと。さやかが昼食を終えて駐車場に戻った時だった。停めた車のエンジンを点けたながら携帯電話で呼び出すと繋がった。長瀬悠は一人きりで立ち尽くすばかりと聞く。なぜ北部にいるかは後で聞くと行って迎えに向ったのだ。

第二章十三話

長瀬悠が一人待っていた場所というのはまったくもって奇妙な場所だった。京都北部に存在する山間部で鉄道など昔から一度も通っていないかった。まったくもって奇妙な場所だった。また悠が立っていた駅もさやかの知る物ではなかった。とはいえ二人はここで立ち止まっているわけにもいかずすぐにさやかの車は発進した。

「ごめんなさいね、せつかく笙子のところへ向ってたのに」

「いいですよ、あそこで一人つきりよりマシです」

「時雨さんは一緒じゃないの？」

「それが僕にもわからなくて」

悠は冷静に見えた。さやかも時雨なら何があっても大丈夫だと思っていた。だが彼女が悠を置いて一人でどこかへ行ってしまうのは考えられなかった。

「神戸行きの電車に乗ってたら突然襲撃された」

何食わぬ顔をしながら言った。少年は後部座席でギターの手入れを始めている。ケースから取り出したギターはあの氷室と時雨の戦闘の中でもいっぺんたりとも攻撃を受けていなかった。バックミラーから覗く少年の顔は真剣そのものだった。

「誰に？」

「解らないな、氷室って言う言霊使いだったよ」

素気なく言い切ってしまったがさやかも氷室という人物に心当たりは無かった。だから言霊使いという言葉にだけ気が行った。

「氷室の特徴は？」

「赤い髪をしていて青い制服を着てた」

あの戦闘の中、悠は敵対する彼女よりも時雨にばかり気をとられていた。氷室も自分の事を喋らなかったから彼女の外見しか憶えていない。

「パートナーは？」

「いません。一人でした」

「ええっ」と大声をだして車が揺れる。幸い周囲に車はなかったが中では悠が替えの弦を落とした。拾おうとする悠がバックミラーから消えるとさやかが謝った。問題ないよ、いつものように感情の籠らない返事をした。

「時雨と一緒にパートナーはいなかったよ」

「言霊使いなら二人一組のはず……その氷室って女、何者……」

「解りませんよ」

車はようやく高速道路へと入り込んだ。京滋バイパスに入り急激に加速し始める。

「そっちのほうも調べなきゃならないわね」

「すみません」

「悠君が謝る事じゃないわ。それに言霊使いつて解っているなら調べるのは速いわ」

言霊使いは奏者と同じくらいに能力を保持する者がいない。能力者は先天的能力による保持者が大半を占めている。その言霊使いは奏者と同じく彼らだけの学園に預けられ教育を受ける。日本に存在する彼らの学園はたった一つ。調べはつくだろう。

「でも厄介ね」

彼らは口にした言葉を具現化する能力者である。魔術ではなく超能力のような未知なるものである。使用する者が言葉にすれば術は発動する。できないことは使用者の知らない事、体験した事の無いことだけ。そればかりか術者が聴いた、見たといった体験さえ際限可能となる。先に必要とするものはそれだけで他にはなにも要らない。

魔術師が戦闘する場合にかかる時間や準備、戦闘中にかかる疲労を考えれば言霊使いはわずか数秒でいいのだ。だが魔術よりも厄介とされる能力にも不利な点はある。一度の戦闘で使用する力は比ではない。

奏者が連続で二時間ほどの演奏が限界だと言われている。それを

超える場合は休憩を挟む。言霊使いはその半分も続かない。さやかが二人一組と言ったのは言霊使いたちの学園が決めている戦闘スタイルである。世界各国に存在する言霊使いたちもお互いを預けられるパートナーと行動している。それは現学園長セルマ・フォースターの先祖が決めたものである。

ただ唯一、時雨だけがその枠から外れていた。

彼女の能力がどの程度かは計り知れない。

「でもなんでサポートが僕なんですか？」

「昨日、会ったでしょ。桐生泰治さん。彼が君を指名したの」

悠には理由がわからなかった。それもそのはず会ったのはあの一度きり。とくに濃い話をしたわけでもなかった。

「綾部市の戸谷峠でバケグモが発生したの。悠君も知ってると思うけど定期発生よ」

バケグモと定期発生の二つの言葉でピンとくる。妖魔のなかには生態系によって定期的に現臨する者がいる。出現する時期は決まっていないが約三ヶ月程度か季節の変わり目ごと。

特にバケグモはよく出没する一種である。その姿は時代が違えど全て同じ。行動も微妙な差異はあれど同じである。今回も当然これまでと同じであった。バケグモは特に京都北部と兵庫県北部の山岳地帯で確認されている。その理由としては出現場所に集まる魂に蜘蛛が多いとの話がある。大量の魂が一箇所に集まる時、そのなかでもっとも強い力が現臨するときの姿に影響される。奏者は妖魔の魂を浄化することにより穢れを落とす。

「もちろん奏者は一人向かったわ。けれど問題が発生したらしいの」手を止めてミラー越しにさやかを見る。

「奏者のサポートをしているのは私の後輩なんだけどバケグモの浄化に失敗したようなの」

「……失敗？　どんな」

これまで長瀬悠は一度たりとも浄化に失敗したことはなかった。「ちよっとしたミスで怪我をしたらしいわ」

奏者が相手にするのは人間ではない。妖魔である。暴力の限り暴れる化物だ。ちょっとしたミスで済むはずは無い。一瞬でも目を背ければ死もありえる。悠は十五という歳でその中に身をおいている。「君も意識を失った事が何度かあるわね」

うなずく。悠は失敗したことはないが妖魔と意識をかわしてしまふことがよくあった。その度に意識を失い浄化までの時間は他の奏者よりもかかっていた。悠は直接そのことで責められなかったが今は責めることも出来ない。

車は綾部市を目指し走っていく。一時間程度の高速道路を走ると目的の戸谷峠が見えてきた。さやかが「見えてきたわ」と言っ指を差す。運転しながらでもそのくらいのことはできた。目標とする山は遠目に見れば他と何ら変わらない普通の山だった。すでに半分以上が赤く染まっていてバケグモなんていう怪物がいるとは思えない。

高速道路を降りて神社が続く道を走っていく。町はいつもの風景をしていて一般人たちはただ自分達の生活を送っていた。何一つ変わったところなど無い。穏やかに時を刻んでいるだけだった。異常の世界にあるのは悠たちだけである。戸谷峠には何本か車道があるがさやかが使った道は当然の如く途中までしかなかった。昨日、悠の試験に向った道と同じだった。道は途中で途切れ小さくUターンができる場所だけが用意されている。目に見えるのは山の緑くらいなものだった。峠の周りには道が他にもある。だがその道は軽自動車一台ようやく走れるだけの広さしかない。加えてコンクリートが使われていない削って作った道となる。そんな場所に車を停めるわけにはいかなかった。

道の終わり、林の中に車を置くと二人は林の中へと足を踏み入れる。

「向こうはどこにいるんです？」

「別方向から登ってるわ。現場にはあっちが近いわね」

足場は岩肌がちらほらと見えている。坂というほどではなかった

が斜面は目と鼻の先に見えていた。力を込めて踏みしめなければ体が傾く。さやかは道を知っていた。車に積んであった運動靴に履き替えていた。対して悠はいつものロングブーツで問題はなかった。なにより義足はいつも通りに働いていたのだ。

「どこまで行くんですか？」

大きく育った林のせいで自分達がどこにいるか判断がつかない。どこを見回しても林が続いている。昼間だというのに鬱そうとした風景が広がっていた。悠にとっては自分が山の何所にいるのか知リエなかったのだ。

「この先五十メートルもいけばキャンプのできる広場があるの。そこに二人がいるわ」

足にかかる負担が強くなるに連れ二人も山の頂上を目指していることくらいはわかつている。しかしその頂上は見えることは無い。

悠はそんな中でもギターケースの反応を見続ける。バケグモが近くにいれば弦が震えるはず。この状況で敵の位置を見逃すわけにはいかなかった。目の前では先導する橘さやかがいる。

彼女はもうすぐ着く辺りで振り向いた。

「悠君、これを渡しておくわ」

足を止めて手にしていたバッグを開く。パソコンや小道具を掻き分けて小さな箱を取り出した。両端にロックがかかった金属製の硬そうな箱だった。さやかはロックをはずして箱を開ける。中には人差し指程度の大きさをした瓶が六本並んでいる。瓶には中身がこぼれないように黒い蓋がされていた。透明の瓶部分には緑の液体が入っていて空の光に反射する。悠はこれをよく知っていた。

「いりませんよ」

受け取ろうとしなかった。さやかは首を振る。瓶の中身は弾だ。奏者、それも悠の扱うギターに対する弾である。だが込めれば楽器から兵器になる。浄化もできなくなる。浄化する時、内に溜まった魂を大地に返すこともできない。全てを破壊することになる。

完全なる浄化とも言つべき破壊を目的とした弾。

「相手はバケグモでしょ。僕だって二回浄化してます。それは要りません」

「今から合流する奏者は柴村豊さんって言うてもう二十年以上前からやってるプロなの。関西魔術連盟、いえ世界的に見ても確実に上位に立てる人よ。その人が怪我をしたの。これは保険よ」

「危険なんて今更言われなくても解ってるよ。だけど僕は……」

最後まで口にしなかった。差し出された緑の液体はゆらゆらと動き悠を誘っていた。この弾を込めて演奏するということは浄化ではなく消滅を意味する。ギターはあらゆる生命の魂を喰らい尽くすだろう。

まだイギリスにいた頃、育ての親である長瀬律といた頃から悠はあの色が嫌いだった。そして律もまた緑を嫌い一度たりとも使わなかった。さやかは差し出した瓶をしばらくそのままにしたが悠がどうしても受け取らないと意志を示した為仕方なく引込める。長瀬悠についてのレポートを読む限りこういう頑固なところも見られる。どうも他人の意見より尊重する事が多いとあった。

二人は足を止めてしばらく見やった。どちらかが先に心折れるかと思う矢先で鳥の鳴き声が間に割って入った。鳥というに機械的に鳴き声も真似をした音だった。鳥は二人の頭上を輪を描くように飛ぶ。その鳥はキジの形をしていたが青かった。

「式神……豊さんの所の子？ 案内お願いできるかしら」

人の言葉を理解して青いキジは一度大きく鳴くと一方を目指してゆつくりと飛ぶ。

「式神……あれが」

「悠君ははじめて見るのね。あれが連盟の支給しているキジ型式神よ。これは……とにかく持ってなさい。使うかどうかは悠君が決めればいいわ」

強引だった。無理やり悠の掌に握らせた。ひんやりとした感触が伝わっていく。さやかはバッグを元に戻すとキジを追って歩き出した。悠は彼女に数歩遅れる形で歩きだした。瓶を握り締めて歩き出

す。悠は彼女の姿ではなく過去を見ていた。
自分を孤独から救い出した長瀬律の姿を……。

第二章十四話

機械仕掛けの鳥の後を追っていく。峠に道は無いが比較的とおりやすい足場を踏んでさやかは進む。特派員として活動してはいないものの彼女は地形を知り尽くしていた。目線は頭上に飛ぶキジに向けている物の彼女は足を踏み外すような事は無かった。悠は義足から大地の感触を踏みしめながら歩いていく。互いに言葉を交わさなかった。

先へ進んでいたキジが戻ってくる。ようやく着いたという訳だ。林に囲まれた広場へと二人はやってきた。中心に黄色いテントが張られている。その隣には日よけのテントが建てられている。その下には簡易キッチンが設けられている。これだけの資材をどうやって持ってきたか悠は見渡した。だがその方法はわからなかった。

キジはテントの中へ入っていく。

「ご苦労さま」

すぐに入れ替わるように男が出てくる。髪は短く爽やかな感じがにじみ出てくる。背も高く悠は少しだけ羨んだ。日本へ来て初めて対面する奏者だった。

「悪いな、さやか。そっちが有名な長瀬悠君かい？」

どう有名なのか解らなかったが悠は答える。

「はい。柴村豊さんですよ」

「豊かでいいよ。奏者に上下関係は無いからね」

頭を下げて挨拶を交わす。にこやかに笑顔で立つ。話しに聞いている。「怪我の具合は見えなかった。彼は何一つ問題なく体を起こしている。」「怪我の具合は？」とさやかは聴いたが「問題ないよ」と返す。それどころか陽の光を浴びて背伸びをする。その姿を見てさやかは「そうみたいね」と言った。そしてもう一人を捜した。

「啓子は？」

「彼女なら一人で行っちゃったよ。なんでも気になることがあるみ

「たいだ」

「あの娘つたら……」

ハハハッと笑う豊。気さくでほがらかな人だとわかる笑顔で握手を求める。悠はこういった挨拶は照れくさくて戸惑いながら握手をした。

「バケグモはどうしてるの、狙われないかしら」

「でかい一撃を加えてるから大丈夫だよ」

三人は簡易キッチンのある日差しの中へ入り日光を避ける。日よけテントの中には折りたたみテーブルもある。その上にはこの辺り一体の地図を置いてあった。その地図に悠が目を向けるなり林の中から草を動かす音がする。三人ともその方向へ目を向ける。悠はギターケースの中を確認したが弦のしなりはなかった。がさがたと無用心にやってきたのは一人の女性……ではなく思春期を終えたばかりの少女。眉間から線を引いて横分けにしたロングの黒髪が所々砂に塗れていた。

「啓子！」

さやかが突然大きな声で叫ぶ。肩を上げて驚いた。二人の男は警戒を解いてさやかの動向を見た。彼女は戻ってきた高村啓子に近づいていく。一方、先輩が近づいてくるのをただ見て立ち尽くす彼女は少しばかり震えている。さやかと啓子が密着するほど近づいて話をし始める。

「ありやあかなり怒ってるな」

テーブルに腰をかける。腕を組んで豊は見ていた。悠は彼女らのやりとりに興味はなかった。ただ豊に目を向けた。

「律の息子だつて聞いてるよ」

突然だったが悠は言葉の意味を把握できた。律という名前はひとつしかない。「血は繋がってませんよ」と返事をする豊は笑った。「血の繋がりは関係ないよ。律が君を息子にただけで充分さ」

「律先生とは知り合いなんですか？」

少年の口から先生という呼び方が出た時、あいづらいなという

なつかしさがこみ上げていた。ましてや長瀬律という男が父さんと呼ばれる場面など彼には想像できなかった。

「あいつの家は俺の家の近くにあるんだ。ご近所さんってやつさ、律の家に行った事はあるかい？」

「ありません」と首を振る。悠にとつてみれば初耳だった。笙子は律についてなにか話すとすればイギリスでの出来事くらいなもので日本での彼を何一つ知らなかった。

「律先生とはイギリスで会ってその後いろんなところに行きました。日本に来たのは半年くらい前です」

折りたたみ椅子を広げて座る。男側の会話以上に女二人の会話は激しかった。時折、さやか of 怒鳴り声が聞こえている。だが二人はその声を無視していた。

「じゃあ行つた事は無いんだ」

「どんなところなんですか？」

尋ねると豊は頭を掻きながら話す。

「何にも無い場所さ。京都の市街地にあるよ。良かったら行つてみる」とい

「でも律先生はいない……ですよね」

豊はうなずきだけだった。悠の父親である長瀬律は現在もまだ行方不明である。笹塚笙子をはじめとする彼に関わる人間からも搜索願いはだされている。連盟は彼の行方を追っていたが依然として不明である。「いる場所に心当たりは無いかな」と豊は聞いてみた。彼にしてみれば古い友人ともう一度、会えないかという思いだけだった。しかし悠もまた離れた彼と会いたい気持ちを持っていた。

「知りません」

長瀬律を最もよく知る少年は一切情報となるようなものを持っていなかった。長瀬律は放浪癖が強く悠を連れて世界各地を歩き回っていたのだ。まるで旅だった。一箇所に留まる事はなく彼は幼い悠を連れて放浪していた。

「あいつらしいな」と豊は笑った。そしてさやかと啓子が戻ってく

る。日差しは強く二人の額には汗が流れていた。

第二章十五話

戸谷峠を歩く。来るまでのように楽な道は無かった。坂道はなかったが今度現れたのは上下に揺さぶられるような石垣だった。度重なる地盤の変化で肌が削られた到底道などといえるものではない。当然の如く人はいない。四人はそんな場所をひたすらに進んでいくだけだ。

理由は啓子の話がきつかけである。連れて行きたい場所があると云って三人の先陣を切った。テントをはったキャンプ場からすでに三十分は経っている。

「このまま行くと神社だな」

豊が言った。そのとおりだった。彼らの進む先には連盟とも関わりのある神社に行き着くことになる。つまりバケグモもその位置よりも手前で仕留める必要がある。

「バケグモの進路はどうだったの？」

「俺達と一緒にさ」

回復したバケグモが進路を変えなかった場合、結局このルートで戦闘になる。もし神社を運良く横切ったとしてもそこからは急な斜面がはじまる。ふもとまで一直線に転がり落ちるだろう。

啓子の言う目的の場所まで豊かはバケグモとの戦いを説明しはじめる。

ここへやって来てからバケグモと戦闘になるまでは何時もと変わらなかったらしい。さやかとは別のルートで登ってきた後、テント等の簡易施設の組み立て。式神を使ってバケグモを搜索とさすが歴戦の奏者というべきだった。搜索開始から一時間とかからずに式神は見つけ出した。

出現地域の決まっている妖魔に関しては行動がだいたい把握できる。バケグモはひとしきり森を移動した後、今自分達のいる方角へ直進し始めた。目的はふもとの街だろう。これまでもそうだった。

だがこれまでいっぺんたりとも街へ踏み入れたことは無い。万が一バケグモが街に侵入したとしても魔術師が応援にくる。魔術師は即座に結界を張るだろう。最終手段はいつも用意されている。被害は最小限に押さえなければならぬのだ。

だからこそ今回の失敗は想定外だった。

バケグモとの戦闘は豊の力が圧倒していた。いかなる妖魔といえど彼は一人で問題ないだろう。だがそこに啓子が飛び出てきた。暴れるバケグモを目の前にして彼女は身を晒したのだ。彼女は戦える力を持っていない。それでも彼女は引かなかった。豊は彼女を守るためタイミングのはずれた一撃を与えた。おかげで瀕死の状態にまでもっていったがバケグモは退散していった。今ではその行方もわからない。キジの式神を放っているが情報はない。幸い街へとは向わなかったのが救いだった。

「で、なんで戦闘の邪魔をしたの？」

当然の疑問だった。それを説明するために啓子は三人を案内していると言った。他の三人には想像できないにかを彼女は知っていた。そして彼女はふもとの綾部市に実家をもっており小さい頃はこの山にもよく登って遊んだと話した。

「これです」

足場が平地と化し草原へと出た。背の高い木が縦横無尽に並ぶなか茂みが足元には広がっている。啓子が指差した場所には石を積み重ねられた小さな祠があった。小さな地蔵が覗いている。地蔵は木で作られた箱のような物の中で立っていた。足場は砂の色が違っていて人一人分の幅が合った。

四人は手を合わせて祠を見た。神社まであと数分で辿りつくほどに近かった。

「これが……どうしたの」

「ここ、昔はけっこう参拝に来る人がいたんです。神社の人達も知ってます。私もおばあちゃんと来てて……」

「俺も聞いた事があるけどそれはもう何年も前のことだ」

豊の言うとおりだった。すでに参拝する人はいないようで自然そのままにされている。

「そうです。でも……」

啓子は地蔵を見ている。豊は辺りを見回して「なるほど」と呟く。さきほどバケグモと戦っていた場所はここから一直線に行ったところにある。

「バケグモの進路方向がこっちへ向っていたから」

「なんとかしたかった……」

「それでも自分だけじゃない。豊さんに怪我をさせて」

「解ってます！ でもここは……この子は」

感情が湧き出したように声に現れる。

「この子って？」

ここには四人しかいない。啓子の言う子がどこにいるのかさやかは見ただが見えなかった。だが悠は祠を見て地蔵の傍に妙な色を感じとっていた。次第にあたりの音は風の音さえ消えていて色に全てが惹かれていた。やがては女の話も聴こえなくなりかわりに小さな女の子を見ていた。

身の丈三十センチ程度の子供。白い着物を羽織った黒髪の少女だった。三十センチの体の人間などいるはずもない。ましてやさつきまでそこには誰一人としていなかったのだ。三人はその女の子が見えていないのか話に夢中になっている。豊も加わっていたが悠はそんなことには無関心だった。

少女に手を伸ばす。明らかに人ではなかったが悠は畏れを抱かなかった。ただ触れたいと思う気持ちに従ったままだ。

「怖がらないで」

とても静かな声だった。呼びかけると少女は悠の傍までゆっくりとだが身を寄りだしてくる。その身体はまるで風のように軽い。黒髪がさらさらと揺れていて美しかった。悠の手と触れると少女は笑った。悠は妙な気分だった。なぜ自分が手を伸ばしたのか正体不明のこの子は何なのか、すべてにおいて思考が働いていなかった。

「悠君？」

豊の声に振り向くと少女の姿は消えてしまった。返事もせずに少女を捜したが時既に遅く遅く見失ってしまった。

「どうしたんだい？」

「いや……女の子がいて」

豊も辺りを見るがやはりそんな子がいるはずもなかった。啓子だけがその言葉に興味を抱き近寄った。

「あの子が見えるの？」

おそらく同じ少女の事を言っているんだとうなずいてみせる。彼女がバケグモの進行を変えたかった理由がこれかと悠はもう一度、姿の見えなくなった少女。彼女は護ろうとしたのだ。

「あの子はこの神様？」

「たぶん……そう」

土地神の姿は必ずしも見えるわけではない。必ずしも獣の姿ではない。とくにこのような小さな祠に宿る神は生まれ持つ力も小さく目に見えない。霊視能力を持つ者でも稀にしか見えないといわれている。

長瀬悠にとっても変わらない。少年の瞳に映るものはいつだって死に繋がるものだった。

「もう長い間、参拝客がいないのよ」

悠の隣りで膝を折ると啓子は祠を見た。祠の中へむかっている草を素手で掴むと引っこ抜いた。祠の周りには水をためる場所もなかった。端々に壊れた個所を見ることができ、管理している神社はおそらくこの祠を捨てたのだろう。

「この子ね、このまま時が経ったら自然に消滅しちゃう。でも嫌なの……ここは小さい頃からよく来てたし、おばあちゃんとの思い出の場所なの」

「信仰心が弱まってること」

うなずく啓子。感情が昂ぶって喉が震えていた。これ以上、話すると涙がこぼれそうだった。だからというわけではなかったが悠

は立ち上がった。

「そろそろ決断の時だな。バケグモもじっとしてないぞ」

背中に向って豊が言った。少年の背中にはギターケースが重く圧し掛かっている。

「そうね。式神は？」

「こつちへ来てると言ってる。今のところルートも変えてない」

悠の背中でギターが唸りを上げる。バケグモは進行ルートの変更はしないようだった。まだ時間はあるが向ってきている。その体躯の作り出す響きが足元にもやってくる。

「ここを守ろう」

何も難しいことはない。一直線にやってくるというのなら何でもできると思ったのだ。それに今回は手負いの敵でありこちらには奏者が二人いる。仕留められないはずはない。

「できるの悠君？」

「やるしかないでしょ」

悠の提案に豊はうなずくとさやかは何も言わなかった。彼女としては祠の神よりも目の前にいる奏者のほうが大事なのだ。奏者は連盟にとって貴重な存在であり決して死に到らしめてはならない。彼らの力なくしてこの関西という大きな大地を支える事は出来ない。

なによりそこにある祠はすでに誰の参拝もない。

ひとりぼっちの神様だったから。

第二章十六話

山の緑も紅もなぎ倒して蜘蛛は足を忙しく動かしている。木よりも太く鋭い爪をもった脚は山の肌を穿ちひたすらに前進する。背は高くキリンの首よりも長い。象のような身体を持った化物が戦車の如く山を蹂躪していく様は正に圧巻。

非戦闘要員のさやかと啓子は神社へと向った。神社には今も人がいる。バケグモが絶対に来ないということはない。万が一にも神社へその侵入を許せば被害は甚大となる。二人は避難を呼びかけるために祠から遠ざいた。

二人の奏者として最もいい状況はバケグモが進行方向を変える事だった。祠も神社もないほうへ走れば何も考えず戦える。しかし蜘蛛の進行ルートは最後まで変わらなかった。

悠を最後の砦として祠の前に残すと豊は一人駆け出した。駆けていくとすぐにスピードがのってくる。木の枝に飛び乗りまるで自然と一体となったように跳び跳ねる。キジの式神たちが差し掛かると交差した。

戦車の如く迫るバケグモが足元を揺らしていた。赤い複眼を見たとき身を宙へと解き放った。あらぶる妖魔に今、豊が飛び乗った。顔の上に飛び乗ると豊は腰に携えた撥を持つ。両足はがっしりと踏みつけどれほど揺れても落ちない自信がある。悠がギターを使って演奏するように豊は太鼓のように叩く。鍛えた腕に握られた撥が振り下ろされる。

真っ赤に燃える炎のような色をしていた。彼の全身から気迫が放たれ撥に宿る。

「破っ！」

鬼のような一撃だった。撥は身体を貫くほどの勢いで揺るがした。バケグモの身体はぐにやりと歪むほどに大地へと叩きつけられたのだ。バケグモの身体の奥、芯から音が反響する。まるで血液のよう

に全身を駆け巡るのだ。そして息をするように噴出す。バケグモは振り払おうと必死にもがいた。足をばたつかせ右に左にと動いてみせる。木に身体をぶつけ岩にその身を削った。その衝撃で落とそうとした。だが豊は必死に堪えて前を見ていた。

豊の撥はリズムも刻んでいく。右、左、右と暴れようがもがこうが止めなかった。豊にとつてバケグモの動きはなんてことは無い。彼は上下左右に揺れる神輿の上でも笑顔で太鼓を叩きつけられる。そういう男だった。

バケグモは泡を噴出す。豊一人で相手をした時すでに体力のほとんどを失っていたのだ。だがすでに正気を失ってもいた。息を切らせてもがいていた。一直線に爆進する。その速さはとまらなかった。すでに祠は目と鼻の先にある。

「できれば先に仕留めたかったが無理か」

リズムは変わらなかった。豊は必殺の一撃を打てなかったのだ。そのためには一度バケグモを止める必要があった。傷付きもう後一步のまま時は流れた。バケグモの姿が太陽の下に晒されたのだ。諦めて豊は木に飛び移る。そして先を見て叫んだ。

「悠君、行ったぞ」

祠の前、草原に蜘蛛が姿を現した瞬間、悠の手が動く。指は弦に触れていた。豊の声を皮切りにギターが鳴る。豊がバケグモと格闘していた間に悠は万全の体勢だった。ギターは一度の撓りで激動へと変わる。

前方に立ち塞がる少年に蜘蛛は赤い目を光らせる。泡を吹き飛ばし吼える。草原の緑を泡は侵食し溶かしてしまった。悠は威嚇から一切逸らさず相打つ。

八本の脚は鎌のような鋭さで大地を削り突き刺す。悠は蜘蛛よりも空を目指して跳ぶ。義足の力は人類を凌駕している。たちまち少年は風に乗る空を駆ける。さっきまで豊が乗っていた身体の上に乗った。ギターは光を放ち木とバケグモをつなげる。八本の足が縛られていく。

「豊さん！」

「おう！」

身動きの取れなくなったバケグモ。二人はまたもや場所を交代した。今度は豊が乗り悠が地上に降りる。祠の前に立ちギターを掻き鳴らす。一步も引き下がれない。

豊はその音にあわせて撥を叩く。二つの音が溶け合っていく。悠の荒く怒りを含んだような激しい音を豊が宿めリズムを取る。激動する音の唸りを波を作り上げていく。

「よし！」

演奏に全てが注がれていく。反響していた互いの音が一つの曲となっていく。互いのリズムと音に鼓動が早くなっていく。共鳴に近かった。悠が作り出す光と豊の作り出す炎が混ざる。まさに一つの音になった瞬間だった。苦しみもがくバケグモは口から泡を吹き瞳の色を濁らせていく。勝利は近かった。バケグモの身体はすでに崩壊直前で足には綻びが見え始める。

あと僅かだった。演奏に集中する二人は一心不乱に音を奏でることに夢中だった。楽しかったのだ。奏者としての本懐でもあった。他者の音と共鳴し一つの音楽を奏でる。彼らにとってそれ以上のことはない。

だから失敗した。

バケグモは足の綻びによって縛っていた光から解放された。勢いはとまらない。ダムが決壊にも似た勢いが悠へと向って襲い掛かる。それでも目を逸らさなかった。近づく少年に豊は過去、一緒に演奏した友人を思い出す。一心不乱にギターを掻き鳴らす少年。彼は髪の色も瞳の色も背の高さも違ったがまぎれもなく長瀬律の息子だ。バケグモの身体が眼前で制止する。

その口に携えた強靱な牙が悠を喰らうまで距離はまだあった。間に入ったのは氷の鎖。あたり一面に広がった雪のような白い結晶。空の青さに輝いて流星のように彼女は現れた。

「弾きつづけて」

彼女は光りの輪を必要としない。あるべき姿が全てである。

「わかってるよ、おかえり」

「ただいま」

バケグモは再び身体を繋がれた。今度は光ではなく氷。氷の鎖は木とバケグモを繋ぎ合わせている。身体の内ほころびも氷で繋がれた。一切身動きできずバケグモはただ身を震わすだけになった。

「悠君！ ラストだ、いくぞ！」

全力全快だった。二人の演奏は空間を凝縮していく。バケグモの内外からその魂の繋がりを崩壊していく。緑の胞子が空に舞い上がる。妖魔の最後はいつも変わらず同じだ。身体の中に溜まった万という魂が一つずつに別れていく。

二人の演奏は最後の一鳴りを激しく響かせた。天にまで昇りそうな音色だった。

叫びと共にバケグモは飛散した。その肉片が大地に溶け込み存在を消していく。緑の胞子が天へ向うように解き放たれた。

バケグモを形成していた魂が辺りを染める。一面、緑の粒子が浮き上がり悠の作った音の光が照らしている。時雨の姿はまるでおとぎの国にいるように見えた。それほどまでに幻想的だった。

「どこまで行ってたの？」

「兵庫の北のほうだった。海も見えてきたわ」

日本海は遠い。悠と別れたのは昼頃、今、空は赤く染まっている。約五時間ばかりの間に時雨は身体一つで山を越えたのだ。時雨は挨拶代わりに頬にキスをした。くすぐったく猫のように悠は思いつつも二人に戻った。豊はそんな二人をやれやれといった呆れ顔で見ている。

「これで一件落着ね」

「さやかさん、いたんだ？」

祠の後ろから啓子と共にやってくる。啓子はまた祠を見た。

「大丈夫、無傷だよ」

「ありがとう」

二人の奏者は楽器をしまいだした。すでにバケグモの姿はなく荒らされた山の緑だけが無残に残っている。だが人の介入などなくしてその緑は元に戻るだろう。なにもかもこれまでどおりだ。

「あら時雨さんも一緒なのね」

「さつき帰ってきたわ」

抱きつく時雨。誰にも悠を渡さないという彼女の現われなのか。

「これで浄化も終了だ。祠も守ったしな。悠君、さつき見たっていう少女は見えるかい？」

祠に近づいてみると緑の胞子にまざって少女の姿が見えた。小さな身体で頭を下げると悠は微笑んだ。

「見えるよ。ありがとುತ್ತてさ」

「そうか」

「……よかった」

啓子はほっとし胸のつかえがとれたようだった。かわりにさやかはこれからを考えていた。またバケグモはこの山に現臨する。同じような事になるのは目に見えている。その度にこの場所を護るにはどうすればいいか、と。

「さつさとテントを片付けにいこう。今なら夜までに終わる」
しばらく呆然としていたが四人は豊に諭されて歩き出した。

第二章十七話

テントの回収はすぐに終わった。豊と啓子の乗ってきた車まではそれほど距離は無い。歩いて十分もない。機材を持っていても大差は無かった。夕暮れの中、木によつて光を遮られたが転ぶような事はなかった。順調に撤収作業は終わった。互いの車に乗り込むため一度別れ公道へと移動した。

落ち着いて話のできる場所を豊が求めたため市内に入る手前にある空き地に集合した。空き地には自販機があり五人分のジューズをさやかが買っている。その後ろには啓子が立っており今度は奏者二人が話している姿を彼女らが観ていた。

「さっきの演奏よかった」

「僕もです。他の奏者と一緒に演奏するのは初めてだったから上手く出来たか……」

「そんなことないさ。それに律と一緒に演奏してたんだろ？」

悠はうなずく。傍では時雨が車に背を預けて立っている。

「君は律と似ている」

「僕が」と首を傾げる。これまで律と似ているといったのは笙子だけだった。というより長瀬律を知っている人物と話したこともほとんどない。彼が日本でという人物だったのか少年にはわからなかった。そして自分が似ていると思ったことも無かった。

「そうだよ。あいつも刺激的な演奏をしていた。今日の君みたいだったよ。敵を目の前にしても臆病にならなかった。それとも時雨さんが来るって知ってたのかな？」

「時雨が戻ってきたのは偶然です。僕は知らなかった」

時雨は口元をあげていた。彼女の意図するところは不明だったが豊は気にしなかった。それは彼女に対する悠の信頼あつてのものだった。

「無茶するね」

「それは豊さんもでしょ」

暴れるバケグモに飛び乗るなど普通の身体では考えられない。悠のように特殊な義足でもあれば別だが彼の身体は人間のものだった。振り落されれば無事ではすまない。お互いに無謀ともとれる行動に笑った。

「霊視能力は何時から？」

悠は答えに詰まった。霊視能力は殆ど無い。見えるかどうかはその時々により今回のように祠にいた少女の姿を見たことはなかった。戦闘の最中に見ることは会っても普段は感じることもくらいしかできなかったのだ。だからなにか影響されたことはと巡らせた。

「……荒神様」

「なんだって？」

悠の声は小さかった。確信は無かった。ただ気になったのは荒神様との一件だった。

「昨日、荒神様に頭を撫でられた。その時、なにか……」

『少し力を引き出してやろう。お前には役に立つだろう』あの言葉がよぎった。

「その力、くれぐれも注意したほうがいいな」

途端に表情が険しくなった。

「なぜです？」

「見えすぎるとよくないってこと」

笙子も同じ事を言っていた、と思い出す。日本へやってきたときからずっとだ。悠が本来見えない者を見たときあまりいい顔をしなかった。悠にはその意味が理解できなかった。見ないほうがいいといわれても見えてしまうのだからどうしようもない。目蓋を閉じても変わらない。

「今日はいいい経験になったよ。また一緒に仕事ができればいいね」

「……はい」

二人は握手をしてそれぞれの車へ乗った。二名の女性ドライバーは同じように、どうだったか聴いた。すると奏者は「よかったよ」

と言つて渡された缶ジュースの蓋を開けた。

ほんのりと甘酸っぱい柑橘類の香りが車内に広がった。

車はそれぞれ別の方向へと向つて走り出す。すでに辺りは暗くなりつつあった。赤と黒にとけていく。街に光が灯りだすと悠と時雨は互いの手をとつて眠りについた。

第三章一話

昼下がりの穏やかな誰もが耳を塞ぐ怒濤が鳴響いた。京都、関西魔術連盟の本部。音の出所は離れた道場からだった。木の枝に止まっていた小鳥達が慌てて飛び出す。連盟本部は巨大な神社を使用して作られたまるで神殿のようなもの。建物の中を少しでも歩けば紅白の巫女装束に身を包んだ事務員達に行き当たる。衝撃を轟かせた道場は本殿というべき神社ではなく職員の寮でもない場所にある。神社の西側に道場が存在する。本殿よりも後に作られた木造の屋敷は五十メートル弱の存在を四方に伸ばしている。今、道場の中は誰も見えなくなるように雨戸が閉められていた。外からでは中は見えない。まるで大きな箱だった。

そしてまたもう一度、怒濤の音が広がった。

「一本！」

続いて壁の向こう側より男の声が響く。外からでは籠った音だった。音も同じ、さきほどの衝撃よりも小さく壁に耳を当てなければその声が聴こえない程度だった。それほどまでにさきの衝撃は大地を通じて揺るがしたのだ。

音の中心は道場の中。壁に囲まれた中であつた。足場は一面に敷かれた畳みでいっぱいになり襖と雨戸によつて遮られる。暗くなつた道場内を照らしているのは天井に張り巡らされたLEDの室内電灯だった。電灯は道場の隅々まで照らしていた。

東側の壁に沿って正座する男、西側には女と別れていた。全員が白い胴着に体を包み正座でいた。全員合わせると三十人、屋敷の大きさに比べるとまだ許容範囲内である。正座でいる男女の視線は交差していた。彼らの中心にいる男女三人……いや、一人の女に向けられていた。六十もの人間の瞳が黒髪に惹きつけられていた。

畳みの上、屋敷の中央にいるのは三人。ひとり屈していた。男だった。角刈りで筋肉もオフィスワークでは到底たどり着けない現

役の大きさをしている。だというのに仰向けに倒れLEDの光を見つめていた。彼には自分がどうして立っていないかすら理解できていない。

「早く立て！」

視線を集めたのは白髪まじりの男だった。声を荒げていた。一人だけ白い上着と黒い袴を履いている。白い髭を生やしていた。歳もひとりだけ取っており集合している他の六十二名よりも上だった。だが胴着の上からでも彼の身体が劣っているとは思えない。脂肪は少なく整った筋肉が服の下からこみ上げてきている。

倒れていた男が目をぱちぱちとしながら立ち上がる。誰も手を貸さなかった。そして黒髪の女と再び目を合わせる。男の視線から下に黒い瞳はあった。二人が相手の目を見るには身長に差が多く女は顎を上げていた。男の背は正座している男達よりも拳一つあった。女との差は拳二つ分に相当した。

場にいた全ての瞳が見つめていた黒髪の女は余計な肉がついていなかった。白い胴着の下にはさらしが巻かれラインを隠している。女達が憧れの眼差しで見つめる黒髪は後頭部で括られて人工電気に照らされる。瑞々しい生命の輝きを放ち男達的情欲を掻き立てていた。

頭を下げた後、二人は正座する列へと向って進むため、くると回った。列の最後尾に並び同じように座ると隣りからタオルを受け取った。男側はどこか気の毒だったなという表情をしていたが女側はまるで秋の紅葉のように火照っていた。

「これにより本日の演習は終わりとする。全員立て！」

総勢六十二人が立ち上がる。中央一人が「礼！」と叫ぶように言った。「ありがとうございます！」屋敷に響き渡る声だった。しんと静まり中央の一人が屋敷を出る。彼は袴を引きずりながら後にした。すると静寂は消え各々の声がわんさかと飛び交うようになった。騒々しくなっていくなかでも黒髪の女だけは冷静であり静寂を保っていた。何一つ思うことのないような顔で荷物を持って誰より

も先に屋敷を出た。

縁側が彼女の進む道だった。秋風が胴着のなかへ沈み込み微かな汗に触れていく。彼女は身をすり抜ける風を切って進んだ。背は正しく疲れた表情さえない。ロボットのようには正確だった。

やがて屋敷から抜け出した別棟の建物へとやってきた。連盟本部は山の広大な土地にあり職員全員が集団生活を行なうに必要な全てが揃っている。彼女の前に現れたのは女性用シャワールームと書かれた表紙である。なかには真白なコンクリートとタイルで作られている。先程までいた屋敷とは空間だけではなく国さえ違って見えるほどである。脱衣所で服を脱ぎさらしをとる。窮屈にしていた乳房はほどよくふくらみ主張した。髪を纏めていたゴムも外すと首を隠す髪が垂れた。その髪の手を触って「伸びたな」と呟いた。

シャワールームは中央に三人分の幅を設け両隣に個室がある。といつても板のような壁で膝から上、首から上を隠すものだった。彼女は適当に個室へと入りシャワーをだした。個室の中には丁度、顔の位置にくるように鏡がかけられている。シャワーの温度を調節しながら見た。

自分の顔を見て頭の中に思いを巡らせる。彼女は今、ひとつの問題に頭を悩ませていた。

「素敵だったわー、慧様。凜々しくてお強よくて」

「そうですね」

次々にやってくる女達。誰もいないと思っていたのか声の大きさは彼女にも届いていた。慧様という言葉に自分の名前を思い出す。自分を慕う彼女達の声に彼女は照れくさいながらも振り向いた。入ってきた女性達と目が合う。彼女らは口々にしていた女性と目が合うと頭を下げて頬を染めた。凜々しく強いという彼女のイメージは同性からも憧れの対象となっていた。

「し、失礼しました、織戸様」

慧の隣りの個室へ入るなりまた頭を下げた。呼び方も名前から苗字に代わる。慧自身はそんなことに気を回すこともなかった。なぜ

なら自分が考えたところで何も変わらないのだ。

織戸家に産まれたことこそが原因である。

「今日の稽古素晴らしかったですわ」

「それはどうも」

明らかに自分よりも年上の女性だった。以前に挨拶を交わしたこともあったが名前は覚えていない。

シャワーの温度が適切になり身体を濡らす。

「あんな大きな相手を軽々と……さすが織戸様ですわ」

さきの手試合のことだった。慧の相手は集まった中では一番大きい体格だった。連盟本部での演習は柔道を基本にほぼ何でもありの手試合と決まっている。慧は相手の力を利用して自分より大きかった相手を転ばせただけに過ぎない。なのに彼女は褒めるばかりであった。慧にとつてはなにも褒められるべき事ではなかった。

「あつ」と一人の女が突然言った。なにかを思い出したのだ。

「織戸様、知っていますか？」

「なにを？」

「織戸様とよく組んでいらつしやる長瀬悠様が認定試験を受けるようですわよ」

慧は表情こそ変えなかったが絶句した。シャワーから溢れるお湯に頭天边から被り表情を消す。このままだと口元がにやけてしまふと感じていた。彼女の想いの先にいたのは長瀬悠だったからだ。彼女の全ては長瀬悠への思いでいっぱいだった。

「知りませんでしたか？」

「ああ、初耳だ」

「私てつきり伝わっているものかと……」

「気にするな、どうせ早いか遅いかかわるだけだ」

まるで男のような言葉遣いだったがそれが彼女の魅力を倍增させる。同じ女性だというのに彼女らは慧から男のような雰囲気を感じ動機が増していた。しかし同時に慧の身体を目にして女としても意識する。小ぶりな乳房とくびれは同性であれ魅了する。

「やっぱり一緒に行くんですか？」

「いつなんだ、試験は」

「確か……十日でしたわ」

その問いには首を振った。慧のスケジュールは連日赤で×印がついていた。なくても当然×印を刻んだらう。長瀬悠の隣には時雨がいる。慧は時雨が行動を開始してからというもの近づく事すら少なくなっていた。

「その日は用事がある。無理だな」

「それは残念ですわね」

なにが残念なのか。長瀬悠の認定試験に関わりがあるなら自分ではない。かの少年と関係は殆どといってもいいほど無い。単に自分は笹塚笙子の協力者であり長瀬悠とは個人的関係はないと自負していた。だからこそ胸のうちにある感情も消せなくなってしまう。

「先に出る」

シャワーの温水は身体の汚れは落とせても感情の汚れは落とせない。鏡に映る自分の顔はひどく思えた。たとえどんなに周りから褒められようとも年端もいかぬ少年に向ける自分の心はひどく汚く思ってしまったのだ。

彼女らに別れを繼げて一人先に出る。すると胴着を脱いでいた女性陣と脱衣所で目が合った。彼女らは頬を赤らめて頭を下げた。慧はそんな彼女たちに目もくれず早々と服を着て出て行ってしまった。その行動に彼女らは何一つ嫌味を抱く事は無かった。そのぶしつけな行動までもが彼女らにとっては織戸慧の魅力なのだ。

荷物を纏めて長い階段を降りる。まるで底なし沼のように先は見えなかった。まだ昼だというのに先は暗く両側に立つ木に光は遮られていた。だからというわけではなかったが慧の足取りはふらつき左右に揺られる振り子のようなだった。

小鳥の囀りと肌寒い風を抜けるとまったいらの駐車場が目に入る。黒塗りのBMWによって行く。ここへ来るまで乗っていた車だ。彼女の父親が所有する物である。織戸家はここ関西魔術連盟のなかで

も古参であり続ける名家。慧は仕事などしなくとも孫の代まで養えるだけの資産を持っていた。

「やっと来おったか」

車に乗り込むと革張りのシートに身をゆだねる。運転席にはお抱えの運転手。助手席には演習の時、中央で叫んでいた男が座っている。彼こそが慧の父親、織戸源治である。慧と五十以上離れておりもうすぐ八十となる。父親というよりは祖父である。彼は自分より四十も離れた女と結婚した。慧が生まれて二十二年、母親はすでに亡くなっていた。

「遅くなりました」

源治は目もくれなかった。「おい」と言つて車を発進させる。それから無言だった。さきほどの手試合についても何も言わなかった。それほどの物だったのだ。彼にとつては……。

だが家に着くほんの少し前になると彼はようやく袖から何かを取り出そうとした。窓から景色を見ていた慧はそのことに気付かなかった。運転手の目だけが忙しく動いていたのだ。

「これを」

慧に渡したのは白い封筒。目をやると印字は日本の物ではなかった。切手も字もすべて国外からの贈り物である。慧は蛇や釣り針が重なったような文字を読んだ。

『ジュリオ・ドゥーエ』

その名前が書かれていた。慧はナイフも使わず指先で機用を開いた。封筒の中には同じ白い手触りのよい紙が入っており黒のペンで書いた字がびつしりと並んでいた。慧は書き出しから気に食わなかった。長い前書きには好きだという言葉が乱立し自分のよさを誇張していた。さつさと手紙の内容を知るために読み飛ばした。

「この度、君になんとしてでも見せたい物が手に入った。十月二十八日、そちらの国に行く許可を取ったので会おう。神戸の喫茶店を貸しきっている。大変だったが君のためだ。必ず来るように。お友達も誘つていいよ」

こんな感じである。手紙を読み終えると源治はまるで内容を知っていたかのように「行けよ」と命令した。ジュリオ・ドゥーエと出逢ったのは随分前のこと。まだ長瀬悠と出会う前のこと、源治についてイタリアへと赴いた時の事だった。招待されたのは関西魔術連盟の代表としてのこと。源治は慧を連れて行ったのだ。着いたのは誕生パーティー、その主賓がジュリオ・ドゥーエであった。

彼は流れ作業のような挨拶を交わして進むうちに一人の女を目に入れた。黒い髪を揺らして着物に身を包んだ慧だった。ジュリオは一目で慧を気に入りその場で交際を申し込んだ。結果は玉砕。慧にその気はなかったし彼では役不足だった。

魔術師としての能力は中の下で先祖から受け継いだ名前だけが彼の良さだった。そして悪さでもあった。やたらに自分のドゥーエという名前をひけらかす。名の無い魔術師は頭を下げていた。慧は彼を好きになれなかった。

「解ってる」

ジュリオとはこれまで何度か茶をしているが面白かった事などなかった。そのことに彼も気付いているはずだったが諦める様子は無い。というのも彼は慧がどれほど嫌がつていようと自分が呼べば必ず来ると知っているからであった。これまで慧は彼の誘いを断つた事が無いのだ。

全ては源治にあった。彼はもう七十を超える。間違いなく死は迫っている。現在、織戸家は源治と慧の二人しかない。後継ぎはいないのだ。そこにジュリオ・ドゥーエは現れた。彼と結婚すれば織戸家としても関西魔術連盟としてもそれはとても素晴らしいことなのだ。諸外国との繋がりは組織の強さにもなる。

だが慧の心はかの少年のもとへ向っている。

変わりはしない心の行方をかき消すように手紙を封筒にしまった。ほどなくして実家に着くと慧は部屋に戻った。木製の机に封筒を捨てるように置いた。変わりに携帯電話を手にとってメモリーを捜した。笹塚笙子の名前に合わせて通話ボタンを押した。二度コール

が鳴ると彼女は出た。

「どうしたの？」

優しい声が耳に届く。

「今日は時間あるか？」

「んつとね……ええ、あるわよ」

「じゃあ会おう、こっちから行く」

電話を切って身支度にかかった。彼女と会うのも久しぶりだった。最近、慧は実戦に参加していなかった。それはかの少年が成長するためであり彼女のためでもあった。バイクの鍵を手にすると笙子の顔を思い浮かべて部屋を出た。

第三章二話

織戸家の門が開いたのは夕暮れ間近となったときの事。慧は茶菓子と茶を腹の中に収めるとクローゼットの中からライダースーツを取り出した。スーツは首から下を覆うようになっている。手足を通し胸元までジップを上げると小さいながらも形のいい胸のラインが浮き上がる。全身どこかもボディラインを見せつけるように浮かばせると倉庫へと向かった。購入した頃から随分と経つライダースーツはすでに身体に合わなくなっていた。今度、新しいのを買いかと今回は諦めて鍵を握った。倉庫につくと夏に父親よりプレゼントされたBMWが暗い中で今か今かと待ちわびていた。黒いボディは鏡のように光を反射する。

慧はエンジンをかけるなり勢いよく吹かして紅く染まる京都の街を全速力で駆け出した。

風は吹いていなかった。慧が進むに連れて身体を突き破ろうとする空気の壁は冷たく感じていた。冬は近い、もうじきこの辺りも雪が降るだろうと考える。慧は去年の冬を思い返す。

関西魔術連盟の冬は大事な儀式のつながりを持って始まり終わる。一年の終わりである大晦日より一週間前から儀式は始まる。普段：日常のなかで浄化された妖魔や魔力が大々的にもう一度埋葬されるのだ。連盟本部で繰り広げられるその儀式には関西各地の奏者が集まり一斉に演奏を開始する。一年に一度のコンサートのように。慧は小さな頃より奏者達の演奏を眼前にしてきた。

今年も悠もいる。

気になっていたのは少年の事だけだった。連盟本部でもかの少年の話はよく耳にする。それ以上に慧の頭の中にはギターを手入れする悠の姿がいつでも再生できた。

大阪を抜け神戸に入る。震災の名残はちらほらと残っていたが大抵は復興され以前よりも美しく洗練された街の風景を作り出してい

た。バイクは動きを止めずにひたすら走る。空は黒く太陽は姿を消していた。代りにビルと外灯の作り出す電気が溢れ出していた。だからこそ空の色は黒一色だった。星など見えない暗闇のよう。慧の周囲には自然のものは存在せず人工物がやって来ては去っていった。ポートルライナーを抜け星の広場の傍にやってくると胸の中で携帯電話が振動した。路肩に停めて取り出すとメールだった。送り主は笹塚笙子。ディスプレイに映った彼女のメールには南公園駅で待っていると書かれていた。駅まで三分とかからない、慧は再び発進して急いだ。

メールを作っただすよりも早かっただろう。駅に着くとコンクリートから離れた通りの目前で立つ女を目に入れた。バイクの駆動音で彼女も慧の姿を見つけた。迫ってくる慧に向って手を振る。走る車から外れてバイクを止めると被っていたヘルメットを脱ぐ。長い時間で汗をかいていたため夜風に当たってよく冷える。

「お疲れ、仕事は？」

「終わったわよ。バイク、停めてきなさい」

「わかった」と言って駅の駐車場へと向っていく。薄暗い駐車場には車から漂う排ガスと生ゴミのような匂いが充満していた。慧はまだマシな場所はないかと捜したがそんな場所はなかった。それでも駐車量の少ない辺りを選んで停めた。均等に配置された電球がちかちかと最後の一絞りまで光を放っていた。ヘルメットをしまいこむと足早に駐車場を出た。すると笙子が入り口に立っていて慧を待っていた。

「毎日大変だな。新人研修だったけ？」

「そうよ。研修っていつでも何もする事無いのよ。私の時も同じだったけど先輩はただ新人の行動を見て報告するだけ」

「そんなもんか」

「そんなもんよ」と返す笙子は上から下まできっちりとしたスーツを着ていた。だが足だけは違った運動靴のようなスニーカーを履いていて昼間の辛さを物語っているようだった。

「それにしてもどうしたの突然」

「ちよつと話したい事があつてさ……悠の事聞いたぜ」

「誰から？」

「誰でもないさ。本部の稽古に行ったら巫女達が言つてた」

「あの子達つたら」

二人して並んで歩く。信号の色が赤のため足を止める。向いには珈琲博物館の看板が見えた。車は全然というほどに走っていないかった。信号が赤でもさして問題はなかったが笙子が足の前に出さなかったため慧は彼女に合わせていた。

「で、話したいことつてなに？」

「中に入つたら言うよ」

彼女らの後ろに何人が並んでいた。さらに後方の駅からは電車のけたたましい走行音が響き足裏にも届いている。信号が変わると誰よりも早く歩き出し渡りきった。博物館の看板よりした黒く重厚な扉を開くと呼び鈴役の鐘が来店を告げた。すぐさま白髪の男とポニテールの女性店員がカウンター越しに「いらつしやい」と言つてどうぞと案内する。店内はクリーム色の壁と、うんと古い板チョコレートを敷き詰めたような黒い床を二人は歩く。カウンターはクッキーのように暖かみのある木で緑が添えられていた。白髪の男はこの店の店長で笙子はよく利用していた。慧も彼女と一緒にいるときだけはやってきては厄介になっている。

「やあ笙子ちゃん。おっ今日は織戸家のお嬢様も一緒かい」

「ええ」

二人が椅子に座ると女性店員はコップに氷を二つ入れ水に浸した。店員から水を配られると笙子は笑顔で「ありがと」と言う。反面、慧は無表情だった。愛想のないところは悠とそっくりだと笙子はいつも思っていた。

「今日はもう終わり？」

「ラストオーダーは過ぎてるよ。笙子ちゃんから連絡がなかったらもう店じまいしてるよ」

店長は目を二人の背後へと向けた。笙子はその先に目をやると時計がある。壁にかかった台形の大きな木製時計。針は七時を指していた。店の営業時間は六時、一時間も過ぎていた。

「ごめんなさいね。無理言っちゃって」

「いいんだよ。笙子ちゃんはお得意様だからね。もうメシは食べたのかい？」

「まだよ。なにか作ってくださいるかしら」

「まかせなさい」

笑顔で作られる皺が心を暖める。とても自分には真似は出来ないとつくづく慧は思う。彼女は仕事やプライベートで立ち寄った店で仲良くなる事が多い。ただ食べて立ち去る慧は羨ましくその姿を見るだけだった。

店員が扉に向って出るとクローズに変更した。シャッターを閉めると外からは見えなくなり四人だけの空間となった。次に店員はカウンターに戻ると壁にそって並べられた棚へと手を伸ばした。グラスが並ぶ棚の隣には銀色のCDプレイヤーがある。電源をつけると店内にはピアノの音が鳴り始めた。

ピアノの曲が充分に二人の息を整えた辺りで店長はワイングラスのように足の高いグラスを用意した。店長はグラスへとアイス珈琲を注ぐと洋皿に載せて差し出す。単なる珈琲だが一つの料理として提供する。この店の看板メニューである。それと人差し指程度の高さを下ガラスのコップにはガムシロップ。笙子が一人の時には出てこないものだった。慧はガラスコップを自分のグラスに注いだ。

店長達はカウンターから繋がる厨房へと姿を消す。カウンターにはメインであるコーヒー用の設備は整っているがそれ以外は奥にある。とはいえその厨房へ向う時は笙子のような特別な客が来た時とまかないを作る時だけである。

「話したいことってなにかしら」

二人きりになると話を切り出した。慧はジャケットから例の手紙を取り出して見せた。笙子は送り主の名前を見て頭を押さえた。

「ジュリオ……ドゥーエか」

彼女の脳裏によぎったのは学院時代のこと。あの親の名前を散々言いふらしさも自分自身の功績のように自慢する。あの嫌味っらしい男と口を曲げた。

「知ってるのか？」

「同級生よ。能力は低レベルだけどね、家が大きいかから皆何も言えなかったわ」

「オレみたいだな」

大きな家に能力が伴わないという点では確かに同じだった。彼女もまた連盟では重大な一点を担っている。なのに慧は魔術師でもなんでもない一般人である。能力の低さ以前の問題だった。

「慧とは違うわよ。素質は残念がらなかったけど戦闘力は間違いないわ」

「ありがと」

肩を抱く。二人はまるで親しい姉妹のように接してきた。二人して手紙を見る。

「行くの？」

「行くしかないさ、親父だってそう思ってる。着いて来てくれないか」

言っただけで水を飲んだ。「無理だったらいい。あの男は適当に……」と自分から下げないように続けた。

「慧が来てって言うなら行くわ」

慧にとつて驚きだった。一人で行ってきなさいよと背中を押してくれるだけでよかった。笙子にとって悠の認定試験はひとつの節目になる。試験に合格すれば魔術師として一歩踏み出せる。今日のように入団研修につき合わせることもなくなる。

「見に行かなくていいのかよ」

「悠が落ちるって思ってる？」

「そんなことはない。あいつは……やるさ」

「そうよ。悠はあんな試験で落ちるはずない」

二人して笑う。長瀬悠という少年に対する思いと信頼は確かなものを持っている。そして少年はそれに答えてきた。すべてこれまで通り。

「なにより時雨がいるもの」

その名前を口にするると慧の顔がまた曇った。いつもは無表情で男のように凛々しくある彼女もその名前一つで気分は変わった。悩みの種は尽きない。笙子からすれば羨ましくてし方がなかった。この数年、彼の存在が消えてからそういう気持ちを感じていないからだ。

「悠と彼女の関係は慧が気にするようなものじゃないわよ。動物と飼い主みたいなもの」

「前にも聞いたよ」

もしグラスに注がれたのがワインなら危険だと止めるほど勢いよく飲み干した。たった一口でグラスの中が空になり彼女は蒸せた。ガムシロップの甘さで消せない苦味が喉にひっかかった。非常に甘口な彼女らしい。笙子は舌を潤すようにグラスに口づけした。

店長がカウンターに戻ってくる。二人の会話は厨房のほうでも聴こえていた。だが店長は何も言わずに白い洋皿に盛られたナポリタンを出した。赤いケチャップソースの絡まったパスタの上にバジルが添えられている。緑の一角が目をつけた。

「あらおいしそう。食べましょう」

香りを愉しむとフォークを持ち皿の上でぐるりと回転。パスタは湯気を立てて口の中に入っていく。珈琲の苦味など一瞬で消えていく顎にかかる歯応えもほどよく喉を通る瞬間もスムーズだった。「おいしい」と言うと店長は皺を作ってにっこりと微笑んだ。彼は何も言う事はなかった。ナポリタンを出したのはこれが初めてでもない。喫茶店のメニューといえばとナポリタンを前にも出した。今でこそ珈琲専門とうたっているこの店だが店長は以前喫茶店を営んでいた。笙子はその頃からの常連である。だから今でもこうやって通う。

会話は消えナポリタンを食べる事で時間が過ぎていった。店長は店員を仕事から解放させて家に帰らせた。二人に新しいカップを用意して珈琲を注ぐ。今度はアイスではなくホット。食後にはぴったり合う。慧にはシュガースティックを二本用意した。同じようにミルクも二つ。まるで子供用だった。最後に自分用にカップを取り出して注ぐとカウンターと厨房の真ん中に椅子を用意して座った。白い布を片手にもうひとつの手でグラスを取る。彼は置物のようになった。機械のようにグラスを磨き上げていた。

「時雨のことどうするつもりなんだ……」

ほんの少し声が震えていた。これまで慧は彼女を避けていた。時雨が好意を寄せているのは悠一人であり彼に近づこうとする者には敵意を向ける。慧もまたその一人だった。だから笹塚笙子にやってくる仕事は慧と悠で別けられていた。

「どうもしない。連盟本部も今のところは放置していて構わないと言っているわ」

「利用するのか」

「当然でしょ。どういう理由で彼が私に預けたのか知らないけれど悠から引き離すのは無理なもの」

「その彼……まだ生きている？」

「かもね。遺体はないって話しょ。とんだ失敗よ、私の」

「笙子だけじゃない。オレ達のミスだ」

「そう言ってくれる仲間がいて私は幸せよ」

時雨と出逢ったのは長瀬悠が合流して初めての仕事だった。笙子と慧にとっては手負いの獣を狩るにも等しいものだった。だから取り返しのつかない事態を招いた。

取られたものは長瀬悠の足である。

得たものは時雨である。

逃した者は白河夾という事件の犯人。魔術師は姿を消して早、半年。連盟は彼の行方を追っている。笹塚笙子に至っても同じである。仕事の合間をぬっては白河夾に関する情報を探っていた。

「まだ見つからないのね」

姿を消した魔術師を見つけることは不可能に近い。日本にいるかどうかも怪しい存在に人の手を避けるほど連盟は人材を持っていけない。

「あの人も……」

笙子が漏らした。単なる愚痴にも似た言葉だった。すぐに珈琲で濁した。

「そっちの情報もないな。本部でも変わらないよ。長瀬律は今も行方不明だ」

「慧は律に会った事あるのよね」

「会ったじゃなくて見たことはな。連盟本部で演奏してるところをちよつとだけだ」

「どうだった？」

「凄かったよ」と答えるだけだった。言葉にするとそれ以外に思い浮かばない。

まだ少女だった慧の瞳にも長瀬律の姿は大きく映っていた。日本人離れた体格とルックス。そして技能、他の奏者とは違った男だった。彼の弾くギターは黄金の輝きを放ちその音は万物全てを虜にしていた。

長瀬悠の父親となった男は今、世界の何所にいるのか。

心を虜にさせられたのは笙子も同じだ。彼の存在に心を奪われ今も思いつづけている。だからこそ悠の身元引受人として承諾した。必ず戻ってくると彼女に告げたが今のところ現れる予兆はない。

「お互い面倒な男を相手にしてるわね」

「そつだな、確かに面倒だ」

「店長、私たち帰るわ」

席を立つと店長も立ち上がる。磨いていたグラスはどれも完璧なまでに光を反射し店内の琥珀色を映していた。店長はレジで勘定を済ませると二人が去っていくのを見送った。

夜の風は冷たい。神戸の街は潮の香りを運んでくる風でいっぱい

だった。

「これからどうするんだ？」

「私はイザナギ本部に戻るわ。明日もまた新人研修に付き合わないやいけないの」

「そうか」

「慧、どうせなら店を見てきたら。ここからなら帰り道にあるわよ」「それもそうだな。いい暇つぶしにもなるか……」

笙子は駅に入っていく。慧はバイクを取りに行くため再びあの汚い駐車場へと足を踏み入れた。さっきまでの珈琲の香りも潮の風も消えていた。バイクのエンジンを点火すると体の中心へと響く振動と鼓動が彼女の弱くなった心を奮わせた。またしても走り出す。来た道とは違い笙子の言うとおり手紙にあった店の前へと向った。道を走る車は少ない。時に一台、駐車場から現れて通りへと出るだけだった。

京橋を抜け三宮駅方面へと走る。洋館が立ち並ぶ通りへと出る。帰宅中の人々が歩く中、バイクを停めて大きく分厚い扉を見た。月末、もう一度ここへとやってくる。洋館は空へと伸びていたが空は見えた。星はない。真っ暗闇が広がって先は見えなかった。

第三章三話

織戸慧は京都へと戻る道は街の中を避けて山の中を選んだ。深い緑のなかのほうがよかった。ただ、それだけだった。人の通りなど殆どなくバイクの速度は非常にゆっくりと進んでいく。外灯の明かりに誘われるように京都へと向う。といっても今のスピードでは京都までは二時間以上はかかる。

彼女は山を駆け上がるなかでどうしようもなく振り返るしかなかった。山の頂上付近へと差し掛かると背後から琥珀色の光が道を照らしていたのだ。夜の道をそれも山のなかで光などあるわけがないと振り返った。するとそこには黒い空へ向って伸びる塔があった。塔は全身から琥珀色の光を放ち光は辺りの山のみならず慧の進む道すら照らしていた。自然の道を選んだ結果がこれかとまた走り出す。今度はバイクの速度を全開にして塔の光から隠れるように急いだ。

大阪へと入ると塔の光は届かない。すぐに京都へと移り実家へと急いでいた。山の中を走る事も出来ず仕方なく人工ライトが作り出す夜景に踏み入った。ヘルメットを通り越し耳に入ってくる音も車の走行音へと変わる。今度はひっきりなしに動いている車から逃れようと屋敷へと帰る。

彼女の心はぶれていた。笙子との会話はほんの少しの清涼剤程度で決心するのは結局自分なのだ。もし時雨がいなかったら、もしジュリオがこなければと在りもしない妄想までしてしまう。そんなことを願っても長瀬悠の心は自分に向うかどうかと最後には自己嫌悪に陥る。

体の汚れを落とすシャワーも虚しかった。

なにより情けないと感じていた。

体の汚れは落ちても心の中は晴れなかった。今までの自分が全て崩れるようで彼女は立っていられなかった。浴槽へ身体を浮かせる

と天井を見る。無数の水が粒のように張り付いていた。

長瀬悠は織戸慧に対しての毒

言葉は口にしなかった。

いつになれば解放されるのか。そればかり考えながら眠りについた。

笙子と会った日より二週間以上。あつという間に過ぎてしまった。ただ自宅と連盟施設を行き来するだけだった。各所に赴いては女性達に簡単な稽古をつける。そればかりだった。

十月十日、連盟本部より長瀬悠の認定試験が終わったと報告が入った。彼女の携帯電話には合格の二文字が踊っていた。落ちるわけはなかった。今すぐにもおめでとうと言いに本部へいくべきかと考えた。実家から本部まですぐだった。バイクを出せばすぐに着く。しかし行ってしまうと考えを改めた。そうこうしているうちに笙子から会わないかと連絡が入る。悠が試験合格を伝えるべく会おうと言っているらしい。

慧は断った。

笙子は強要しない。好きにしなさいと言って終わった。悶々とした日々は続いたが時雨と会うよりはよかった。

またその間、事件は何一つ発生しなかった。織戸慧の出動はなかったのだ。それは関西地方において同属による特定任務がないということでもある。彼女の仕事は妖魔の退治ばかりではない。むしろ妖魔は奏者によって浄化する事が常である。織戸慧の仕事は魔術師による企みの阻止。

かれら魔術師という存在は随分と身勝手に自らの探究心による行動だと言っては迷惑をかける。社会への奉仕など存在しない。そういった者がいるのだ。聖人君子ではない。

人間の命は材料の一つとして扱われる。万物の自然もまたしかり。

枠から外れた魔術師を削除する事こそが織戸慧の仕事とされる。

対魔術師用の装備を整え対象の魔術師を確実に仕留められる方法と
武器をもつて消す。これが仕事。

そんな目の背けなくなるような仕事は一切ないままジユリオ・ド
ウーエは関西魔術師連盟、神戸支部のイザナギへとやってきた情報
が入った。

他国から魔術師が自由に出入りする事は無い。一般人と同じ扱
いはできないため日本なら必ず身元引受人となる組織または個人が必
要になる。ジユリオ・ドウーエが身元を預ける事を選んだのは連盟
本部ではなく単なる支部であるイザナギだった。個人が旅行として
やって来ているのだからそれで充分なのだと訴えていた。

イザナギに笹塚笙子がいるとも知らず彼は神戸での滞在を望んだ。
慧の携帯電話にもその旨は伝えられいよいよとなった。

「なによその格好」

イザナギに着き次第、笙子は言った。早朝、バイクに乗った慧が
着ていたのはいつもの黒いジャケットにダークブルーのジーンズと
いった女らしくない服装だった。

「いいじゃないか」

「ジユリオがどうかと関係なくそれは駄目よ。せつかくのパーティ
ーなんだからせめてドレスで行きましょうよ」

「今からか？」

すでに時は迫っていた。向こうは待っているだろう。だが笙子は
イザナギの屋敷へと慧をバイクごと引き入れた。神戸三宮から瀬戸
内海へと歩く。緑と潮に挟まれた場所にイザナギはある。正門は四
トントラックも通れるほどのスペースと高さ。背を一つ落とし左右
へ広がる壁はなかの様子を見せていない。壁には扉が設けられてい
る。その一つから慧とバイクは中へ進んだのだ。

連盟本部と同じとはいかないまでも広大な敷地を持っていた。二
世紀ほど時代を遡ったような武家屋敷と瓦の屋根が犇んでいる。足
には砂が敷き詰められバイクのタイヤに絡みつく。バイクを笙子に

言われるがままに屋敷の端に停めると彼女の後ろについて歩く。縁側に上がると太陽の光で暖められた木が足裏に伝わった。

「オレの事を言うわりには笙子だって」

「私は今から着替えるの」

角を曲がりまだ進む。すると前方から巫女装束に身を包んだ女が列をなしてやってきた。笙子は頭を下げて微笑むと彼女らは足を止めて頭を下げた。連盟本部で慧がよく目にする光景だった。織戸家は本部の一角を成す中枢。ならば笹塚笙子はイザナギの世継ぎである。この屋敷は彼女の家でもある。たとえ育った場所が違えども、語る苗字が違えども彼女がイザナギ当主、泰然長治の娘であることに間違いはない。

巫女の群れをすり抜けるとようやく足を止めた。右手の襖を開くと慧を招いた。

「ここが私の部屋よ」

と言うのはいいが畳と木の部屋は強盗にでもあつたように荒れていた。服は脱ぎ捨てられ本は散乱していた。物が溢れているのは結構だが百年の恋さえ冷めそうだった。部屋の奥へ器用に足を動かして移動すると一番奥のクローゼットを開けた。黒いクローゼットの中には光を浴びて輝くドレスが並んでいた。内一着を取り出し慧のほうへ差し出した。

「用意しておいてよかったわ」

「それを着ろつてのか？」

首を傾げる笙子。彼女が持っていたのは蒼い生地の中華服だった。ご丁寧に金刺繍の龍がデザインされている。もちろんスリットも深い。下手をすれば下着が見えるほどだった。だが笙子は引き下からなかった。どうしても着なければ話は進まないといって強引に手に持たせたのだ。するとクローゼットからもう一着と赤い生地の中華服を取り出した。

「さ、着替えましょ」

「どこでだよ」

部屋は着替えなどできるような状況ではなかった。笙子は杖を取り出した。掌でそつと握れる程度で軽く木の枝のようだった。手首をくるりと回すと部屋に散乱していた洋服は箆笥に自分のほうから動きだした。ゴミは一箇所に集まり本は棚へと戻った。

「ここだよ」

問題など何もないと服を脱ぎだす。彼女の大きく張った胸が揺れ赤い下着が現れる。仕方なく慧も服を脱ぎ渡された蒼い中華服に着替える。服を脱いだ時、女としての成長具合がよくわかった。誰にももまれた事のない胸は自己主張も小さかった。おまけに身に付けた下着も柄のないスポーツブラである。グレーカラーの質素なもの。見えた瞬間に笙子が「脱ぎなさい」と強引に脱がせ中華服と同じ青い下着を与えた。薄く肌が透き通るような生地である。

服の下から押し上げるように見える笙子の胸元に比べ慧の胸元には皺ができそうだった。明らかに量が足りない。しかし腰の辺りは非常にきわどく細長い足は丸見えだった。

「誘っているように見えないか？」

鏡で見るとまるで娼婦のように見えた。

「そんなことないわ。可愛いわよ」

笙子はにこやかに微笑んで言った。褒めているのだろうが彼女の体から伝わる女の部分に嫉妬しないわけも無い。

着替えの終わった二人は服と同じ色のハイヒールで屋敷を出る。店まで歩くには少し遠い。道を歩くなりすぐにタクシーを捕まえて指示した。運転手は青赤の中華服を着た二人に気が動転しそうになりながらも前を向いてアクセルを踏んだ。ミラー越しに映る彼女らはまるでモデルのように見えている。

「なんでこなかったの？」

「用事があった」

突然言った。慧はそれがなにを意味しているかわかったうえで答えた。嘘をついたのだ。

「好きにすればいいって言ったけど仲間でもあるのよ」

「そうだけど……笙子はとうんだ」

「私は他にすることがあったのよ。悠が試験を合格した時点で事務処理がたくさんあったの」

言葉がつまる。どう返事をすればいいか思いつかなかった。

第三章四話

ほどなくして店に到着する。その間、慧は無言だった。看板は外されていた。年中無休の喫茶店のはずが誰一人として受け入れなかったのだ、彼女ら二人以外は。

赤い絨毯を進むと奥からやってくる。金色の髪に青い瞳をした背の高い優男。両腕を広げると白いタキシードが広がった。二歩下がった後ろからはさらに背の高い男もやってきた。山のように大きな身体は黒いスーツに包まれていた。

「慧！ よく来てくれた」

彼の目には蒼い中華服だけが目に入っていた。慧は頭を下げたが途端にもう一人の女に気付く。すると突然、一歩下がった。

「今日は呼んでくれてありがとう。ジュリオ」

声をかけたのは笙子だった。

「な、何で君がいるんだ！ 笹塚笙子」

さわやかな声も姿も一気に消し飛んだ。腰は震えていた。二人は同級生だった。なにがあるのか慧は聞かなかった。ただジュリオ・ドゥーエの震える様が少し気に入っていた。

「なぜって？ 慧の保護者よ……ああ姉かしら」

笙子が慧に目をやるとジュリオの瞳も慧へと向った。

「俺が連れてきた。駄目か」

「だめだ、帰ってくれ。僕は慧だけを呼んだんだ」

再び笙子へ向けられる。

「あらそう。そう言ってるけどどうする慧？」

「笙子が帰るならオレも帰る」

「そんなん」

喉に唾が詰まったようだった。開いた目蓋を閉じては開く。「どうする？」と笙子が言つと彼の隣りに大男が立った。耳元で何かを呟く。

「ん……笹塚女史の同行を許可しようじゃないか」

「ありがと」

一歩踏み出そうとするがジュリオは止めた。彼は右腕を伸ばしストップとばかりに進行を塞いだのだ。

「でも条件がある。これから中で見るもの知るものは他言無用だ、いいね」

手紙にはどうしても見せたい物があると書かれていた。二人ともそのことを言っているのだと判断した。

「べつに言いふらしたりしないわ」

「本当だね」

「しつこい男は嫌われるわよ。ねえ慧」

何をそこまで念を押す必要があるのかと不思議に思う。とはいえ振られたからには答える。慧は首を縦に振る。たじろくジュリオにやりとしたのは笹子。慧についてきてからかおうと言っただけだったのにそれだけではすまないなと彼女は口角を持ち上げていた。同級生として過ごした学院時代、笹塚笹子は彼からよく冷やかされていた。魔術師が大事にしている物の中に家柄がある。魔術師としての能力に突然恵まれる人間はほぼ奇蹟に近い確立となるだろう。これらの大半は大昔から続く遺伝である。そして魔術師になれる才能は磨けば必ず答える。ジュリオは魔術師としては最低だった。成績は低かった。逆に笹子はよかった。

「僕の邪魔をするのはいつも君だね」

「褒めてくれてありがとう」

笹子がイザナギ当主、泰然長治の娘と解つたのは学院を卒業する頃だった。それまではただの魔術師であり名前を持たなかった。ジュリオはそんな彼女を嘲笑っていた。彼女の成績がどれだけよかったとしても結局は雑種だと罵った。

ドゥーエという家と名前があつたからこそだった。だが今は違う。笹塚笹子は名前を変えてはいないが確かに泰然長治の娘であり次期イザナギ当主である。この日本にいる限りジュリオよりも地位は高

い。とても学院時代のようにはいかないのだ。

「さあ行きましょう。お腹すいたわ」

「ん……」

堪えて大男を見る。「頼むリカルド」彼はうなずくと着た廊下を先を歩きだした。その大男でさえ天井には届かない。城の如く天井は高くにあった。リカルドが姿を消すとジュリオはようやく二人を伴って歩きだした。

「でもよくここを押さえたわね」

「ふっ。当然だろう、慧を招待するんだ。ここでもまだ足りないくらいさ」

ここは昭和十三年に建てられた旧英国銀行を改築し作られた喫茶店だ。昨夜の喫茶店も素晴らしい店だがここは違いすぎている。パーティー会場にするなら最高だろう。関西魔術連盟が関係する店の中では間違いなく神戸一である。ジュリオのみならず他の魔術師が使うこともある。人気はダントツだった。

「こっちだ」

「知ってるわ」

日常の営業に足を運んだことは何度もある。天井へ伸びる大鏡と窓。バーカウンターとその後ろにある色とりどりの瓶。天井から吊り下げられている筒状のライトとチューリップのシャンデリア。豹柄の巨大ソファ、何もかも見たことがある。だが……今日ばかりは違った。あったのはバーカウンターと円形の黒いテーブル。椅子は人数分だけ用意されていた。いつも珈琲を飲んでいる客も店員もいなかった。いまやこの店全体がジュリオ・ドゥーエの指揮のもと動いていた。

第三章五話

二十メートルはある縦の空間には天井から吊るされたチューリップの束が光を放っていた。笙子達が足を踏み入れたのは黒と茶のパネルが交互に列を成した広場だった。本来あるべきはずの豹柄ソファはなかった。テーブルも椅子もない。ただ中央に笙子、慧、ジュリオの三人が座る分の椅子があるだけである。美女を連れてジュリオはテーブルにつくと椅子を後ろへ動かした。もちろん慧の椅子だけで笙子の椅子には触れもなかった。

二人が座るとジュリオは指を鳴らす。すると二階から足音がした。目を動かせば男女一組が階段を降りる姿が見えた。

「今日は僕だけじゃなくてね。奏者の学園からゲストを招いた」

男は金髪をぴったりとオールバックにして額を丸出しにしていた。髭が濃く口元を隠すように口元に生え揃っていた。眉も長い。背は高かったがリカルドよりは低い。ただ肩幅はあった。

そしてもう一人、女のほうは純白のワンピースを着ていた。同じ金色の髪は腰まで伸びていた。青い瞳は大きく可憐だった。

「私の名前はセロ、こちらは……」

「リザ、と申します」

ワンピースの両端を持って広げる。頭を下げてお辞儀する。再びジュリオが指を鳴らす。どこからともなく使用人がやってくる。数は三、各自バイオリン、椅子を持ちよった。

「リザ、演奏を」

「はい」

挨拶もそこそこにリザは使用人からバイオリンを受け取ると曲を奏で始めた。高い天井にまで届くバイオリンの音色はあつというまに店内に響き渡った。セロはそんな彼女の隣りに座り耳を立てた。ジュリオがようやく椅子に座る。

「いい曲ね。腕もいいし」

どれほど高性能な機械を使っても彼女には勝てないだろう。それは奏者の持つ力が成すべきところ。データに収まった音ではない生の感情が場を制した。

「それはそうさ。学園で一番の奏者なんだから」

リザの腕は確かだった。奏者の奏でる音楽をBGMにするとはなんと豪華だろうか。奏者は人数が決まっている数少ない能力者である。その一人をこんなふうに扱う事は日本では考えられなかった。たとえ彼女が同席し食事をしようともだ。

「今日は何をご馳走してくれるのかしら？」

「イタリア料理……と言いたいところだけどね。食事と言うよりはデザートの祭典だよ、リカルド」

手を叩くとさっきの大男ことリカルドがやってくる。彼の後ろには銀の台車を押す使用人が一人。台車の上には人が入れそうなほどの皿が載っていた。皿には同じ銀色の蓋がかけられていて中身は見えない。

「デザート祭典ね……どんなのがあるの？」

「それは見てのお楽しみ。慧は甘いのは好きかい？」

女として生まれたからには興味をそえられると笙子は身を乗り出す。慧の表情は変わらなかった。ジュリオへの返事は「まあな」と質素なものでしかなかった。それでもジュリオは「嫌いだ」と言われなかった事に気を良くしたのか微笑んだ。

銀の台車がテーブルの隣りに到着すると移動させる。一人では重いのかりカルドも手伝って二人係りとなった。見ればまだ後ろから台車がやってくる。最初の台車から移されたいちまいは早々に蓋が取られた。

銀板の上には白い雲のようにクリームが敷かれていた。甘い香りが店中に広がり女二人の心は一瞬にして少女のように若返った。スティック状のチーズケーキが円を描いていた。白い波を挟んで今度ハレモンの乗ったレアチーズケーキとパナコッタ。見れば見るほど涎の出ってくる甘さの大洪水とともにティラミスが中心に乗っ

た。

二枚目の銀板はアイスクリームが虹のように並んでいた。どれもスプーンですくえば二口でなくなるほど。しかし色の数は十色以上と豊富である。

「さあ食べよう。どれからでも自由に取ってくれ。そのために用意したんだ」

二人の手には皿が渡された。片手でもてるほどの小さな皿だが銀色に輝き細かな装飾のされたものだった。使用人たちが取り分けるためにとはさみを皿に乗せた。逸早く笙子が掴むと皿に載せていった。慧は動かなかった。彼女にしてみれば眼前に広がるスイーツの大海は見たことのないものばかりだった。チーズケーキの甘さもアイスのひんやりとして舌の上で溶ける感触も知らない。織戸家では茶菓子くらいなもので和食以外は口にした事はない。

「はい慧」

「ありがとう」

笙子が取ったのはスティックチーズケーキとパンナコッタだった。どう食べていいか解らなかったから適当にフォークで切って口に含んだ。使用人たちは最後の台車を運び三人分のティーセットを用意した。オレンジ色の紅茶が注がる。甘さの広がるデザートにぴったりの苦味の残ったストレートティーである。三人は心行くまでスイーツを味わった。

三人のテーブルから離れて二人。セロは時計に目をやっていた。

隣りでバイオリンを弾き始めて三十分が経った。

「そろそろ休憩しなさい」

「でも先生、あちらも」

バイオリンにかけた手は休ませなかった。店に流れる音楽を一手に引き受けるリザは愉しそくに弾いていた。疲れるどころかこれから夕方まで弾こうという気迫すらセロは感じていた。リザはテーブルの三人がフォークを置いたのを皮切りに曲を変えた。いささか急すぎたため全員の意識が集中した。

リザは全ての瞳を惹きつけて口角を緩めた。

第三章六話

「よし、本題と行こうか」

ジュリオが言った。使用人たちはテーブルを片付けると下がっていく。リカルドだけが見える場所に残って二階へと上がっていく。その先は笙子と慧の瞳には映らなかった。

「さっきも言ったがこの事は誰にも言わないでくれよ」

「いいからさっさとしなさいな」

真紅の唇を拭く笙子は興味がなかった。彼が何を用意して自慢しようとしているのかより腹に納まったスイーツの香りと余韻を味わっていた。慧もまた同じであった。スイーツの中には葡萄や林檎も乗っていた。薄い味付けのフルーツに彼女は腹を膨らませた。

テーブルと二階の間へと巨大な四角い箱が降りてくる。箱には鎖が繋がれている。二階ではリカルドが使用人たちを指揮していた。彼らは手に鎖を持ってゆっくりと降ろしていたのだ。

「なんだあれ？」

笙子よりも早かった。慧が箱の中身に気付いたのだ。箱には白い布がかけられていた。外側からだとは何があるか見えるはずはなかった。しかし慧は布の先を感じとった。笙子もまた少々大袈裟な移動をする箱の中身が奇怪だと気付いた。天井からぶら下がっているチューリップの束が放つ赤い光に布の先にいる何者かの影を映し出していく。

箱が降り切る。最後の一幕で大きな鉄の擦れる音がリザのバイオリンを一瞬だけかき消した。リザは何食わぬ顔で弾きつづけた。弾く事で彼女は幸せそうにしていた。

「それではこれから世にも珍しいものをお見せしよう。まあ約一名、見せたくない人物もいるが今回は仕方が無い。大サービスだ」

ジュリオが箱の中身を隠す布に手をかける。そのまま思いつきり
翻す。

「これは……」

笙子が眉間に皺を作る。意気往々と見せるジュリオの傍には一匹の白き獣がいた。眼を閉じ寝息を立てている。獣は馬と酷似していたが大きさは違った。とても馬と呼べる毛並みでもない。箱の大きさは三メートルといったところ。獣はそこで眠っていた。箱には柵がされている。

「まさか麒麟……なの」

獣の頭には角が生えていた。時折、電気が流れて火花が散る。笙子は息を飲んだ。

「そのとおりだよ。笹塚、凄いだろう」

獣に近づく。起きる気配はなかった。リザの奏でる音楽のなかで眠り続けていた。さっきまでの甘い香りなど消し飛んでいた。眼前の獣はここにいてはいけない存在である。

「麒麟は幻獣よ！　こんなこととして……私たちを犯罪者にするつもり」

「声が大きいわ」

眼を麒麟へとむける。笙子の声は店中に響いたが麒麟には聴こえていなかった。やはり眠りから覚める気配はなかった。慧もまた近づきその獣へと目を向けた。立ち上がれば二メートル以上はあるように見えた。巨大な身体は白い毛に覆われていた。毛は白だけではなく青を含んでさらに稲妻をまとうていた。触れれば感電するだろうと危うさも伺える。

「なんてこと」

「驚いてくれると思ったんだけどな」

笙子の驚きは別のものだった。目を見開き口元を押さえている。ジュリオの欲しがった驚きとは違っていた。

「ジュリオ、いくら成績の低かった貴方でも幻獣がどういった存在か知らないわけないでしょう」

「解ってるさ。それにイザナギにはもう伝えてあるんだ。僕は慧に先に見て欲しかっただけだよ」

笙子の視線が槍のように突き刺さる。ジュリオは冷や汗を掻きながらも意中の彼女が口を開いて見ている姿に心をとめかせた。

「軽率よ」

「なあにサービスさ。でも凄いだろう」

「凄いのは確かね」と呟く笙子。慧と二人して檻の中へと集中している。膝を曲げ腰をおろして見る姿はジュリオばかりが一階に降りてきたリカルドの視線をも釘付けにしていた。ふたりの腰辺りスリットの間から情熱的な布が見え隠れしていたのだ。そんなことに気付かず二人の意識は眠りにつづける麒麟へと集中していた。

「これはまさに奇跡だ。だが現実ここにいます。掴まえたのだ。ご協力感謝するよ、リゼ、セロ」

二人は頭を下げる。

幻獣。二人とも目にした事はなかった。だがその存在自体は知っている。古くは伝説の獣とされる麒麟。一般の人間ならその通り伝説上の生物であり空想の産物と位置付けられる。だがそれで片付けられないのがここにいる彼等である。彼らにとってしてみれば現在の地球上に存在している生物だけが全てではない。目に見えぬもの、触れる事の出来ぬものと多種多様限界なき相当。

その中でも幻獣とよばれる種族は最も稀に現われる存在とされる。名前の通りまさに幻で人間の前に姿を現す事など滅多にない。目撃例も非常に少ないと記される。そしてその力は神と等しいとも言われている。

「二週間ほど前になるかな、セロから連絡を受けてね。奏者の学院に麒麟が現われたって」

「麒麟が……自分からやってきたというの？」

セロは立ち上がる。

「私も驚いたよ。麒麟が現われたのは霧の濃かった早朝なんです。練習中のリザの元へふらふらと自分からやってきたのだそうです」
目を向けると愉しそうに弾くリザがいる。

「私はその場に立ち合わせていなかったのですが彼女に呼ばれてい

くと傍で眠っている麒麟を見つけたというわけです」

そんな語りを聞いているのかいないのか二人はすやすやと眠りについたままの麒麟を見つめていた。寝息は聞こえないが穏やかな表情なのだと推測できる。おそらく眠りながらにしてリザの奏でる曲に身体を預けているのだろう。しかしただ眠っている獣に見るところなど殆どなくひとしきり見た笙子が振り返った。

「さっきイザナギに伝えたと言ったわね。お父様はなんて言ったの？ 私は聞いてないわよ」

「泰然さまなら許可してくれたよ」

そうは言うが彼の額から流れる汗は歪だった。明らかに嘘だった。幻獣を捕まえたなら全世界へと一瞬にして情報が伝わるはず。おそらくジュリオが情報の規制を仕掛けたのだ。彼が奏者の学院に働きかけたのだろう。ドゥー工家の名前のできる力だ。だがそれは彼の国であればこそ。

「ここは日本よ」

「理解している。泰然様……君のお父上にはすぐに連絡を入れるよ」

「いいじゃないか、笙子。何かあったら全部責任は負ってくれるんだ。なっ」

慧の眼は麒麟にむいていた。心のなかが少しだけ跳ねていた。ジュリオは胸を張る。笙子は冷ややかな目を向けて「何もなければいいけど」と呟いた。そしてひとつ、思い当たる。どうしても聞かなければならなかった。

「で、天啓は？」

ジュリオは黙った。さっきの説明によると彼が麒麟を見つけたわけではない。セロへと視線を向けると彼は一步前へ出た。

「まだです。さっきも言ったが麒麟は眠ったままなのです」

「リザさんは……」彼女を見るがバイオリンを弾く手は変わらなかった。

「この麒麟が何を思っただけでやってきたのかは私達にはわからない。ただふらっと現われてそのまま眠りこけているのだ、無理に起こす事

もできずに今に至っている。麒麟の力は計り知れない。機嫌を損ねればどうなるか」

「当然ね」

「ただリザの音を聴いていると気分良さそうにしているんですよ」

檻の中で麒麟は相変わらず眠っている。近くにいた慧が振り向く。「すまない、笙子。天啓ってなんだ？」

当然とばかりに話は進んでいたが慧だけは内容を理解していなかった。彼女は周囲の視線を一人で浴びる。しかしそれも仕方のないこと。彼女は魔術師でも特殊な力を持っているわけでもない。

「慧は知らなくて当然ね。いいわ、教えてあげる。麒麟をはじめとする幻獣は自分たちの力を人間に宿すと云われているの、それが天啓よ。古来より力を授かった術者たちは強大な力を得て他者を圧倒することになるわ」

「その天啓ってやつを受けた奴は実際にいたのか？」

「いたとされるわ……」

あやふやな言葉だった。幻獣自体が稀少な存在と彼らは語っていた。目で見たことはなく今回がはじめて。ならばその事柄に関する情報も希薄である。

「魔術師の学院でも確固たる事実とされているわけではないの。学院の文献には観覧できない重要文献枠という枠があつてね。一般生徒では見られないの。ねえジュリオ」

目を逸らしながら頷いた。

「私は、一般生徒じゃなかったからよく見てたけど幻獣に関する情報はほとんどなかったわ。まるで情報に規制がかかっているようにね。だから幻獣についての知識は皆同じ程度。神の如く力を持つて現れる彼らから天啓を受ける。それは同じ神になること……」

「おそらく天啓を受けた人物は正体を隠す必要があるだろうね」

「なぜ？」

「神に等しい力だよ。利用したいと思う者がいるに決まっている。魔術師のなかには特に」

「全ては仮定だけだね」

「でも今は目の前に存在している」慧は口を開いた。セロは檻に閉じ込められた麒麟に熱い眼差しを送る。檻の中であっても変わらずに眠りつづける白い獣は身体を走る稻妻に身をおいていた。

「イザナギだけじゃなく学院にも連絡を入れなさいよ」

「何度も言うなよ。解ってるさ。セロも承知している」

セロは再びリザの隣りに戻り彼女の音楽に耳を傾けた。ひとしきり見終わると麒麟から放れてテーブルへと戻る。リカルドの注ぐ紅茶で無理やり喉を潤した。まだ昼過ぎだというのに時間の流れは遅く感じた。

第三章七話

昼食会がはじまり話も一段落した頃。リザは腰をおろしバイオリンを手放していた。しかし店内には音楽が奏でられている。奏者は変わりセロが弾いている。リザの演奏よりも力強く重厚だった。休憩している彼女の手には紅茶の入ったカップが握られていた。三人の座るテーブルではジュリオが最近自分が何をした、家が行なったチャリティーの功績を自慢していた。笙子は口を挟まなかった。

「すみませーん！」

突然外から投げかけられる言葉。店内の空気が変わるまで一秒とかからなかった。まだ幼さの残るなんとも愛らしい少年の声が店内に届いたのだ。ジュリオは「なんだ」と言って立ち上がる。すぐにリカルドが飛び出していく。

「結界を張っていないの？」

「張ってるさ。当然……」

今、この店は関係のある人間にしか入る事の出来ない空間になっている。店が店として機能しているなら客がやってこないわけがない。二人が入る時、看板は下げられていたがなかにはそんな事に気付かずやってくる客もいる。彼らが占有して使う場合、人避きの魔術が常用される。

特に今日のような日は絶対だ。

「ここにいる者以外は呼んでいないよ」

その言葉は乱暴な音で否定された。リカルドの身体は誰よりも大きく大木のようなだった。だが入り口から飛んできた。巨体は宙を舞い無様に落ちる。三人のテーブルへと落下する。女性陣は飛び退きジュリオは椅子から転げ落ちた。

テーブルを支えていた足は彼の身体で折れる。勢いが強すぎて三日月のように割れた。慧はリカルドに駆け寄らず「なんだ」と入り口を見れば赤い絨毯の上を歩く三人が現れる。入り口まで少なくとも

も十メートルはあるリカルドの身体を吹き飛ばすには現れた三人は貧弱すぎた。

「手荒な事はしちや駄目でしょ」

臆せずやってくる三人。もっとも背の高い赤い髪の女が言った。顔は仮面で隠れていた。他の二名も同じである。男を誘惑する声で語る。薄い青の制服でやってくる。シャツワンピース型のスカートを笊子は見た事があった。言霊使いの学園で採用されている制服だ。他の二名も同じだった。ただしスカートではなくブレザーである。男だった。いや、まだ少年だろう。ただその顔は仮面によって隠れていた。

「な、なんだお前たち！ 無礼じゃないか」

ジュリオが叫ぶ。彼の腕はリカルドの身体を起こそうとしているがうめく彼の身体は大きすぎた。ジュリオは三人が着ている制服を知らずに叫ぶ。笊子はリカルドがこうなった状況を頭で推察していた。だれがりカルドを吹き飛ばしたかはわからないが誰一人としてそんなことができるようには見えない。

つまり普通の人間ではない。あるとすれば言霊使い。彼らなら体格に関係なくできる。

「麒麟を頂きに来ました。おとなしく渡しなさい」

女が言った。

（こいつら、ここに麒麟がいると知っていて来たってことか）

麒麟はまだ檻の中で寝ている。さっきのテールが破壊される音にも気付いていなかった。女の傍では少年達が腰から銃を取り出した。黒く鈍い光を放つ銃はまぎれもなく本物だと確信した。モデルガンなどではない。その手に握られている者はまぎれもなくSIGザウアーである。慧は確かに見ていた。

「私たち、麒麟さえ手に入ればいいの。抵抗して死にたければかかってきてもいいけど、その男のようになるわよ。どうします？」
簡単な脅しと挑発だった。今一度、目をやってコンタクトを取ったのは笊子と慧だった。お互い招かれた身である。戦闘道具など持

ち合わせていない。中華服には何一つ武器をしまつ場所はない。自分達の身体を隠すだけで精一杯だった。

「ジユリオ戦える？」

小声で伺う。しかし目は潤んでいた。首を振る。続いて「時間を稼げる？」と慧へ投げかける。突然現れた三人はまだ離れている。何とかできると言うのか笙子は腰に手を伸ばした。瞬時に現れるのは杖。彼女にとって絶対に手放せない物だった。

「さっさと答えるよ！」

意気往々と吼える少年。手に持った銃は誰でもない彼らの方へと向けられている。銃口は流れるように彼らの瞳を右往左往していた。「このままなら十秒、強化魔術ありなら一分」

敵の素性が計り知れない。彼女の言葉は真実味はなかった。しかし慧は冗談を言うようなことはない。女はそれに対してこう呟く。

「死にたいの？ 生身のあなたが相手になるはずなのに」

慧の声が聴こえたようだった。遠くにいても耳はいいようだ。そればかりか慧の能力を把握しているような言葉。

「刃向えよ。殺す理由ができる」

空いた手を広げ指だけを自分のほうへと仰ぐ。そのしぐさに動いたのはもう一人の少年。挑発する腕を押さえる。

「やめろ。戦闘は避けるって言われたろ」

「知るか！ せっかく外に出たんだ。少しは暴れさせろ」

言い合いを始める。女も二人の仲介に入ろうとした。その隙を見逃すはずはなかった。証拠が何処から取り出した杖を慧に向って振った。銀色の光が散乱した。直後、レーザービームのように慧の身体が発射された。すかさずテーブルの折れた足を拾い上げる。赤い光弾となった彼女に目を見開いた。獣の速さなど超えた光の速度で捉えると女の頭目掛けて手に持ったテーブルの足を振り下ろす。

「セット」

慧がテーブルの足から手を放す。慧は女の声と他二人の銃が自分に向けられたのが肌で感じ取ったのだ。女の足元からは光が広がる。

やはり言霊使いだった。

すぐさま方向を変えて跳ぶ。光の速さになった彼女は止まらなかった。店内を天井まで駆け上がり舞い上がった。同じく天井にぶら下がったチューリップの枝を根元から破壊して三人へと落とす。

「てめえ！」

荒っぽい声を上げる少年が銃を向け狙いも定まらないうちにトリガーを引いた。硝煙の匂いとともに銃弾が放たれる。落ちるチューリップの束に衝突し効力を失った。もう一人の少年がすかさず銃を取りだした。今度は慧に狙いをつけていた。トリガーを引く瞬間、横からの暴風によって身体ごとはいじき飛ばされる。

「な、に？」

少年の目に映ったのは集結する使用人たちを背にした笹子だった。慧との戦闘中に彼らは笹子の元へ集まっていた。天井から落ちてきたチューリップを交わすため三人はさらに飛び退く。シャンデリアの破片が飛び散る。慧も送れて地に足をつけた。またしても光の速さで笹子の元へ辿り付く。

「銃弾装填」

女が唱える。二人の少年が持つ銃のなかで音が鳴る。さつき放たれた弾丸が詰め込まれた。それこそビデオの巻き戻しのように。

「火遊びくらいはできるわよ。蝶よ、火をもって飛びなさい」

止まらない。女が手を翳すと一匹の蝶が現われた。羽ばたくと炎の粉が赤く光って舞い散る。蝶は増え店内を所狭しと飛んでいく。一匹の持っていた熱量はライター程度だが店内を炎に包むには充分だった。キツチンへと侵入した蝶が大爆発を引き起こす。

「何をしている！ このままだと君達だって死ぬぞ」

ジュリオが堪らなくなつて叫ぶ。

「どうもこうもないわ。こちらにとって有利な状況を作り出すだけよ。それよりも麒麟を渡してくれるのかしら？ この程度の抵抗ならまだ許せるわよ」

「ふざけんな！ ぶっ殺すんだよ」

「熱くなるな」

喧嘩はさらに激しさを増し互いに銃を向ける始末。

「許しを乞うつもりは無い」と笙子が割って入る。しばらく膠着し誰もが次の展開を読めないでいた。使用人たちは心の休まることを望んでいたがそういうわけにもいかない。火は迫りくる。やがて煙りが充満し咳き込む。

第三章八話

「面倒くせーよ！ さっさと殺しちまおうぜ！」

一人の少年が叫んだ。まだ銃口はもう一人へと向けている。その少年は臆することなく無言で見つめ返す。仮面から覗く青い瞳は揺るがなかった。

「どうする気だ？ 笹塚」

全員の目を背中に受ける彼女にジュリオは投げかけた。堂々たる姿の後ろで彼は膝を震わせていた。笙子は答えなかった。ただ視線をはつきりと敵に向けている。そして手に持った杖を向けていた。

「その眼……いやね。腹が立つ」

赤い髪の女の足もとより浮き出た光の輪が輝く。笙子の後ろでは十人程度が群れている。狙いを定めずとも銃口が向けられれば誰かが傷付くのは確か。一発たりとも撃たせることはできない。

「反撃は？」

慧が踏み込む体制を取ってから云った。彼女の身体に宿った力はまだ健在である。踏み込めば彼女は再び光りのように加速する。今にも飛び掛ろうとする姿勢は牽制にもなっていた。

「しないわ、逃げ」

「ぶっ殺す！」

二人の会話を遮ったのは少年の殺意。向けられる銃。しかしそれが火を噴く事はなかった。弾丸が放たれるよりも速く撃ちだされたのはナイフだった。慧が自身ではなくテーブルからかすめ取って投げつけた。もう片方が銃を向けたが笙子は怯えることもなかった。

彼女は杖を振るうのだ。言霊遣いが言葉で勝負をするように魔術師は杖を振るうのだ。

「話は最後まで聞きなさい。あなた達が言うのよ、麒麟さえ手に入ればそれでいいって。私はね、ここは退いてあげると言ってるの」「それはどうも」

「優しいでしょ」

銃は向けたままだった。互いの指揮を取る二人は笑いあった。そして絶句したのは敵ではなく味方。

「なにを言ってるんだ笹塚」

「黙って」

ジュリオは彼女の肩に触れようとした。しかし笹子が振り返り全てを止める。ジュリオは彼女の瞳に圧倒され喉が詰まる。傍では麒麟が眠っている。店内の炎も煙も関係ないとただひたすらに静かにしているだけだった。

「ふざけやがって！」

血の気が多い少年のほうだった。首の辺りには仮面まで血管が浮出ている。頭にきているのは確かだった。

「炎の静止。物体の行動を制限」

少年は確かにトリガーを引いた。はずだった。しかし指は言う事をきかず銃は役目を果たす事は出来なかった。そればかりではなく店内で燃え上がる炎は氷のように固まってしまふ。女の言葉は確かに機能した。だが笹子達に制限はなかった。使用人たちは震えたまままで慧も身体に異常は感じなかった。

（今なら……）

自ら武器を封じた彼女を仕留められると慧は脚に力を込めた。笹子はすかさず慧に待ったを掛けようと前方に腕を伸ばした。

「何やってんだよ、あんた！」

慧の行動に気づいた少年が何度もトリガーを弾く。しかし少年の銃は言う事をきかなかった。一発たりとも弾を発射する事が出来ない。少年が睨みつけても女は動じなかった。彼女に見えているのはたった一人笹塚笹子だけである。

「本当に逃げていただけます？」

「ええ。みんな、麒麟から離れなさい」

豊満な胸を張って答える。リザを含め麒麟の周囲にいた者たちはぞろぞろと移動を始めた。だがセロだけは動こうとしなかった。

「一人、離れない方がいらっしやいますわよ」

「やめなさい！ 麒麟は君たちにどうにかできるものではない！」

セロがようやく口を開いた。まだ目を醒まさない麒麟を背にして大の字になる。

「うるせーよ！ オッサン。先に殺しちまうぞ」

少年が言う。銃を向けるがまだ機能は制限されている。しかし銃口を向けられれば反射的に脚が震えた。

「セロ！ 今は私の言うとおりになさい」

「しかし！」と叫ぶ。今度はジュリオがセロに近づく。彼は震えていた。セロの手を掴み瞳で訴える。その瞳にセロは歯を食いしばり歩を進める。

「言っておきますけど私たちが欲しいのではありませんわ。全てはお父様のためです。ですのでそちらの麒麟さんは頂きますのよ」

女がスカートのポケットから四角い箱を取り出す。麒麟が入っている檻よりも随分と小さく掌に納まるものだ。麒麟へ向けるとパズルのように面がくると広がっていく。やがては彼女の手から飛び立ち砕けたシャンデリアの上で形を変えつつける。箱は麒麟の入った檻と同じ大きさと変わった。

「それに入れるつもり？」

「お父様が造ったこの檻ならなんでも閉じ込められるもの」

笙子の表情が引きつる。女の言葉がそうさせた。

「慧！ みんな集まって！」

笙子が叫ぶ。互いの条件はクリアした。だが攻撃の対象である事に変わりはないのだ。女が再び行動の制限を解けばすぐに炎は店内を焼き尽くす。少年はトリガーを弾くだろう。カチャカチャと音を立てている。彼女の力が消えた瞬間、誰かが的になる。笙子としては麒麟一匹を見捨てられてもジュリオは守らなければならない。

ここがイザナギの管理地である故に。避けなければならない。被害を最小限に抑えて脱出することが大事。

死守するべきは人間にある。

女が繰り出した檻がまるで恐竜の口のように大きく開く。それにあわせて笙子が壊れたテーブルの傍、かかっていた布を腕に巻きつける。零れた紅茶が染み付いていたが気にもしなかった。同時に動いたように見えたが笙子の方が一歩速かった。布を巻いた腕を天井に翳すと光が溢れる。光は稲妻のように激しく燃え上がり背後にいた全員をも巻き込んでいく。やがては重力さえも消滅し全員が光に包まれた。

最後、笙子の瞳には麒麟を飲み込む檻が見えた。

第三章九話

秋が深さを増していく。緑一色だった山は赤と黄に染まり冬の到来を待つばかり。長瀬悠は走る車の中から眺めていた。四輪駆動の小さな車はエンジンをフル回転させてやっと登れる坂をひたすらに駆け上っていく。悠は揺れるシートに文句一ついうことはなかった。「なにか珍しいものでもあった？」

運転するのは関西魔術連盟本部よりやってきた滝川留美。長い髪を括ったスーツ姿に眼鏡とちよつとばかりきつそうな風貌だった。とても山道を駆ける四輪駆動車の運転手としてはそぐわぬ格好である。唯一、足を包んでいる靴だけが合っていた。悠は「別になんでもないよ」と答えてじつと外を見た。

「じゃあ時雨さん？」

「時雨は帰ってこないよ」

二人が行動を共にして彼此一週間になる。事の発端は天王寺のマンションへ滝川がやってきたことにある。連盟の認定試験を終了し見事、認定を受けた少年。身元引受人の笹塚笙子へ報告を済ませるやいなや仕事は津波の如く押し寄せてきた。時雨とマンションで新しい曲作りを行なっていたところ滝川は連絡もなしにやってきた。彼女のほうはと言うと既に連絡は行き届いていると思っていたらしい。しかし実際には本部の連絡ミスであった。では、と滝川はなんともなしに話を始めた。

「部屋を出る？」

「そうです。今日で長瀬君はここから出る事になります」

まるでロボットのようだった。それにしてもまさかの言葉だった。時雨も立ち上がる。愛着があったわけではなかったが彼にとってみればこの日本で暮らす場所はここしかなかった。

「笹塚さんは新しい部屋を希望したようよ、聞いてないの？」

悠は頷くしかなかった。まだ十五の少年には自分がどうすればい

いか解らなかつた。

「連盟は彼女に一週間ほど時間を与えた。でも連盟もすぐに新しい部屋が用意できるはずもないの。解ってちょうだいね」

「じゃあ僕はどこへ？」

新しい部屋と言われてもまだ住めないという。ならばここを出て何所へ行けというのか。すると彼女は眼鏡を直して言った。

「これから二週間、私と仕事の旅に出てもらいます」

「旅？」

首を傾げる。しかも二週間。新しい部屋が使えるのは一週間後と言う。一週間多い。彼女が嘘をついているとは思えなかったが悠は携帯電話を取り出した。悠には部屋の事は愚か仕事の話も知らされていなかった。すぐに笙子へ連絡するとがざがざと揺れ動く騒音が聴こえる。

「どうしたの、悠。珍しいわね」

声が弾んでいた。彼女の言葉通り悠が電話をかけることなど滅多にない。それはそばにいる時雨も同じだった。だからリダイヤルを表示させるだけで全員の名前が表示された。

「連盟から滝川って人が来てる。この部屋を出ろって言われたんだけど」

ほんの少し時間が経つと「えっ」と言う声が出た。

「あら、言ってなかったかしら」

「聞いてないよ」

あらら、と笑って誤魔化そうとする彼女だった。悠が溜め息をつくとうやく「ごめんね」と言った。それでも申しわけないという気持ちは感じれなかった。

「その部屋は今日で引き払うってことになったのよ。新しい部屋はちよつと時間が掛かるみたいでね、それまで悠には仕事をしてもらうわ。詳しくはそっちにいる……滝川さんだっけ？ に聞いてちょうだい」

「……わかった」

またもや深い溜め息をついて携帯電話を切る。しかしこれは喜ばしい事だと悠は思った。認定を受けたことにより笙子は次のステージに進む事ができる。彼女の目的は事務所の設立にある。魔術師が自分の事務所を持つということはひとつのステータスになる。彼らは自分達の魔術を極める事を目標としている。笙子もまた同じである。自分の研究に没頭できる場所が欲しいと願っていた。

連盟は誰にでも場所を与えるほど大らかではない。いくつかの規定を定めている。まず連盟のために働く事のできる人物であること。第二に信頼できる評価を得た協力者を持つこと。笙子に残っていた課題は後者だった。最低二人の協力者を得る必要がある。一人目は織戸慧である。織戸家の長女として後ろ盾のある確かな人物だった。だがもう一人必要だった。

長瀬悠が認定を受けた事よりようやくその願いが叶う事になった。事務所の設立を認められたのだ。悠はおそらく舞い上がって連絡を忘れたのだと解釈した。そして先の電話で騒々しかったのもそれが理由だとした。

「さあ荷物の整理をしましょう」

滝川は手をパンと叩いて言った。しかたなく悠は数少ない荷物を纏め始める。だが旅行鞆に服を詰めると半分以上が終わってしまった。イギリスから来た頃から悠の荷物は増えていない。ギターと曲作りに必要なノートとペン。着替えも少ない。義足も装着するため荷物にはならない。一時間も必要なかった。

「少ないのね、給料はけっこう出てるはずだけど」

確かだった。仕事のたびに十代の少年が手にする事のできない金額が入った。しかし少年は使うことはなかった。少年にとってはギターが全てで部屋には家具らしき物も見当たらない。ギターの維持と最低限の生活用具だけがあればよかった。旅行鞆一つに全てが納まると肩からギターケースをかける。部屋の中はフローリングの床が広がっていた。冷蔵庫や布団は最初から用意されている物で少年のものではない。

殺風景になった部屋を改めて見て悠には名残はなかった。元より一箇所に留まるような性分ではない。律とともに世界を回っていた時のほうが随分とマシだった。

「これで準備はできたわね」

溜め息混じりに言う。彼女は玄関口でじっと立っただま待っていた。時雨が悠の傍に立つといよいよ準備完了となった。彼女は悠の手を握ろうとしたが両手が塞がっていたため繋げられなかった。

第三章十話

秋が深さを増していく。緑一色だった山は赤と黄に染まり冬の到来を待つばかり。長瀬悠は走る車の中から眺めていた。四輪駆動の小さな車はエンジンをフル回転させてやっと登れる坂をひたすらに駆け上っていく。悠は揺れるシートに文句一ついうことはなかった。「なにか珍しいものでもあった？」

運転するのは関西魔術連盟本部よりやってきた滝川留美。長い髪を括ったスーツ姿に眼鏡とちよつとばかりきつそうな風貌だった。とても山道を駆ける四輪駆動車の運転手としてはそぐわぬ格好である。唯一、足を包んでいる靴だけが合っていた。悠は「別になんでもないよ」と答えてじつと外を見た。

「じゃあ時雨さん？」

「時雨は帰ってこないよ」

二人が行動を共にして彼此一週間になる。事の発端は天王寺のマンションへ滝川がやってきたことにある。連盟の認定試験を終了し見事、認定を受けた少年。身元引受人の笹塚笙子へ報告を済ませるやいなや仕事は津波の如く押し寄せてきた。時雨とマンションで新しい曲作りを行なっていたところ滝川は連絡もなしにやってきた。彼女のほうはと言うと既に連絡は行き届いていると思っていたらしい。しかし実際には本部の連絡ミスであった。では、と滝川はなんともなしに話を始めた。

「部屋を出る？」

「そうです。今日で長瀬君はここから出る事になります」

まるでロボットのようだった。それにしてもまさかの言葉だった。時雨も立ち上がる。愛着があったわけではなかったが彼にとってみればこの日本で暮らす場所はここしかなかった。

「笹塚さんは新しい部屋を希望したようよ、聞いてないの？」

悠は頷くしかなかった。まだ十五の少年には自分がどうすればい

いか解らなかつた。

「連盟は彼女に一週間ほど時間を与えた。でも連盟もすぐに新しい部屋が用意できるはずもないの。解ってちょうだいね」

「じゃあ僕はどこへ？」

新しい部屋と言われてもまだ住めないという。ならばここを出て何所へ行けというのか。すると彼女は眼鏡を直して言った。

「これから二週間、私と仕事の旅に出てもらいます」

「旅？」

首を傾げる。しかも二週間。新しい部屋が使えるのは一週間後と言う。一週間多い。彼女が嘘をついているとは思えなかったが悠は携帯電話を取り出した。悠には部屋の事は愚か仕事の話も知らされていなかった。すぐに笙子へ連絡するとがざがざと揺れ動く騒音が聴こえる。

「どうしたの、悠。珍しいわね」

声が弾んでいた。彼女の言葉通り悠が電話をかけることなど滅多にない。それはそばにいる時雨も同じだった。だからリダイヤルを表示させるだけで全員の名前が表示された。

「連盟から滝川って人が来てる。この部屋を出るって言われたんだけど」

ほんの少し時間が経つと「えっ」と言う声が出た。

「あら、言ってなかったかしら」

「聞いてないよ」

あらら、と笑って誤魔化そうとする彼女だった。悠が溜め息をつくとうやく「ごめんね」と言った。それでも申しわけないという気持ちは感じれなかった。

「その部屋は今日で引き払うってことになったのよ。新しい部屋はちよつと時間が掛かるみたいでね、それまで悠には仕事をしてもらうわ。詳しくはそっちにいる……滝川さんだっけ？ に聞いてちょうだい」

「……わかった」

またもや深い溜め息をついて携帯電話を切る。しかしこれは喜ばしい事だと悠は思った。認定を受けたことにより笙子は次のステージに進む事ができる。彼女の目的は事務所の設立にある。魔術師が自分の事務所を持つということはひとつのステータスになる。彼らは自分達の魔術を極める事を目標としている。笙子もまた同じである。自分の研究に没頭できる場所が欲しいと願っていた。

連盟は誰にでも場所を与えるほど大らかではない。いくつかの規定を定めている。まず連盟のために働く事のできる人物であること。第二に信頼できる評価を得た協力者を持つこと。笙子に残っていた課題は後者だった。最低二人の協力者を得る必要がある。一人目は織戸慧である。織戸家の長女として後ろ盾のある確かな人物だった。だがもう一人必要だった。

長瀬悠が認定を受けた事よりようやくその願いが叶う事になった。事務所の設立を認められたのだ。悠はおそらく舞い上がって連絡を忘れたのだと解釈した。そして先の電話で騒々しかったのもそれが理由だとした。

「さあ荷物の整理をしましょう」

滝川は手をパンと叩いて言った。しかたなく悠は数少ない荷物を纏め始める。だが旅行鞆に服を詰めると半分以上が終わってしまった。イギリスから来た頃から悠の荷物は増えていない。ギターと曲作りに必要なノートとペン。着替えも少ない。義足も装着するため荷物にはならない。一時間も必要なかった。

「少ないのね、給料はけっこう出てるはずだけど」

確かだった。仕事のたびに十代の少年が手にする事のできない金額が入った。しかし少年は使うことはなかった。少年にとってはギターが全てで部屋には家具らしき物も見当たらない。ギターの維持と最低限の生活用具だけがあればよかった。旅行鞆一つに全てが納まると肩からギターケースをかける。部屋の中はフローリングの床が広がっていた。冷蔵庫や布団は最初から用意されている物で少年のものではない。

殺風景になった部屋を改めて見て悠には名残はなかった。元より一箇所に留まるような性分ではない。律とともに世界を回っていた時のほうが随分とマシだった。

「これで準備はできたわね」

溜め息混じりに言う。彼女は玄関口でじっと立っただま待っていた。時雨が悠の傍に立つといよいよ準備完了となった。彼女は悠の手を握ろうとしたが両手が塞がっていたため繋げられなかった。

第三章十一話

「それで仕事ってなに？」

「結晶石の穢れ落しよ」

ふうんと相槌を打つと隣りで時雨が「なにそれ？」と身を寄りだした。囁やくように言った彼女の艶に滝川の目が光った。時雨は銀色の髪を悠の鼻先に当てるように近づいている。悠は少年と言うよりはどこか女の子っぽく見える。時雨の美貌もまた極地と言える。接近する二人がやけに艶かしく彼女の目に映った。

悠は時雨の胸元を見る。コートの下には薄いふくらみがある。しかし少年の見たのはその奥だった。熱く鼓動するその音を見ていた。滝川はそんな悠の視線を感じとり口を開く。

「結晶石とは連盟によって作られた穢れを集める装置の事です。物は十センチ程度の透明の石」

「へえ」と関心なく返事をする時雨。悠への反応と随分違ったが滝川は話を続けた。

「小さな動物の死から人間まで生物の垣根を越えて自然の中で穢れが蓄積されることはわかりますね」

「その穢れが妖魔を呼び出す原因になる……」

「そのとおりよ。結晶石は十二月……年末に全て回収され本部で行なわれる祭りで一挙に清められる。そしてまた一年穢れを溜めるの」「ごくろうなこと」

「でも場所によっては一年と持たない」

「脆いわね、増やせば良いじゃない」

滝川は首を振る。再び眼鏡を直した。

「だめなの。結晶石は互いに干渉してしまう性質がある。下手をすれば妖魔を……さらなる穢れを呼ぶ可能性がある」

時雨は悠から放れる。すでに彼女の興味は尽きていた。

「一箇所に集められるのは年末の一度だけ。奏者が全員集まって行

なう祭りの時だけ。ああ、今年は悠君も出席する事になるわよ」

「豊さん……柴村さんも来るの？」

つい先日、京都の山で出会った奏者を思い出していた。少年にとって他の奏者は彼だけだった。認定試験の翌日、共にバケグモを浄化した仲間でもある。「彼も来るわよ」と告げられると少し心がほつとした。

「結晶石はどのくらいあるの？ 二週間ってことは数、多いんですよ」

「長瀬君に与えられた場所は全部で十。全部ここから南に行った場所にあります。大阪南方から奈良に入る直前といったところかしら」
「じゃあ早速行こう」

部屋は天王寺にある。時刻は十時。すでに大阪の南にしていることになる。悠は手に持った荷物の重さにも限界だった。動かずに荷物を抱えていることに面倒になっていた。

「いいわ。仕事熱心な子は好きよ」

彼女なりに愛想よくしたつもりだった。でも時雨はそう思わなかった。きつく睨むような瞳が突き刺さる。滝川は少し心拍数を上げながらも気づいていないふりをしてドアを開いた。背後から突き刺さる視線は消える事はなかった。さっき感じた艶はどこかへと無くなっていた。

鉄骨剥き出しの地下駐車場へやってくると目指したのは味気ない四輪駆動車だった。しかし色はシルバーで新品のように光る。滝川はここへ来る前に朝早くから洗車を行いやつてきていた。彼女の氣遣いたった。二人が乗り込むと消臭剤の香りが鼻をついた。一番後ろにバッグとギターを置いた。時雨は何も持っていない。ようやく空いた手をぎゅっと握った。誰であつても妬けるほど熱い二人だった。

「まずは港に行きましょう」と車が走り出し長い仕事が始まった。滝川は約二週間で予定していた。悠に与えられた結晶石は全部で十個。一日に一つずつ穢れを払っても十日掛かる計算だ。しかし奏

者のことを考えれば間に休憩を挟むことになる。だがその考えは第一の現場で消え去った。

長瀬悠は非常に優秀だった。

第一の現場は泉佐野の港。堤防の先、波の打ち寄せるなか結晶石は設置されていた。無色透明の石は黒く濁っている。それを確認すると悠はすぐにケースからギターを取り出した。昼間の港は人の行き交いもあったが彼はギターを手にしてひたすらに弾いた。堤防に立ち波の音を掻き消し全てを自分の物とした。ギターから溢れる音は天より高く響いた。

時雨はギターを弾いている少年から少し離れて聴いていた。次第に港にいた人々もやってきて曲が終わるたびに拍手した。歌はなかったがそれでも充分すぎるほど清々しかった。

晴天に響いた。

「お疲れ様。よかったわよ」

堤防の先に装着された結晶石は潮に濡れ光っていた。悠は滝川の言葉に「ありがとう」と言ったが喜んでいるように見えなかった。

無表情でギターをしまう。見物にやってきた人々は最後に大きな拍手を贈った。口笛を吹く者、よかったと声をあげる者様々だったが当の少年は頭を下げるだけだった。彼らに興味を持っていない。滝川の目にはなぜか少年の表情が険しくなっていたように見えた。

「二時間か……速いわ」

時計に目をやると圧倒的なまでの速さで仕事は終えていた。二週間という予定は少年にとって長すぎると感じた。

「今日中にもうひとつできるよ」

疲れた表情もなく平然としている。力を抜いていないのは音を聴けば解ること。結晶石の透明さが物語っている。だが滝川は気を張るのはよくないと来るまでに立てた予定どおりに動く事にした。連盟から指定された近くのホテルへ彼らを送りまた来るわと彼女は後にした。

翌日からの行動は滝川の立てた予定表とはまったく別となった。

悠は仕事熱心なのか次へ次へと現場を巡ったのだ。なぜそこまでして仕事をするのかと問うと「仕事じゃないよ」と言った。

廃墟と港を行き来する。結晶石の設置場所は人のいない場所がほとんどだった。倒産した会社の工場もあった。四日目になると街から遠く放れていた。大阪と奈良の県境へと近付いており車は否応なしに坂を登る事になった。

「ここからはずっと山よ」

「宿は？」

「ないわ。後ろに積んでるテントよ」

少年は文句ひとつ言わなかった。坂道を登る途中、いよいよ山に入るなというところで時雨が突然、車を停めろと言った。滝川は「どうしたの」と聴いたが彼女は答えなかった。

「時雨？」

悠の声にも彼女は答えなかった。車から降りてあたりを見る。峠に入る手前、山が広がっている。悠の目にはなににも変わったものが見えなかった。時雨は目蓋を閉じて風に身を晒した。着ているコートは風に揺れる。銀色の髪が靡いた直後、悠を見た。

「私、行くわ。仕事頑張つてね」

「わかった」

あまりにも冷めた二人のやり取りだった。しかし彼女は飛び去る前に熱いキスを交わしていた。滝川はなにがどうなったのか解らなかった。時雨は風に乗って飛び去った。誰にも見られなければいいが、とだけ願った。

「時雨さんどうしたの？」

「用事が出来たみたい。また戻ってくるよ」

何も心配していなかった。滝川は連盟へとメールで報告した。時雨は人間ではない。長瀬悠に関わるときに忠告されていた。時雨がなにか行動を起こした場合、必ず連絡するようにと義務付けられている。

「さあ行こう」

悠は再び車に乗り込むと先を急いだ。残す結晶石は三つとなっている。滝川は二週間どころか一週間で済むと確信して車を走らせる。二人きりとなった車内は次第に揺れがきつくなっていく。それでも悠はギターの弦を張り替える作業を始めた。

「どうしてそんなに急ぐの？」

ルームミラーをちらりと覗いて聴いてみた。これまでは悠と話をしようとするとき雨が気になった。彼女は悠に近づこうとする者を嫌う傾向があった。

「べつに。しんどくないし、とにかく弾きたいんだ」

「疲れないの？」

「ただ弾いてるだけだよ。疲れることなんてない」

少年の履歴は滝川も見ている。彼の父親となった長瀬律と数年間、世界を旅していたと記載されていた。イギリスで奏者の学院にいた頃だ。律と共に学院を抜け出し放浪とも言える旅を続けていた。その間に今と同じ事をしていたとすればこの程度は仕事といえないのかもしれないと思い先を見た。すでに待ちはずっとあり人の気配はなくなっていた。

夜遅くまで走り八つ目の結晶石へとたどり着いた。人の気配は完全に消えている。通りからは誰もいない。車すら通る事はない。なぜなら二人の進んだ道は工事現場へと続く道。その現場は世間を騙すための連盟が作った嘘にすぎない。完成時期は何時までたっても未定である。長瀬悠に課せられた八つ目以降の結晶石は三つともこの先にある。

八つ目の結晶石は工事現場を似せて作られた自然を切り開いた土の鍋の中にあつた。鍋は注ぎ口がついている。悠たちの乗った車は注ぎ口付近に停まる。悠だけが鍋に入りギターを掻き鳴らした。滝川は悠の仕事をみていたがどうやら調子がよくなかったのか八つ目の現場を後にしたのは演奏から四時間が過ぎてからだつた。

「時雨さんのこと気になってるの？」

「そんなことはありません」

口ではそう言っているがおそらく当たっていた。悠は九つ目の現場も同じだった。勢いは衰えていた。最初二時間で終わっていた清めは長くなり五時間を越えた。最後の結晶石に向う前、悠に一日の休日を与えた。とはいえ車は山から降りる事はなく張ったテントのなかでしかいられなかった。とくに話すような事は無くギターに手をかけ音を鳴らしていた。部屋を出るときに持ち出した荷物のなか、少年はノートとペンを特別大事に持っていた。

「最後の結晶石はどこにあるんですか？」

「この先、奈良との県境よ」

この時ばかりは悠の顔が曇った。滝川が過去のデータを見るとそれはすぐに察しのつく物だった。悠の身体の一部が消えた場所でもある。

「因縁の場所っていうのかしら。長瀬君にとっては」

「そんなもんじゃないよ」

「じゃあ時雨さんが目を醒ましたところ」

「かな」と曖昧に返事をした。

大阪から奈良へ向う山間部を走る高速道路。その中にある学園行きの出口が存在する。今より数年前、言霊使いの学園が日本に設置された。学園長の名前はコンラッド・フォースター。彼はドイツより自分の生徒を集め日本で生活を始めた。数年間にも及ぶ時の中、彼は白河夾という日本人魔術師と結託し反旗を翻した。学園にいた生徒数十名は連盟の魔術師たちによって捕まえられ本国へ強制的に送られた。

事件の首謀者であるコンラッドは死亡し白河夾は現在逃亡中である。そしてコンラッドとの戦いを任されたのは笹塚笙子だった。彼女は織戸慧、長瀬悠を伴って学園へと侵入。戦闘の中、コンラッド・フォースターを打ち取る事に成功したが白河夾は捕まえることが出来なかった。

なにより長瀬悠は両足を失った。
代りに得たのは時雨だった。

現在、事件より半年以上が経った。事件の後、首謀者がどうなったかは知らなかった。学園施設はそのまま存在している。今も戦闘の名残は見える事は出来る。高速道路の出口は封鎖されてはいるが知っている人間にとっては当然の道として進む事もできる。

また、コンラッド・フォースターの娘は神戸に再び学園を開いた。彼女は父の死後すぐにやってきて急遽工事をはじめたのだ。生徒も本国より集めた精鋭だった。

「見に行くこともできるわよ」

「行ってどうするのさ」

滝川は自分でも解るほど言い寄っていた。だがあまりにも少年の反応が少なかったため内側を覗きたくなっていた。しかし少年は興味を示さなかった。せっかくの休日も朝から晩までギターを弾いていた。曲作りに余念はなくその日だけで完成はしなかった。

第三章十二話

早朝より振り出した雨は強さを増していくばかりだった。最後の一つを目の前にして悠と滝川は車の中で雨が過ぎるのを待った。悠は今にでも車を出ようとするが滝川は許さなかった。雨ばかりではなく風も強かったのだ。二人のいる場所は林に囲まれていた。突風こそ遮られていたが目標となる結晶石は岩肌を切り取った崖の下にある。降りしきる雨は滝のように流れ落ちてくる。足場は悪く棘のごとく鋭い石が何個も溢れている。滝川の心配ははるか頭上。岩が崩れ落ちる可能性はない。少年を危険に晒したくは無かった。

雨は二日もの間、降っていた。車のなかにあつた食料は残り少なくなっていた頃だった。とはいえ車内にあつたのはカップめんが大半である。普通サイズのカップめんばかりだったが悠は全部を食べられなかった。大抵は麺を半分程度食べるとスープを飲めるだけ飲んで捨てていた。小食なのかと問うと好きではないと答えた。後にした部屋での生活でも一日三食口にすることは滅多に無く腹が鳴るまで食事をすることは無いのだと答えていた。それこそが悠の細い身体の原因であるとした。

山を降りればすぐにコンビがある。滝川が一度降りるかと考えた矢先、雨は止んだ。二日間降り続いた雨は石の棘をさらに鋭くさせたような感じがした。

外へ出ると青く晴れた空に目をやった。もう雨が降る気配は無い。雲ひとつ無い青が広がっていた。悠は一息つく暇も無くギターを構えると指をかけた。お腹が減っているはずなのにとつぶやく滝川の声は少年の音に消された。

岩を流れ伝ってくる雨の名残りが眼前の結晶石を輝かせる。水晶のように光を反射させ眩しく滝川は何度か目を逸らした。少年はその光さえも自身のものとして吸収しているかのように演奏を続ける。奏でる音はゆるやかに弧を描く蒼いオーロラを生み出す。空の青と

重なりといよいよとなった。

結晶石は三時間を費やして透明になった。それでも演奏をやめなかった。悠は結晶石を清めるためにギターを弾いていない。滝川は少年のしたいようにさせた。仕事は完了したのだ。あとは好きにさせても問題は無い。なにより予定よりもずいぶんと早く終わったことに次のことに目を向けねばならなかった。

少年を残し一人車に戻る。連盟へのレポート作成を書きながらノートパソコンの時刻表示へ目を向けた。カレンダーを表示すると一週間が経っている。笹塚笙子の用意した新しい部屋はもう住めるのだろうか。このまま少年を送り届けようかとも考える。レポートを入力するなか外を見ればまだギターを弾いていた。

シートにお尻が痛み出すまでキーボードを叩いていると肩をほぐすように上げて少年へ声をかけた。

「そろそろやめて降りない？」

「もうちょつと」

振り返らずに言った。何に対して演奏しているのか彼女にはわからなかった。少年は目を閉じていて空に向って弾いているようにも見えた。だから後何時間でも弾いていただろう。

近づく足音に気付くまでは。

「こつちから聴こえるよ」

かすかな声だったが滝川の耳には聴こえた。車を停めている場所よりも少し先から足音もする。悠は手を止めて振り返った。二人は目を合わせた。こんな場所に誰かがやってくることはありえない。

「まったく先生も最悪な仕事を押し付けるよな」

また茂みの奥から女の声がした。甲高い少女の声ははっきりと聴こえた。茂みが割れると「そんな事言うのやめようよ」と誰かが言った。先の声と同じく少女のものだと解る程度だったがどちらもしっかりと聞き取れた。

「やつと着いたわ。いたよ」

背の高い草を掻き分けて現れたのは狐のような髪と瞳をもった少

女だった。その後ろに続いている誰かへ声をかけていた。おそらく先程の少女だろう。滝川は現れた少女の制服に眉を上げて驚いた。薄い青の上下一体型の制服は彼女が見たことのあるもの。神戸にある言霊使いの学園が指定している制服だった。つまり彼女は言霊使いだということになる。

「はじめまして長瀬悠君」

背後の少女の手をとった。滝川は彼女の目に見えないように片手で携帯電話の受信記録を探った。だが情報はない。ここに言霊使いが現れるはずは無かった。

「その制服……」

滝川の目には少年の样子が怯えたように見えた。なんとなく少年へと歩く。小声で話ができる距離に寄ると「知ってるの？」と尋ねた。「ああ、この前襲ってきた奴と一緒にだ」と小さく返事した。

滝川は知らなかった。そんな情報はなかった。いや、知らされていないのだ。

それでも二人の制服少女は目の前で手を繋いでいる。こんな山中でスカートを履きおまけに茶色の革靴を履いている。どうやって山を登ってきたのかと制服についた枝や歯、それと泥に思いを巡らせる。

「誰？」

少年は言った。

「私の名前はトウコ。こっちはヨウコ」

やけに強気な女が言う。狐のほうだ。もう片方は黒い髪をしている。前髪は長く表情を読めなかった。目が隠れている。背も低く悠と同じくらいだ。トウコは空いた手で自分の髪を触ると指の隙間に髪が溜まった。量は少ないように見えた。

「あなた達ここに何のようです」

悠と二人の間に立つ。触っていた手をがさがさと荒っぽく搔くと「あー！」と叫んで地団駄を踏む。「落ち着いて」と小声で言うヨウコに大きく息を吸う。

「あのさ、あたしらここまで歩いてきたの。わかる？」

「知らないわよ」と冷たく返す。

「二時間だよ、二時間。あたしら山を二時間もかけてやってきたわけ」

苛立つ彼女の袖を引っ張る。

「トウコちゃん、お仕事しよ」

「解ってる。でもさ、あのおばさんどうする」

トウコが指を差したのは誰であろう滝川だった。

「お、おば……私はまだ二十八よ！」

「なんだ……ばばあか」

「なんですって！」

完全に頭がキレていた。血管が破裂したように顔を真っ赤にして怒ると二人へ向って足を動かす。逆にトウコはあ、と溜め息をついている。滝川が進みだすとすかさずヨウコが一言「セツト、止まりなさい」と言うと彼女の身体は世界から除外されたように制止した。光りの輪が辺り一帯を包んだ。

滝川が世界から除外されたのではなくその反対だった。悠と二人が除外されたのだ。流れ落ちる水は止まり風は止む。全てが制止したなかで悠は身体を動かせた。

「なにこれ？ 滝川さん！」

「呼んでも無駄だよ。聴こえてないもん」

「私たちの目的は君」

今度は悠を指す。

「あの氷室って女の仲間か」

「氷室……違うわよ。あんな女が仲間なわけないじゃん」

トウコは大口を開けて笑う。ヨウコも肩を震わせていた。二人の意図するところを読めずに緊張を強める悠とは間逆だった。

「私たちは先生に言われてきたんです。時雨を倒せと」

「ちよっとヨウコ、かってに喋らないでよ」

「こ、ごめん」

妙におどおどとしているヨウコはトウコの背後に隠れることになった。どうやらどっちがリーダーなのかははっきりしている。

「時雨を……」

「そう、あの生意気な女を倒すため君には人質になってもらうの」
(人質というわけか)

氷室との関係を否定する言葉は嘘とは思えなかった。

「簡単に捕まるはず……」

「違う？　じゃあさ、このばあどうすんの」

悠に勝ち目は無い。かといって捕まるわけにもいかない。しかもギターを弾き続けた後だ。体力も残っていない。なにより滝川をこのまま放って逃げるなどできるはずがなかった。だから「捕まってくればなにもしないわ」という提案に心が揺らいだ。

「保証は？」

「そんなものないわ。でも無理やりって言うなら力を使う。もうセツトしてるのよ、いつだって攻撃できるわ」

光りが作り出したこの空間こそが言霊使いの戦場。悠は足を踏み入れている。動きを止められた滝川も標的にされている。

「僕を人質にしたら時雨を倒せるっていうの？」

「勝つさ。あの人、逃げてばかりで戦ってくれないの。それって戦ったら負けるからでしょ」

「協力してください」

何が協力だと歯を擦る。行儀のよさがさらに苛立たせる。

「時雨には勝てないよ」

「そんなことないわ。私とヨウコなら勝てる」

「自信あるんだ。だったらさっさと戦えば良いじゃないか」

溜め息とともに空を見上げた。そして指の間に髪を挟んで悠を見た。

「言ってるでしょ！　時雨は逃げ回ってるって」

「トウコ」と背後で声をかける。苛ついているのが良く解る。しかしヨウコが握る手の力を強めるとその苛立ちも消えていった。恋人

のように指を絡めて互いを握る。紅葉する頬を見て悠は二人の關係が普通ではないと察した。

「僕は捕まる気はないよ」

「どうせそう言うと思ったよ。ヨウコ、やっちゃお」

「う、うん」

口数少なく顎を引くヨウコ。ようやく背後から現れることを許したのかヨウコが隣りに立つても何も言わなかった。そればかりか二人の間には情が沸き立ち少なからず鼓動を早める艶があった。女同士だというのに二人は互いの唇を見ていた。好きな者に対する目をしていた。

「逃げられないよ」

悠に逃げる気などなかった。滝川をこのままにしてはいけない。彼女の声は誰に言ったものなのか目はヨウコに向いていた。悠のほうは向いていなかったのだ。彼女の目には少年の姿はない。瞳に映るのは一人の少女。彼女の声はヨウコに言ったようにも聴こえた。ヨウコは口元を緩めて頬を染める。

「ふざけてる」

「いいえ、本気よ」

「光よ、私たちを包んで」二人が同時に言葉を走らせる。山にまたもや光が溢れた。悠は平衡感覚を失い立っていられなくなった。まるでぐにやりと曲げられたようだった。

「十秒待つてあげる。逃げたいならどうぞ勝手に」

言いながら笑っていた。視線が定まらない。逃げる以前の問題だった。立っていられず膝をつく。その衝撃で義足が外れそうになる。「逃げないの？」

眠りにつきそうな声だった。トウコの声だけが近付いている。ヨウコは不敵に笑って呟いた。悠は義足が大地と繋がったように感じていた。気分が悪くなっていけばかりだった。必死に首を上げ二人を見る。

「動けないでしょ」

「なんで？」

全身が言われたとおりに動かなくなった。義足さえも働かなかった。

「だって……ねえ」

くすくすと笑う二人。ヨウコは「早く行きましょ。先生に怒られるの私、嫌よ」と耳元に囁いた。するとトウコは彼女の耳元へお返しとばかりに言った。

「そうだったね。さっさと仕事片付けちゃおっか」

悠は仰天した。トウコはヨウコの唇に自分の唇をかぶせたのだ。

女同士のキスに口を開いて頭が真っ白になりかけた。重なり合う唇の赤がやけに美しかった。陽の光を浴びるなかで交わされるキスに時雨を思い出す。彼女はここにいない。

「やっぱりふざけてる」

「ふざけてないよ。好きなの」

二人が手を翳した。トウコは右手をヨウコは左手を悠へと向ける。片方の手は指を絡めて握り合っている。地上には光りの輪が広がり悠の意識ははるか彼方へととんだ。肩から掛けるギターに気を使う暇さえなくただ前に倒れるしかなかったのだ。

第三章十三話

午後七時、時雨は長瀬悠の電話へとかける。コール音が耳に届いたが少年は電源を入れなかった。二度、コールしたが結果は同じ。手元の表示は確かに少年の名前と番号を映している。さらに掛けた先では自分の名前が表示されているはずだった。

「どうしたものか」

悠と連盟よりやってきた特派員、滝川留美と別れて三日が経った。別れた理由はホテルで二人きりになった時だった。悠との仲は問題なかった。二人はいつも一緒にいて傍に寄り添っていた。しかし外部からの気配に時雨は気付いたのだ。まるでストーカーのように視線がずっと付き纏っている。

悠が寝付くと彼女はホテルを窓から抜け出した。泊まっていた部屋が三階だろうが五階だろうが関係なかった。窓から一飛びすれば風に同化して地上へ降りた。視線の正体は時雨を追ってきたが彼女は毎日のように逃げていた。面倒はかけなくなかった悠には。その悠へ連絡をしたが出ない。連絡する術は他に無い。

例の視線は二人から別れて二日後、完全に消えた。あきらめたのかと思ひようやく悠の下へと戻ろうとしているなかだった。だが場所がわからない。

連盟から支給されている彼女の携帯電話には滝川の連絡先は無い。そこまでの権限は与えられていない。時雨は笹塚笙子とイザナギの力によって行動を許されているに過ぎない。彼女への連絡はあっても逆は無い。

笹塚笙子の用意している新しい部屋はまだない。あっても場所は解らない。こうなれば悠のいる場所へ向うしかなかった。山の中でも悠の音が響けばすぐに場所は解る。

例え夜でも関係ない。時雨は絶対に悠の場所へ辿りつける自信があった。

「それにしても」誰も周りにいない。彼女は溜め息と共に夜の風へ混ぜた。まずは元いた天王寺の部屋を訪れる。当然ながら誰もいない。悠と出会いこの場所へ通う間、誰とも会う事は無かった。生活している人間はいるのか隣りの部屋に誰かいるのか調べる事すらなかった。無人のマンションを見上げる。

空には赤い月がまん丸と姿を作り出し光っていた。

認定試験のあと、電車に乗った。あの時、悠を連れ去ろうとした女の髪が思い浮かんだ。あれ以来、彼女は現れていない。今、悠を一人きりにするのは間違いかもしれない。マンションを去ろうとしたとき、電話が鳴った。愛想の無い着信音が鳴る。表示された名前は滝川留美。時雨はすぐに電源を入れた。

「時雨さん、私です。連盟の滝川です」

彼女の声は震えていた。時雨の返事など気にも止めずに話を進めようとした。

「さつき……いや違うわ、昼間、突然言霊使いが現れたの。長瀬君が」

最後まで聴くことなく内容を把握した。やはりかと思うなか目の前に現れた二人の少女に目をやった。外灯から零れる少ない光に照らされた二人。薄い青の制服に見覚えがあった。滝川の電話を無言で切った。

今度は悠の電話にかける。その間、二人から目を逸らさなかった。コール音が流れると同時に二人の少女のうち背の高いほうから音が鳴った。制服の下から着信音が零れてくる。時雨が電源を落すと着信音も消えた。一連の音は彼女が操ったものだった。

「どういうことか説明しろ」

ハハッと笑ったのは背の高いほう。外灯の光に茶色の髪が光っていた。まるで気に炉のように映っていた。スカートのポケットに手を入れると携帯電話を取り出した。時雨の目に映ったそれは悠の持ち物だとすぐ解るものだった。関西魔術連盟より二週間程度前に与えられたばかりの携帯は見間違うはずは無い。

少女は携帯電話を開くとリダイヤルのボタンへと触れる。すぐさま時雨の掌で携帯が震える。近づく気配を見せない少女は耳元に携帯を当てる。出る、ということかと通話ボタンを押した。

「お帰り、時雨先輩」

動く口から零れた声は耳元で響いた。時雨の声には答えずにニヤつきながらその場に立っている。

「説明しろと言った」

声は届いているはずだった。少女の声は小さかったが時雨の最初の声は確実に届いている。くすくすと笑う隣りの少女の声がひどく耳障りだった。

「それと私に後輩なんていない」

過去の事など憶えていない。自分の正体さえ掴めない彼女に解るはずも無い。先刻現れた氷室と言う女も似た事を言っていた。

時雨お姉さま

コートの下、肌にざらつく砂のような感覚が溢れていた。

「ホントに忘れてるんだ。そんなことと言ってるみんな悲しむよ。ねえヨウコ」

「そうね、トウコ」

受話器から漏れる声と話し声が二重になって聴こえる。時雨は携帯の通話状態を切った。

「トウコ、さつさと用事済ませて帰りましょう」

「いいじゃん。もうちょっと話そうよ」

手を繋ぎ互いに身体を寄せ合っている二人に時雨は腹を立てた。トウコの持つ携帯電話は紛れも無く悠のもの。辺りに悠の気配は無い。少年を感じられるものは携帯電話だけだった。

「何日も追いかけてやっと見つけたんだよ。ちつとはからかってまさ、バチは当たらないって」

「それもそうね。私も逃げる先輩を追うのはしんどかった」

「あの視線の正体はお前達か」

「だって先輩、夜になるとホテルを抜けるし、逃げてばかりでなかなか捕まらなかったんだもん」

「だから悠を？」

睨み付ける。少女二人組みは時雨の視線に怯えることなく「そのとおり」と答えた。

「簡単だったよ、奏者なんて」

「人質のつもりか？」

「違うよ。あの子は先輩が逃げないようにするためさ。今頃ホテルでぐっすり眠ってる」

「戦って頂けますね？」

無言で受ける。口を開く事すらなかった。かわりに腕を持ち上げ掌を見せる。二人の少女もそれが戦闘開始の合図であると了解した。「戦闘を了承したとお見受けします。トウコ」

「了解。セツト！」

二人の少女の足元より展開する三つの光輪。光は回転しながら広がるとき雨の足元にまでやって来る。外側に位置する光輪が脚に触れる。周囲に人はいない。空間は遮断されたように三人を囲んだ。するとトウコとヨウコは頬を赤らめたままキスを交わした。

「まったくふしだらな女どもめ。その携帯、返してもらっ」

すでに二人は自分達の世界を築いている。時雨はその手にもった少年の携帯電話が汚されたような気がしていた。足を踏み出そうとする時雨、だが先に唱えたのはトウコだった。

「刀！ 空より振る刃で切り刻む」

どこからともなくそれは現われる。外側に位置する光輪が光るとその上空より出現した。今、時雨が立っている場所だった。空を見る、まぎれもなく刀である。刃を下に向け時雨へと向かって振ってくる。だが最後まで見ることなく時雨は紙一重で回避した。こんなもの攻撃とは呼べない。彼女の思考が次へ移る。

「鎖！ 我の思うは氷の鎖」

足を止めずに口を動かす。翳した腕が狙ったのは右。

「ヨウコ！」

トウコが叫ぶ。時雨が狙ったのは小さいほうの少女だった。ヨウコの足元、氷の鎖は姿を現し彼女とトウコを引き離す。時雨の腕が動くとき鎖は連動して宙を舞った。トウコの叫びもむなしくヨウコはマンションを囲む塀に縛られた。

「悠がどこにいるか教えなさい。でないと殺すわよ」

鎖はヨウコの身体を蛇の如く這いずる。氷は零れる雫で制服を濡らしていく。

「ハッ、それはこっちの台詞よ。大人しくしないと悠くん死んじやうよ。解ってんの？」

時雨の意識が揺らぐ。鎖は彼女と同じだった。力の弱まる一瞬をヨウコは逃さなかった。黒い前髪の奥で目が光る。

「トウコに剣を与える」

「OK」

取り出したわけではない。トウコの手の中には剣が握られていた。刀身は薄く両刃だった。先端は鋭く全ての肉を貫くようだった。柄は金に彩られトウコの髪のように光る。

「彼女は疾風」

続いてヨウコは言った。時雨の目からトウコが姿を消した。刹那、時雨は身体が揺らぐ。氷の鎖は断ち切られていた。ヨウコは楔から解き放たれるや否やすぐにトウコの元へと駆け寄った。

「なるほど攻撃と支援か」

「そうさ、あたしがヨウコの剣！」

トウコは走る。風に紛れて駆け抜ける。手にした剣を振り下ろす。時雨は全ての動きを確認できなかった。まるで映画のフィルムを一枚……また一枚と見ているようだった。自分の身体を切り裂こうとする一撃をなんとか太刀筋を見て回避するのがやっとだった。口を動かし対抗するほど力を抜く事は出来なかった。

「ハハッどうしたんですか？ 先輩！ 逃げるだけですか！」

剣は幾度となく降りかかる。三度目の振りはコートの裾を切った。喉元を噛み切ろうとする刃に襟元が切れる。徐々に刃は時雨の身体に近付いていく。このまま回避を続けていても埒は開かない。

「氷の鉄柱」

着ていたシャツのボタンが連続で上から千切られる。さらに下の肌が露わになった。トウコの目には地上から突き刺そうと生え出す氷の塊が入った。身体を起こしふんばってありったけの力を込める。後ろに向って飛翔した。氷の塊は槍のように尖っていた先端を着きに向けていた。

二人の距離が開く。

「氷の雨よ、無数の刃で貫け」

「茨の盾は私とトウコを護る」

ヨウコが遅れて言った。さきほど刃の降った空は雲も無く氷を降らせた。氷は一粒の大きさが一センチ程度だったが先は棘のように尖っている。刺さればその速度から人間の肌くらいは貫通する。

トウコはヨウコの傍へ退避する。二人の足元から一歩離れたところから緑の茎が生えていく。降りしきる氷が到達するよりもはやく茎は成長する。緑の茎は太く逞しく互いに巻きつき膜のように二人に覆い被さった。茎には棘があり互いを突き刺していた。

氷の雨は隙間の無い壁に阻まれる。時雨はその先がどうなっているか見えなかった。氷の雨が止むのを待つ。刃が突き刺さり茨はすぐに氷を背負った。見た感じでは二人とも傷を負うようにはなかった。

姿が見えなくなったのはまずかった。

雨は止む。

しばしの沈黙が緊張をさらに強める。

効力が消えると鉄柱も氷の雨も溶けていく。

「茨の盾は誰も逃げられない楔となる」

無音に響いたのはヨウコの声。溶けていく氷の刃を散乱させる。氷と飛沫がはじけとぶ。覆っていたものなど何のその茨は棘を抜き

一本ずつ飛び出した。時雨はすぐさま飛び退いたが撓る一本に足首を捕まれる。地上に叩きつけられるとすぐに他の茎が四肢を捉えた。茎から伸びる棘が肉を抉り時雨は痛みに歯をかんだ。

「暴れないでよ」

歩き出すトウコは一瞬で時雨の耳元につく。手にした剣で左足を裂いた。

「先輩の足もーらい！」

「ぐうつあああ！」

傷口が灼熱のように熱く燃える。骨の継ぎ目から寸断される。途切れた左足、その足首に巻きついていた茨はまるごと放り捨てる。膝から下がなくなった。

「先輩さあ、パートナー見つけたほうが良かったんじゃない」

「なにを！」

「あたしら言霊使いは二人一組だって先生が言ってたでしょ」

再び剣を空へ掲げる。トウコの目は獣のようにぎらついている。瞳に映ったのはもう片方の足だった。腕が振り下ろされると膝の中央へと突き刺さる。背骨が折れるかと思うほど時雨は曲げた。剣は刺さったまま動かない。

「ねえ時雨先輩。悠くん返して欲しいですか？」

剣を左右に揺さぶると時雨は苦悶した。彼女の額には深い皺ができあがり汗が湧き出ている。歯を食いしばるがどうしようもない痛みがやってくる。問いかけに答えられる状況ではなかった。

「負けを認めてくれれば返してもいいですよ」

さらに足で腹を蹴る。

「うつうつ……ああっ」

「アハハハッ面白いわ。あの時雨先輩がこんな声を出すなんてね、ねえヨウコ」

「トウコさつさとけりをつけましょう」

見上げるトウコの瞳は常軌を逸している。瞳孔が開き正気を失っているようだった。それでもヨウコに対してだけは素直で彼女の言

葉には耳を傾けている。

「もう、優等生なんだからヨウコは」

時雨を蹴り飛ばして元のいた場所へと戻る。そしてヨウコへと口づけを交わす。顔を真つ赤にする二人。痛みを堪え見据えると縛る茎の緩んだ隙を逃さない。先にヨウコがしたように時雨もした。自由になる腕で這いずると二人を向く。腕を向けるがトウコの目に入った。

「まだ動くの？」

「攻撃なんかさせないわ。私の刀はトウコの剣になる。奴を斬れ」

トウコが風に乗る。手には日本刀が握られていた。黒く装飾の無い素気ないものだったが刀身は太く鈍く光る。そしてトウコは風を追い越していた。時雨の身体は呆気なく裂かれ今度こそ宙へ飛んだ。意識は消え瞳には赤い月だけが映っていた。ぶざまに転がる肉体は停止した。トウコは呆れながらも息を切らして近付く。血が流れそこらじゅうに飛び散っている。コンクリートは濁り外灯にもかかっていた。あたり一面に時雨の血は浴びせられていた。

トウコの制服にも同じように血が飛んでいた。青いなかに赤黒い濁点がいくつも染み付いている。

「全くしぶといんだから」

時雨は歪に曲がった身体を晒している。卍を象っているが一本だけ半分足りなかった。

「あ、いいもの見つけたよ！」

追ってヨウコが駆け寄る。トウコが時雨の傍で何かを拾った。白く味気ない機械の塊だ。戦う前、操作していた携帯電話である。拾うなり広げてメモリーを表示させる。浮かび上がったのは笹塚笙子と長瀬悠の二名分だけだった。他には番号だけが表示されている。それらはすべて連盟からの番号だった。彼女は一切、登録しなかった。

「代わりにこつちをやるよ。この携帯にGPSがついてるなら追ってこれるだろ」

言って制服から悠の携帯電話を投げた。時雨の胸に当たりコンクリートへ音をたてて転がった。時雨から溢れ出した血溜まりに落ちる。

「まだ生きてるの？」

「ああ生きてるよ。こいつ」

またしても腹を蹴る。しかし動く事は無かった。完全に停止していた。

「さあて学園に帰ろうか」

「そうね。先生が待ってるもの」

二人の足元に光が戻ってくる。広がった輪は収縮し主の元へと帰った。

第三章十四話

午後八時、長瀬悠の電話へとかける。白い部屋のなかで一人きりそろそろかと思いやり番号を押した。白河夾の手の中で少年の番号が光っている。コール音は幾度となく流れようやく相手が電源を入れたときには留守番メッセージが流れようとした時だった。

最初の十秒は無音だった。

夾も相手も声を発することはなかった。夾が声をかけたのは電話の先にいる人物が息をしていると知ったときだった。

「君の事だからあと三十分もせずに息を吹き返すよ」

その言葉はきちんと聴こえているのか不明だった。返事と呼べるものは無く息をしている音だけが受話器から流れてくる。今頃、生きるか死ぬかの瀬戸際と言ったところかと想像を膨らませるも心配などしていなかった。

「彼女らを倒さない限り君は悠くんを助け出せないよ」

「……はぁ……」

息をする度に声が漏れる。

「今度は本気で行きなさい。君なら勝てる」

部屋へと駆け込んでくる足音を背後から感じとると電話を切った。暗い部屋の中では携帯電話のモニターから光が溢れていた。たったそれだけの光へ目を向けていると床から伝わる足音がやってきた。それはまるで怪獣のように荒れていた。

足音はドアの前で止まると一息ついてから勢いよく開かれた。白河夾のいる部屋は最奥部になる。開かれたドアはリビングと繋がっている。リビングは電気をつけられていた。暗かった部屋に光が侵入した。

「まったく明かりもつけないで……あなたらしいって言えばあなたらしいけど。目が悪くなるわよ」

「今更、どうでもいいことです」

携帯電話を白衣にしまうとやってきた怪獣もといセルマ・フォー
スターへと目をやった。眼鏡の奥で捉える彼女はいつものドレスで
はなくスーツ姿だった。背が低く幼く見える彼女が着るとあまりに
も不釣り合いだった。だがその姿こそ本来の服装である。

「もう客人は帰ったのですか？」

「ええ、いけ好きな女だったわ。どの面下げて……ってそんなこ
とはどうでもいいの」

腕を組み無い胸を張ると視線を下にする。椅子に座る白河夾は彼
女の目線より下にいた。二人の背丈は頭一個分よりも大きく離れて
いる。こういう時でもないとありえなかった。セルマの目はそのま
ま彼の机へと向う。

「また甘い物ばかり食べてるのね」

机の上には先刻、届いたアイスクリームが透明の食器に盛られて
いた。色は鮮やかに六色となっており銀色のスプーンがかかってい
た。スプーンには白いバニラが乗っている。最後に食べたのはバニ
ラかと考えた。

「君に言われたくありませんよ、セルマ」と一口、すくって食べる
と彼の口の中ではミントの香りが広がる。すでに季節は秋となった
今でも彼は毎日のようにアイスを頬張っていた。そればかりか机の
上にはアイスだけでは飽き足らずチーズケーキやモンブランが用意
されていた。

「太るわよ」

「私は太りませんよ。それに言うならあなたも同じでしょう」
「なっ」

セルマは自分の服から漂う微かな匂いによやく気付く。さきほ
ど食べていた甘いチョコレートケーキの匂いが染み付いていた。こ
の部屋にはチョコレートはない。匂いの元はすぐに自分だと知られ
ている。

「そんなことはどうでもいいの！ ふふーん」

顔を火照らしながらも彼女は胸を張る。もう言いたくて仕方ない

という雰囲気だったが夾はその内容を知っていた。だから彼女に向ける目は関心のない冷たい眼差しだった。

「あんたのムスメ、あたしの園児が倒したわよ」

だからそんな事を言われても心は揺れもしなかった。夾の頭の中には電話で話したときの彼女が浮かんでいる。今頃、身体が修復されているところだろう。セルマが自慢げに話す内容とは違っていた。「なによ、その顔」

「倒したと言ったけどそれはどんなふうんです？」

さして興味を抱くことなく聞いた。

「普通に戦闘して、よ。文句ある？」

「ありませんよ。でも倒したと言うからにはなにか証拠はないのですか？」

その言葉を待っていたかのようにセルマは懷より携帯電話を取り出した。彼女らしい少女趣味のピンク色をしている。ストラップには黒猫を象った小物がついていていた。それが、と見入る夾へ開いてみせる。液晶画面に映っていたのは赤か黒かそれとも両方か濁った溜まりに横たわる美女がいた。

頭の中で想像していたものと何一つ変わらなかったが映像として見ると違った印象を受ける。夾は眉間に皺を作りセルマはその皺を少しばかりの愛おしさで見下して画面を弄る。美女の顔ははつきりと映し出される。

「これね、うちの子達が持ってきたのよ」

夾の表情が怒りに満ちていくのがよくわかった。携帯電話を下げる。

「どう？ これでも信じないつもり」

手に持ったスプーンはアイスをすくわなかった。金属のぶつかる音を立てて皿に乗る。口元を拭きながら彼は見上げた。すでに皺は消えていた。

「時雨を倒したというのなら彼女の中にある”石”はどうしました？」

「そんなの知らないわ」

セルマは考えるまでも無く言った。なぜなら彼女の元に送られてきた園児からの報告はこの画像と短いメールだけだった。

「体の中の石って何？」

夾が笑う。それならそれでいいと続ける。そしてそのしぐさにセルマは理解できずただ立ち尽くす。

「時雨はね、そんなことくらいじゃびくともしないよ」

「でも倒れてるわよ」

その通りだった。画面に表示された彼女は血の溜まりで倒れている。

「彼女は人間にあらず。その核は結晶石でできている。その核を取り出さない限り彼女は何度でも甦るよ」

「そんなことって」

「私が作つたんですよ。それとも嘘をついていると……どちらにしろ後、一時間もあれば本当か嘘かわかりますよ」

「それって……」

「さきほど連絡したところ彼女は再起動を始めていました。すべて私のプログラムどおり動くでしょう」

セルマはすぐに携帯電話を取り出した。夾が見ている前にも関わらずそのままりダイヤルした。

「ヨウコもう一度戦いなさい」

繋がるのとすぐにそう告げた。受話器から聴こえる声は夾の耳にも入ってくる。どうやら面倒がつているようだった。

「はあ？ いいからもう一回戦って体の中から結晶石を取り出してくださいって言うてるの」

「石よ！ 石！ そう。そう……じゃ」

「話は纏まりましたか」

「ええ。待つてなさい、今日中にあの子がやられる様を見せてあげるわ」

「期待しないで待つてるよ。でもね……」

両者、息を整える。白衣の裾を擦りながら彼は立つ。華奢で身体
の骨格が浮出るほどの痩せた姿がセルマの瞳の中で大きく映った。
吐く息は冷ややかで生物の暖かみは完全に失せているように感じた。
「時雨は私の最高傑作だよ。あれが負けることは無い。あと悠君は
こちらが引き取りに行くから傷をつけないでね。使い物にならなく
なると意味が無いから」

「何で知ってんのよ」

長瀬悠の所在について語らなかったはず。夾は微笑む。しかしそ
の表情がセルマに向けられたものではないと彼女自身も知っていた。
今、夾の瞳に映っている彼女の姿はただ見えている物にすぎない。
彼の心はべつのところへ向って伸びていた。

「いくら能力を失っても私は私だよ」

こちら日本へやってきてからというものの過ぎた年月は冷めたもの
だった。白河夾とともに過ごした年月でもある。といっても一年に
満たないがやはり少なからず一緒にいたわけだ。共にディナーをし
生徒の進路方針についても語った。

だが彼の本心は見えなかった。

麒麟についてもそうだ。彼はこのパソコン一台だけが用意された
世界で情報を得ていた。場所、時間までも正確に言い当てた。さら
にはジュリオ・ドーエが麒麟を日本に持ち込むことさえ当ててし
まった。

白河夾は自身の望みをかなえるだけだ。魔術師たる彼がそうさせ
ている。そんな事は承知している。しかし瞳に映る自分を少しは見
て欲しいと彼女は自分を見ていた。だから長く見つめていられなか
った。踵を返して部屋を立ち去ろうとする。夾は動かず彼女を見て
いた。

「笹塚が貴方の事気付いてるみたいよ」

「あの子は私の弟子だからね。それも想定範囲ですよ」

立ち去る背中に彼は言った。その声を無視したようにセルマは進
んだ。ドアを閉めれば部屋は再び暗闇と化す。闇の中で再び携帯電

話を取り出す。この部屋の中で誰かと話すことなどほとんどない。来客など氷室とセルマの二人しかない。誰かに連絡をとるなら必須となる。

「……はい」

今にも消えてしまいそうな声が聴こえる。先程の番号と同じだった。受話器の向こうでは表示された画面に非通知とされている。ようやく聴けた懐かしい声に酔いしれようとも考えたがそうもいかない。

「立ちなさい」

彼の言葉は電話越しにいる者の心を奮わせた。まるで呪詛のように身体を縛り胃のままに動かそうとする。風を切る音が雑音となって響いた。

「何をしている。はやく立ちなさい……時雨」

電話は切れる。向こうから電源を落したのだ。夾は通話の途切れた後も耳元から離さなかった。「はい」とだけ言った彼女の声に全身が震えていた。彼女と話したのは何年振りかと思いを巡らせる。足が震え電話を持った手が維持できないほど重く感じていた。

闇の中で独りを噛締めていると赤い髪を靡かせて氷室がやってきた。

「お父様」

「氷室、もうすぐですよ」

冷たい口で言ったその言葉は彼の発する熱よりも熱かった。

第三章十五話

神戸から大阪へと流れるレールの上、夜空の色が失われたなかでトウコとヨウコは並んで座っていた。周囲に人は少なく二人に向けられる視線は一つも無かった。二人とも存外に愛らしい成りをしていたが視線を向けるとトウコが鋭く睨みつけるため二度めはなくなるのだ。

「センサーもめんどくさい事押し付けるよね」

ぼやいていないとやってられないと肩を寄せ合って言った。ヨウコは無表情のままトウコを見ると「仕方ないわよ、セルマ学園長だもの」と返す。

長瀬悠の拉致により時雨はとうとう逃げなかった。戦闘に勝利を収めた二人はその戦果を報告した帰りだった。すでに空には見えないう星が出ていた。地上の光が強すぎて空は見えなかった。

二人が生きていくには学園長の命令は絶対である。今乗っている電車のお金もポケットに入った札もコインもすべて支給品である。言霊使いは捨て子や親元を離れた子供達が多い。彼女たちも同じだった。幼い頃発症した力を制御できる使い手は少ない。二人はこれまでの事例通り力の発症と同時に家を追い出される形でフォースター家にスカウトされた。年齢五歳だった。

少女にとって世界は一変する。他の学園生徒に到っても同じだった。言霊使いにとっての世界は学園という箱の中を指す。教員は親代わりであり学園長セルマ・フォースターは女王の如く君臨する。彼女の言葉は絶対である。その言葉に従い命令をこなしていく。学園の生徒にはじめから拒否権などない。

「あの子、きつとおなかを空かせてるわね」

「いいじゃん。今日一日くらい」

ヨウコは流れる地上の流星を見ていた。ビルの電灯が水平に流れている。光が伸びては消えるその光景がそんなふうに見えたのだ。

ビルの看板にドーナツ屋を見つけて彼女はふと思ったにすぎない。

「でも、私も空いちやった」

そう付け足すとトウコはいいよと返事した。二人は目的の駅よりも一つ手前で降りる。駅を抜けるとネオンで作られた光の洞窟を二人して歩く。同じ年頃の少年少女が闊歩し仕事を終えたサラリーマン風の男達が道に行く。少女特有の甘い香りを漂わせる店が続きようやくヨウコが食べたいと言ったドーナツ屋が現れる。

「百円セール中みたいよ」

「どうでもいいよ。あたしらお金ならいくらでもあるし」

渡されている日本の通貨は全部で十万円にもなる。年頃の少女にとって大すぎる額だった。だが少女達にとって価値観は普通とは違う。学園のなかで得た知識は乏しく外の世界で暮らせるほどのものはない。彼女たちは任務を達成する事こそ第一と教育を受けて育った。

「いらつしやいませ」とにこやかに笑う店員に近寄っていく。店員は透明のガラスケースを挟んだ向こう側に立っている。

「どれにする？」

各種ドーナツは揃っており店内には甘い匂いが立ち込めている。見渡せば学生服の少女たちが笑いあっていた。ヨウコはそんな姿を見ながらドーナツを選んでいく。ドーナツの隣にはアイスクリームまで販売されていた。彼女は最後にストロベリーアイスを指した。会計は三千円を超えたが気にしなかった。領収書も必要なかった。ナイロンの袋に詰められたドーナツを受け取ると店を出る。

夜風とコンクリートに紛れると携帯電話が音をたてて震える。当然のごとくセルマ・フォースターだった。突然の連絡だった。

「なんです？」

二人きりの間に割って入られるのは好きではなかった。突如、セルマの声が響いた。ヨウコも隣りで聞き入る。「なんですか、倒したじゃないですか」とトウコが答えるもどうやらセルマはずっと叫んでいるようだった。その声からは石という声が聴こえる。とに

かく煩いと思つてトウコは「解りました」と言つて切つた。

「先生、なんて？」

「なんでも時雨先輩の身体の中にある石をとつてこいってさ」

「石？ そんなものあつたかしら」

彼女の身体をじつくりと見たわけではなかった。しかし彼女の足を一本もぎとつた。肉の内側は見たが石などなかった。また服の下、胸の辺りを見たが変わつたところはなかったのだ。

「再戦できると思う」

「放っておけばくるわよ。そのためにあの子だつて……」

トウコが悠のことを口にしようとするヨウコは歩きだした。「ちよつと」と声をかけて追いかけるトウコ。

「どうしたの」

ささつと移動すると先にまわつてヨウコの顔を覗き込む。目を逸らすヨウコ。いつものくせだった。トウコはにつこりと口の端を持ち上げて微笑む。トウコが他の人の話をするような理由であれ癩癩を起こしたように距離をおこうとする。その度にトウコは彼女の手を握る。

「なんてことないよ」

「そうね」

手を取り合い駅へ向つて歩く。

「このまま消えちゃおっか」

夜の風がとても冷たかった。たとえ店から溢れる暖房が強くても関係なかった。空に星が一つも見えなかったが目を向けていた。

「そんなことしてどうなるの？」

「そのとおりだね」とヨウコは返した。途方も無い言葉だったのは確かだった。駅の改札を抜け人気の無いホームに立つと電車を待った。取り合つた手は熱く力は強かった。汗がじんわりとにじみ出ている。指の隙間に風が通る度に熱が冷めた。

「またアイツを倒さなくっちゃだね」

「うん」

電車がホームにやってくる。たった一駅だから歩けばよかったのかもしれないとトウコは考えた。そのほうが二人でいられる時間は増える。長瀬悠のことなどどうでもよかった。何よりも一番に考えるのはお互いのことだった。

電車が停まるとき鉄が擦れる音が響いた。誰一人として少女たちに目を向けていなかった。二人は強烈な風のなかで今日何度目かわからないキスを交していた。

第三章十六話

ミルクのように白い肌に鞭が放たれる。肌が赤く腫れあがった。ハンドタオルで作った猿轡をかまされたトウコの口から涎と喘ぎが漏れる。

「静かにして、あの子起きちゃうわよ」

トウコとヨウコは一時の楽園を築いていた。楽園の中ではヨウコが女王となりトウコは虐げられる下女である。二人は白のベッドの上で悦に浸っている。ベッドには黄金の屋根がついており薄い膜のような布で仕切られている。

大きな屋根の下で跳ねるトウコの身体はすでに尻が赤くなっていた。下着はつけておらず裸身である。何一つ隠すことはできず腕はベッドに縛られている。四つん這いの状態から腕を縛られている。彼女の目にはマスクがつけられていた。垂れる涎は染みを作っている。

「もう一回」

ヨウコが腕を振り上げ一気に降ろす。手ににぎられた鞭の先は平らになっている。三センチ程度の四角い点が白を赤に変える。痛みを背を曲げ鼻息を荒くする。赤くなった尻に舌を這わせて愛を囁く。震えるトウコはその声に返事をしたくても出来なかった。

「わたしトウコが好き」

トウコは性器からも涎をたらしていた。ヨウコがふとももから指を這わせれば興奮し透明の液が流れてくる。それこそが返事となりヨウコを昂ぶらせていく。

二人がこのような行為をはじめしたのは随分と昔になる。言霊使いはパートナーと共同生活を送る事になる。巨大なマンションの一室を与えられ夫婦のように暮らす。授業中以外は部屋かマンション内にある喫茶店で時間を過ごす。距離が縮まるのは時間の問題だった。どの言霊使いも同じだ。彼女たちだけが特別ではない。二人

は互いの身体と心を求めて貪った。

そのうちヨウコはトウコに対してサディスティックな行いを始める。トウコは普段の強気な言動とは違いその身を投じた。彼女のなかにはヨウコへの心が詰まっていた。お互いが依存しあっていた。「大好きよ。愛してる」

猿轡を外すとトウコは「私も」と言った。そして腰を振り性器に触れた指を求めた。くすりと笑ったヨウコは指を入れる。恍惚に酔う。指はヒダを掻き分け中へと進んでいった。背中からかぶさると耳にキスをする。指を奥まで入れてかき回す。トウコは激しくなるほど声をあげ歓喜する。すると隣りの部屋で音がした。

「起きちゃったかしら」

「あんなのどうでもいいじゃない。もつとしてえ」

止まった指に自分から腰を動かす。極限まで高まっていた感覚がさらに刺激を求める。ヨウコも同じだった。彼女に刺激を与える事で自身にも快楽を得ていた。すでに二人とも又は濡れきっている。腕をベッドから解き放つ。猿轡を外して抱き合う。息が出来なくなるほど強い包容をしながら互いに性器を擦りつけた。やがて絶頂に達し声たからかに昇天した。

「えっち」

「トウココそ」

頬は赤くなっている。まだ興奮が冷めないなかでベッドの傍に脱ぎ捨てていた下着を手にする。白く素気ない可愛げのないものだった。

「シャワー、浴びないの？」

「いいや」

愛の証は股の間だけではない。身体の到る場所から溢れていた。匂いもついていた。

「やっぱりえっちだよ」

二人ともそれでよかった。下着はすぐに染みを作る。気色の悪いことなどない。相手を感じると笑いあった。制服を着るとようやく

ベッドから出る。赤い絨毯に足を置くと進んでいく。

「おはよう、悠君」

リビングへ入るなり声をかける。二人用のソファーには義足を外された長瀬悠がいた。身体を起こしていたが足が無いため移動できなかった。辺りを見渡してもギターは無く義足も無かった。

「探し物はこっちの部屋だよ」

「どういうつもり？」

少年の足は情報どおり寸断されていた。切れ目には皮がひっついていて。最初からそこで終わっているかのような形をしていた。義足を脱がしたとき二人はお互い顔を見合わせて気味悪がった。どうやればこんな風になるのか。彼女たちには想像もつかなかった。

「どうもこうもないよ。悠君には人質になってもらうだけ」

「そこで大人しくしてて」

火照った二人から漂う牝の香りが悠の鼻先をくすぐる。妙に生々しい匂いに悠は顔を背ける。

「僕のギターはどうした」

「あるよ。義足もこっちに置いてる。時雨先輩をもう一回倒したら返してやるよ」

背を乗り出して見てみるが悠のいる場所からは覗けなかった。そして「もう一回って何？」と言った。ヨウコが一步前に出る。

「私たちが一度倒したということよ」

冷静に言って冷蔵庫のほうへと歩く。悠からは手を伸ばしても届かない場所にある。冷蔵庫の中にはペットボトルタイプの水が何本も入っている。ヨウコは一本取り出すと悠へと投げた。うまく掴むとヨウコを見る。彼女は同じペットボトルを二本掴んでいた。

「飲めってこと。それと腹が減ってたらそこにドーナツあるから」

今度はトウコが言った。ヨウコは傍に戻り彼女に差し出している。悠はソファーの前に置かれた紙パックに目をやる。たしかにドーナツの画が描かれていた。

「人質じゃないの？」

「べつに逃げたきや逃げてもいいよ。逃げられるならね」

悠の目には部屋の外へ繋がるドアが映っていた。二人の少女はドアまでの間を塞ぐことなくじゃれついている。

「外に出ても誰もいないわよ」

「でもその足じゃ無理よね」

義足は彼女らの部屋にある。ましてギターを置いたまま逃げられるはずはなかった。

「ましてやここは三階よ。逃げるなら頑張つてね」

「逃げるな。ここで待つてたら時雨が来る」

「ふん」

悠はしばらくトウコとにらみ合ったが何も解決しなかった。とにかく攻撃してこないというならそれでいいと悠はドーナツへ手を伸ばした。二人はまた部屋へと戻っていった。紙パックのなかには十個ものドーナツが並んでいる。悠はチョコレートが塗られている一つを手にとると一口頬張った。舌から甘さが伝わると天井へと目を向ける。身体を預けるソファは悠の軽い身体を受け止めている。

「時雨」

彼女の名前を呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5091y/>

幻想組曲

2011年12月25日12時56分発行